

広島大学文学部紀要  
第58巻特輯号3

近代ドイツ文学に描かれたEhreの諸相

武田智孝

1998年12月

# 近代ドイツ文学に描かれた Ehre の諸相

武 田 智 孝

## はじめに

Ehre<sup>1</sup>の問題に筆者の関心に向け、それについて考えるきっかけを与えてくれたのは学生たちで、一つは *Maria Magdalene* (1844) についての卒論、もう一つは *Effi Briest* (1895/6) を演習で扱った際の院生たちの反応である。

『マリーア・マグダレーナ』論ではクラウラが自殺へと追い詰められて行く原因としてアントン親方の「世間体」ということが言われていて、西洋文学を論じる際に、そういうあまりにも日本的な言葉を使うことに抵抗を覚えたが、それ以上に、Schande には耐えられないというアントン親方の台詞から、世間体、体面といった日本語ではとうてい言い尽くせない激しき、厳しきを感じられて、そのことの方が一層気になった。Schande は Ehre の喪失であるが、親方がそんなにも重んじているらしい Ehre は、彼が若い頃世話になった師匠に対する徹底した報恩行為の背後にも感じられて、親方が失うことをあれほど恐れている Ehre とはいったい何なのかという疑問が頭を離れなくなった。

一方『エフィ・ブリスト』の演習では、例の手紙の束が出て来てエフィによる数年前の不倫が発覚し、インシュテッテンが決闘と離婚を決意するところで学生達がほぼ一様に大きな違和感を示した。たまたまエフィの手箱の底から出て来たエフィ／クランパスの古い「恋文」の束を見てしまった後のインシュテッテンの処置如何によっては破局は十分回避できたはずで、既に数年を経過しているにもかかわらずクランパス相手の決闘に赴き、離婚を決意するに至るインシュテッテンの論理はどうしても理解しがたい、あまりにもかたくなにすぎる、妻に対する真の愛情が足りないのでは、というのが学生達の感想だった。インシュテッテンの迷いと逡巡、相談のために呼んだ友人との緊迫感に満ちた対話などが詳細にわたって書き込まれているにもかかわらず、その論理は無視するか軽視して、その際ふさわしかったのはインシュテッテンの側からの寛容と赦しだったのではなからうか、というのがゼミ参加者の意見だった。プロイセンの高級官僚インシュテッテンは文学研究者たちの間でもおおむね評判が悪く、人間味の乏しい出世主義者、というのが大方の人物評であって、学生達の反応もこれに矛盾しない。

しかし江戸時代における「仇討ち」の制度のように、どんな時代や社会にも

それぞれ独自のしきたりや掟があり、それをインシュテッテンは友人との対話の中で「われわれを暴君的に支配しているあの社会的な何か (jenes --- uns tyranisierende Gesellschafts-Etwas)」と呼んでいて、「その前では (エフィの) 魅力も愛も歳月の経過も問題にならない。私に選択の余地はない。私はやらねばならない」 (Effi. 268) と言っている。ここでも Ehre という言葉が出て来て、(妻の不倫という)「自分の Ehre における汚点」が一人でも当事者以外の人物 (友人のヴェラースドルフ) に知られてしまった以上、もう後へは引けない、という論理が語られている。決闘に一定のルールとマナーが決められていたことから分かるように、19世紀の終わりですら貴紳は自らの Ehre が傷つけられた時には、その作法にしたがって Ehre 回復の儀式を行なう勇氣と気概を示さなければ、貴紳として尊敬を受ける資格はなく、社会的信頼を失う、といった雰囲気はまだ残っていたことがそこから読み取れるのである。

だから、いったんそのような論理が二人の対話から理解できてしまい、既に事件から数年を経過していることもあって妻やその相手に対して怒りも嫉妬も覚えず、裏切りを知った今でも依然としてエフィの飾らない人柄に魅力を感じ、彼女を愛さずにはおれないというインシュテッテンが逡巡の末やはり Ehre の掟の命ずるところにしたがって決闘と離婚を決意するに至る経緯につき合わされると、宰相ビスマルクの覚えめでたい高級官僚で一見冷徹な「原理原則の人」 (Effi. 35) と見られているインシュテッテンが実際には冷徹な社会の無言の掟の圧力に圧されて、その温かい人間的感情を否応なく踏みにじるべく追い詰められて行く犠牲者にさえ私には思えてきたのである。インシュテッテンの冷徹な論理に対する反発というのではなく、ほとんど形式と化してしまったかに見える Ehre 回復の儀式を、にもかかわらず、遂行しなければならない立場に追い込まれてゆくインシュテッテンの不幸に対する同情である。エフィだけではなく、彼女とはまったく違った形ではあるが、インシュテッテンもまた当時の社会の犠牲者ではなかったかという思いを禁じ得ないでいたのは、ともかく教室の中ではどうやら私一人のようであった。

いったい、このような犠牲を強いる苛酷な Ehre の正体とは何なのか。

「神明裁判 (Gottesgericht) なんてもんじゃない、(中略) —— Ehre のた

めのわれわれの儀式は偶像崇拜の一種さ、しかしこの偶像が倒れない限り、われわれはその前に拝跪するしかないのだ (unser Ehrenkultus ist ein Götzendienst, aber wir müssen uns ihm unterwerfen, solange der Götze gilt.)」(Effi. 269) とインシュテッテンの友人は言うが、Ehreなんて「神」ではない、「偶像」であるということをも承知している醒めた高い知性の持ち主が、それでもなおその命ずるところにしたがって行動しなければならない Ehre とはいったい何なのか、それが19世紀の終わりですらこれほどの強制力を持ちえていたというのはいったいどういう事情によるのか・・・、演習に参加した学生たちが口にしたインシュテッテンの行動に対する素朴な反発がきっかけになって感じたそのような疑問が以下の考察の出発点の一つになっている。

思い返してみると、『マリーア・マグダレーナ』や『エフィ・ブリースト』のみならず、近代ドイツ文学には Ehre とか Schande といった言葉がやたらと頻繁に出てくるばかりか、実際それによって登場人物たちの行動や人生が左右される作品が思いのほか多いことに気付く。上の二作品以外にも、

Gotthold Ephraim Lessing: *Minna von Barnhelm oder Das Soldatenglück* (1767)

Friedrich Schiller: *Der Verbrecher aus verlorener Ehre* (1786)

Clemens Brentano: *Geschichte vom braven Kasperl und vom schönen Annerl* (1817)

Adalbert Stifter: *Das alte Siegel* (1843)

Hermann Sudermann: *Die Ehre* (1889)

Heinrich Böll: *Die verlorene Ehre der Katharina Blum* (1974)

などが挙げられるだろう。私は読書範囲が狭く、知識が乏しいのでこれ以外にも重要な Ehre 文学があるのに見逃しているにちがいない。この点について—— だけではないが—— 諸兄からのご教示をお願いする。

これ以外にも中世の宮廷文学や騎士文学では必ず *êre* が出てきて極めて大きな役割を果たしているし、貴婦人の Ehre を守ったり、婦人の傷つけられた Ehre を当人たちに代わって回復すべく騎士どうしが決闘で黒白を決する話は Kleist の *Der Zweikampf* や Wagner の *Lohengrin* などにも出てくる。ベルが

*Die verlorene Ehre der Katharina Blum*を書いた時にも、婦人の傷つけられた Ehre を回復するべく剣を取って立ち上がった昔の騎士の姿が彼の脳裏をよぎっていたかもしれない。それ以外にもふとした契機に Ehre や Schande が問題にされ、登場人物たちの行動に何らかの影響を及ぼすケースまでも入れるならば、そういった作品はおそらく枚挙にいとまがないのではないだろうか。

しかし、名誉というより榮譽・栄光・武勲・名声といった近代とは幾分か違った意味で *êre* が用いられていた中世を別にすると、上に名前を挙げた作品で Ehre が演じている役回りはおおむね問題的で、人間関係に破局を招き寄せる契機になっている場合が多い。しかし Ehre を重んじる人間にはテルハイムのように清廉高潔な人間が多いのも一方では事実である。

多くの者が命を賭け、愛を断念し、幸福を諦めてでも守ろうとする Ehre とはいったい何なのか、Ehre はどのような消長のプロセスをたどって現代に至っているか、先に掲げた近代ドイツ文学の作品に描かれた Ehre の諸相を手掛かりにこういう問題について考察することが拙論の目的である。

本論に入る前にまず西欧社会における Ehre 概念についての言語的、社会文化史的な基礎知識を確認しておきたい。

## 序論 Ehre に関する予備的考察

上に挙げた作品の幾つかの翻訳を覗いて見ると、Ehre にはコンテキストに応じて名誉、体面、面子、意地、誇り、自尊心——など、実に様々な訳語が当てられており、訳者の苦心の跡が偲ばれる。これらの訳語とドイツ語の Ehre との間にある程度の接点や類似点があるのは当然だが、Ehre に限らず、一般に長い西欧の文化や社会の歴史の中で使われ、人々の生活や感情が染みついている言葉を、違った文化的伝統を持ち、社会構造も異なる国の言葉に過不足なく置き換えることは不可能に近く、それが分かってもやはり何らかの訳語を当てなければ翻訳は成り立たないのだが、そうした途端にその訳語が独り歩きを始めてしまい、いつの間にか Ehre に染みついた社会文化史的な背景の方は忘れられてしまう。拙論のようなテーマの場合は特に、Ehre というドイツ語の背景にある社会や文化の歴史を意識化する作業を抜かすわけにはゆか

ない。

ところが書誌を調べてみても Ehre に関する著書、論文はなかなか見あたらない。そういう中であって、今から30年ほど前、1969年に雑誌 Merkur に Harald Weinrich が発表した *Mythologie der Ehre* という論文が目を引く。これは雑誌論文だから大部のものではないが、Ehre にまつわる問題点が1500年から1900年に至るヨーロッパの文学にどのように表現されているかを中心に論じていて、筆者の関心とも重なるところが多い。また、論点をもっぱら文学の世界に限るということなく、ヨーロッパの歴史と社会における Ehre 消長の経過にも関心が払われていて、筆者はそこから多くの貴重な教示を得ることができた。そういう次第で、この Weinrich 論文に依拠しながら Ehre の社会文化的な背景とそれがはらむ問題点について基本的な認識や知識を整理しておきたいと思う。

ただ、この章の最後にも総括するつもりだが、Weinrich 論文にも不足がないわけではない。完璧なら新たな考察は必要ない。そういうわけで、碩学に対して僭越ではあるが、Weinrich 論文紹介の途中に筆者の異論や疑問を差し挟みながら記述を進めて行きたい。段落の初めに (Weinrich) :あるいは (筆者によるコメント) : というのを挿入して区別をはっきりさせる。

(Weinrich) : ルネッサンス以降スペイン、イタリアを中心に熱い関心を集めるようになった Ehre 概念は人物の徳や人格など実際の価値とは無関係の、もっぱら「社会的な価値」であり、「周囲の社会による承認 (die soziale Billigung der Umwelt)」、つまり普通「外面的 Ehre」と呼ばれるものを意味した。「社会的承認 (die Billigung der Öffentlichkeit)」という場合の「社会」とは社会一般ではなく、「身分ある人達の同質的な集団」を意味する。この「身分ある人達の集団」は初めは貴族社会や主に貴族からなる外交官や将校クラスの軍人社会に限られていた。Ehre はもともと身分的特権だったのである。だが、それがやがて学生社会にまでも拡がり、学生は帯刀を許されて、Ehre を守る権利と義務を得、やがて政治家、大商人、企業家が Ehre の特権と義務に与かるようになった。身分的特権 Ehre にも民主化の歴史があったわ

けである。一方、そういうプロセスとは無関係に、民主化以前に、市民社会においてもいわゆる *unehrliche Berufe* (賤業) と呼ばれる階層の者たちが生まれ、*ehrlich* な市民層から差別され、蔑視されるようになっていた。

(筆者によるコメント) : *Weinrich* は *unehrliche Berufe* (賤業) と呼ばれる階層の者たちと市民層との問題について詳しく述べていない、というより、*Ehre* のこの側面を彼の考える *Ehre* 概念から切り離してしまい、市民社会の *Ehre*、ギルド所属の商人やツunft所属の職人の *Ehre* を度外視して論を進めている。だが、シラーの『失われた *Ehre* からの犯罪者』(以下『犯罪者』と略記) や『マリーア・マグダレーナ』などを理解するためには *ehrlich* な市民からなる *Ehre* ある市民社会という視点は欠かせない。わが国の優れた西洋史家たちの研究を通してわれわれは、同業組合に所属する *Ehre* ある商人や手工業職人の階層から排除された賤業、賤民の成立と消滅について知識を与えられ、普段目にする *ehrlich* とか *unehrlich* が、正直、不正直とはまったく異なる意味合いで用いられる事実とそのいきさつを教えられる。そういう知識があって初めて、例えば『マリーア・マグダレーナ』でアントン親方が口にする廷吏アーダムへの差別発言がどのような歴史的背景を持っているかが理解できる。*Weinrich* が貴族階級の *Ehre* にのみ焦点を合わせ、市民社会における身分差別的な *Ehre* を無視するのは、*Ehre* という概念を理解する上で支障になる。

(*Weinrich*) : *Ehre* の源泉は君主であり、そこからすべての *Ehre* が発し、皇帝、王、領主は *Ehre* の体現者、*Ehre* そのものである。君主は *Ehre* を超越していて、*Ehre* を傷つけられ、失うことはありえない。*Ehre* は君主制と結びついた価値概念であって、君主制を支える原理、原動力である。民主制では *Ehre* に代わって *Tugend* (美德) が、独裁制の下では *Furcht* (恐怖) が中心的な役割を演じる。

*Ehre* と緊密に結びついた言葉や概念として誰でも *Beleidigung*, *Schande*, *Duell*, あるいは *Zweikampf* を知っているが、*Ehre* は「自らの価値についての他人の意見」であるから、失われるのも他人を通してである。*Ehre* が失われた状態が *Schande* であり、侮辱 (*Beleidigung*) によって傷つけられた *Ehre* は回復されねばならない。それは血讐 (*Blutrache*) か決闘 (*Zweikampf*),



Duell)、つまり血をもってである。血讐は古い形であり、近代では決闘が普通である。

婦人は男と違って身分による制限を受けず、生来 ehrbar であり、誰でも Ehre を持っている。婦人の Ehre は未婚の娘と人妻とでは異なる。未婚の場合、娘の Ehre は純潔 (Jungfräulichkeit, Reinheit) であり、これが失われたとき——それは噂によってだけでも失われる——彼女は彼女を誘惑した男——多くはお胎の子の父親——と結婚することによってしか Ehre を回復できない。通常、誘惑するのは身分の高い青年であり、誘惑されるのは市井の素朴な庶民の娘であって、早い時期の「市民悲劇」はほとんどが貴族青年による庶民の娘の誘惑を扱っている。上流階級と下層階級の出逢いの場合はこういう誘惑や恋にしかなく、上流階級と下層階級とが Ehre をめぐって対立する場はここにしかなかった。

(筆者によるコメント) : Weinrich は、ドイツ人にとってはそれが常識だからであろうが、この問題をあっさり通り過ぎている。しかし、Ehre を失った娘をどんなに残酷な宗教的社会的制裁が待ち受けていたか、それを怖れるがゆえに誘惑されて捨てられた若い娘による子殺しがいかに頻繁に行なわれたか、いかに数多くのそういう気の毒な娘たちが極刑をもって罰せられたか、ドイツ文学にはグレートヘン悲劇を初めとして Kindesmord を主題とした作品がいかに多いか——、日本人にとって Ehre をめぐると興味深い問題点の一つがここにある。ちなみに拙論で取り上げる作品の中では『健気なカスペルと美しいアンネルの物語』と『マリーア・マグダレーナ』がこの問題を扱っている。

(Weinrich) : 人妻の Ehre は娘の場合とはおおいに異なり、人妻が誘惑されることによって Ehre を失うのは彼女自身ではなく、妻を寝とられた夫の方である。コキユにされた夫は妻を離縁し、妻の誘惑者、愛人と決闘してこれを倒すことによって失われた Ehre を取り戻す。

(筆者によるコメント) : こういういきさつを描いた文学作品はヨーロッパではそれこそ枚挙にいとまがないであろう。先程触れたインシュテッテンの立場はこれにあたる。その後のエフィの人生を見ると、姦通した妻の方も、19世紀末ですら、相当にきつい社会的制裁を受けねばならなかったことが分る。こ

れは南欧とドイツとでは違うかもしれないし、身分によっても異なるであろう。また、決闘で倒されるのはいつも誘惑者の方とは限らない。

Weinrich が未亡人のケースについて言及していないので付け加えておくと、寡婦は未婚女性の場合に似ていて、周囲の同じくらい厳しい眼差しによって監視されていたのではないだろうか。Kleist の *Marquise von O...* や *Der Zweikampf* を読むとその間の事情が察せられる。未亡人である侯爵夫人が身ごもったと知った時、あのように大胆な新聞広告を出してまでお胎の子の父親を探し出して結婚しようとしたことは、そういう背景なしには考えられないことだし、寡婦の身でありながら夫人が身ごもったと分った時、彼女の家族がいかに激しい非難を彼女に浴びせかけるか、酷薄とも言える扱いを彼女に対して行なっているか、そのことから、未亡人の身持ちを監視する周囲の眼の厳しさが推測できるというものである。

(Weinrich) : 16, 7 世紀になると *Ehre* を主題とした文学作品、特に *Ehrendrama* と呼ばれる *Ehre* をテーマとした戯曲が数多く生み出されるようになるが、これは *Ehre* がもはや自明の価値ではなく、他の価値と競合する問題なものになりつつあったことを意味している。*Ehre* と競合し、人物たちを紛糾と葛藤に巻き込む他の価値とは愛や友情といった私的、日常的な次元の価値である。今やそれらが公的、社会的な価値である *Ehre* と競い始めたのである。しかしまだその当時は公的価値である *Ehre* がやはり優勢であったが、時代が進むにつれて *Ehre* と愛との戦いにおいて別の解決の可能性も仄めかされるようになる。愛の方が *Ehre* に優先するのではないか、ということを示唆する作品も出てくる。

(筆者によるコメント) : この指摘は拙論にとって重要である。これから論じようとしている作品のうち『*ミンナ・フォン・バルンヘルム*』、『*マリーア・マグダレーナ*』、『*古い印章*』、『*エフィ・ブリースト*』ではまさしく *Ehre* と愛の葛藤が問題になっている。『*ミンナ*』ではまだ *Ehre* は愛と並んで重要な位置を与えられているが、しかしそこですら既に *Ehre* とそれに結びついた徳がやんわりとした諷刺の対象にされかけている。『*マリーア・マグダレーナ*』や『*古い印章*』では *Ehre* を重んじすぎたことの罪が裁かれ、『*エフィ・ブリー*

スト』では、過ちを犯した妻を未だ愛しており、Ehre 回復のための昔ながらの決闘儀式がもはや形骸に過ぎないことを知りながら、なおも偶像と化した Ehre の命ずるままに行動して、愛のない砂漠の中に取り残される男の悲哀が描かれている。

(Weinrich) : Weinrich は現実社会にも目を向けて、16, 7 世紀には文学の中でだけ Ehre が注目を浴びたのではなく、現実にも1589年から1607年に至るわずか20年足らずの間にフランスだけで約4000人も貴族が決闘で命を落とした事実を挙げ、1938年に至ってもドイツの軍隊では決闘の作法を指南した「Ehre の保持 (Wahrung der Ehre)」なる規定書が最高司令官によって軍人に配布された事実を報告している。しかし16, 7 世紀以来のこれらの貴族たちや将校たちはもはや彼らの Ehre を自明の特権として持っていたわけではなく、命を失う危険を冒してでも決闘を演出し、Ehre ある階級としての彼らの役割を演じることによって、自らの階級的特権を見せびらかしたのだ、と Weinrich は言っている。

(筆者によるコメント) : そういうケースも数多くあっただろうが、すべてをそうと決めつけるのは行きすぎで、インシュテッテンの場合はもっと苦渋に満ちた選択だったし、社会の無言の圧力に押されるようにしてやむなく決闘に臨んだ者は他にもたくさんいたはずである。

(Weinrich) : だが、16世紀以来 Ehre は衰退と空洞化の一途をたどったと言われるとき、われわれは Weinrich の説を傾聴しなければならないだろう。16世紀以来演劇を中心にして Ehre がテーマとして盛んに取り上げられるようになったことと並行して小説の領域で新たにピカロが登場したという事実 Weinrich は注目している。ピカロは賤民階級、あるいは、少なくとも Ehre などとは縁遠い階級の出身者たちで、ことあるごとに Ehre を茶化し、貴族階級や Ehre ある市民階級のもったいぶった態度や差別的言動を笑い物にするだけでなく、それに対して手厳しい報復をも行なっている。

(筆者によるコメント) : ドイツではまさしくティル・オイレンシュピーゲルがそうである。ティルが Ehre を笑い物にするだけでなく、Ehre ある市民階級の差別行為に手ひどい報復を行なっていることは、阿部謹也も指摘してい

る<sup>2</sup>。Weinrich は Ehre を小馬鹿にした肝っ玉おっ母のピカロ的な台詞を引用しているが、プレヒト劇の主人公たちは多くがピカロの末裔たちである。

(Weinrich) : ピカレスクと並んで Ehre の解体作業を押し進めたのは喜劇と、それにフランスを中心に活躍したモラリストたちで、彼らのエスプリに満ちた批判の眼差しによって Ehre 的価値観や作法は愚かな因習のシステムにすぎないことが暴露されていった。

Ehre の解体に決定的な働きをなしたものの一つとして Weinrich はド・トックヴィルの『アメリカの民主政治』を挙げている。トックヴィルは民主制のアメリカに Ehre を重視する価値観は認められず、Ehre は貴族制社会の根本的な不平等を前提として成り立つものであり、Ehre という奇妙な原理は平等とは相容れない、社会的平等が実現されるにつれて Ehre は消滅する、と考えていた。この書物が書かれた1835-40年頃に啓蒙主義がようやく普及して民衆が Ehre を批判的に見る水準にまで達し、Ehre の脱神話化は最終局面に入ったと Weinrich は述べている。

(筆者によるコメント) : Weinrich は貴族階級の Ehre について書いているのだが、市民社会を舞台にした『マリーア・マグダレーナ』と軍人の Ehre を問題にした『古い印章』はともに Ehre ゆえの悲劇と呼ぶべきもので、Ehre 的価値観に対する痛切な批判になっている。書かれたのはいずれも1840年台半ばである。1817年に書かれたブレンターノの『カスベルとアンネル』は時代的に見ても、1767年の『ミンナ』と1843/4年の『古い印章』や『マリーア・マグダレーナ』との中間だが、価値批判的に見てもやはり中間的な位置を占めている。

(Weinrich) : 16世紀以降のヨーロッパ文学における Ehre はギリシャ悲劇における運命 (Schicksal) と比べられる。スペインの Ehrendrama に関して偉大なスペインの哲学者の Ramón Menéndez Pidal はこれらの劇を解釈するにあたって道徳や心理学の概念を用いることに反対し、Ehre の作法をそれらの芝居の前提として受け入れなければ、それらの作品の意味を見誤ることになる、と言った。ギリシャ悲劇における運命 (Schicksal) と同じくらいスペイン演劇の Ehre は劇中の人物に対して動かし難い超越的な力として対峙し、彼

らを強制的に支配している。彼らの行動は彼らを紛糾から救う代わりに、逆にやみくもに本人に刃向かい、彼らを破局へと追い詰める。Ehreによって駆り立てられるように行動する人物たちとして Weinrich/ Pidal はドン・ファン、ハムレット、フィガロと並んでグストル少尉、エミーリア・ガロッチィ、グレートヘン、アグネス・ベルナウアーを挙げている。

(筆者によるコメント) : Ehre が単なる理念でも観念でもなく、劇中人物に対して動かし難く生々しい力であって、彼らを強制的に支配し、Ehre 尊重の念に取り憑かれた彼らの行動が逆に本人に刃向かい、彼らを破局へと引きずり込んで行くという指摘は、『エフィ・ブリースト』の中でインシュテッテンが口にする「われわれを暴君的に支配しているあの社会的な何か」(Effi. 268) という言葉を思い出させ、筆者にとってはあらためて得心できるものであった。主人公が Ehre によって突き動かされるように行動して破局への道を突き進む様は、カスペルとアンネル、アントン親方、『古い印章』のフーガー、更にインシュテッテンにすらも認められ、めでたい結末になる喜劇だが『ミンナ』のテルハイム少佐の言動も、背後に彼を支配する Ehre という巨大な力を想定しなければ、とうてい理解できない。

ただ Weinrich がこれらの人物たちのうちインシュテッテンにちょっと触れているのを除けば、他の誰一人の名前も挙げず、この論文中その他の個所でも幾つか作品名が挙げられているが、それらの中にもこれらの作品は含まれていない。拙論で扱う作品のうち Weinrich が言及しているのはわずかに Sudermann: *Die Ehre* と Fontane: *Effi Briest* だけである。しかも彼がここで名前を挙げているグストル少尉、エミーリア・ガロッチィ、グレートヘン、アグネス・ベルナウアーが Ehre 悲劇の主人公であることまでも筆者は否定するつもりはないが、彼らを主人公とする作品がドイツ文学において Ehre の問題性をテーマにした代表的作品であるという風には必ずしも思えない。なぜこういう行き違いが生じるのか、この章の最後で論じたいと思う。

(Weinrich) : 運命 (Schicksal) も Ehre もその時代の信仰の対象になっている確立された宗教とはほとんど無関係で、Ehre とキリスト教との間にはほとんど接点はない。一方の頬を打たれた者は、もう一方の頬も差し出すか、相手

を決闘に誘うか、どちらかである。この二つの態度はけっして相容れない。Ehreの源は君主だが、Ehreは時代の支配的なモラルとも法とも矛盾することがしばしばである。しかし氏族どうして互いに血で血を洗う復讐が終わりなく続く場合、その報復の連鎖に終止符を打つのは *deus ex machina* であって、Ehre 悲劇ではそれは王による介入であり、王の判決である。

(筆者によるコメント) : Ehre がキリスト教と無関係で互いに相容れないのかどうか、『健気なカスペルと美しいアンネルの物語』ではまさしくこの両者の関係がテーマになっていると思われるので、そこで Weinrich の説を検証したい。Ehre に執着することによる悲劇的な紛糾を解決するものとして王の介入、王の判決の必要性が言われているが、喜劇ではあるが『ミンナ』の第五幕で届けられる王からの親書がどのような役割を果たしているか、もしこの親書がなければどのような結末になったか、第三章で考えたい。

(Weinrich) : 脱神話化について。運命 (Schicksal) であれ Ehre であれ、神話が文学作品化される時点で脱神話化は既に始まっていて、神話は宗教的拘束力を失っているのだが、神話を扱った文学作品は古典として後世の文学の模範となるのみならず、青少年に受容されて幾世代にもわたる教養の素材となり、人生の指針としての役割を果たすことになる。この鎖を断ち切るのは啓蒙運動である。啓蒙主義は Ehre 神話の容赦ない批判によって Ehre の仮面を剥がし、Mythos から Logos へ、Ehre の迷信から道徳的な知への道を拓いた。1500 – 1900年のヨーロッパの Ehre 文学の歩みはまさにそのような道のりをたどった。

20世紀になって Ehre の源である王や皇帝が次々と歴史の舞台から姿を消し、Ehre を成り立たせていた君主制はほとんどの国で消滅したが、にもかかわらず Ehre は消え去らず、国家的、民族的な Ehre (*die nationale Ehre*, *die Ehre der Nation*) という形で再神話化されることになった。*die Ehre der Nation* は反ナポレオン解放戦争時代以来19世紀のナショナリズムと緊密に結びついて、有名なエムス電報事件の際には *die nationale Ehre* を刺激するようビスマルクの仕組んだ巧妙な罫が国民を燃え立たせ普仏戦争開戦の引き金となった。20世紀に入ってからには主にナチスが事あるごとに *die nationale Ehre* を刺激する術を使った。ヴェルサイユ条約を *Schanddiktat* (屈辱的条約)

と呼び、ドイツの民族的 Ehre の喪失であると訴えて、ドイツ国民の Ehre 意識を刺激し、雪辱のための戦闘意欲を掻き立てた。ナチスの代表的イデオログ A. Rosenberg は、ナチスの本質はこの世における最高の価値 die nationale Ehre の回復にある、と言っている。die nationale Ehre こそが最高の価値だとする Rosenberg の思想は彼の歴史哲学にまで及んでいて、愛を価値として掲げるキリスト教に対して、将来の歴史を担う勢力たるナチスは Ehre を掲げ、歴史はこの二つの価値観の戦いであるとしている。ちなみに Rosenberg の『20世紀の神話』第一章は Liebe und Ehre と題されていて、愛は弱さ、Ehre は強さを意味する、と説かれている。ヒトラーは1945年1月30日の彼の最後のラジオ演説でも、ドイツ国民に向かって die nationale Ehre の回復を呼びかけている。

ナチスのやり方は Ehre に疑似宗教的な意味を与え、それに対する盲目的服従と忠誠を要求するもので、冷静に計算されたシニシズムに基づく Ehre の再神話化、時代錯誤的な Ehre 復活の瘡癩的試みであったと位置づけられる。

(筆者によるコメント) : Weinrich がなぜあれ程徹底的に Ehre という価値に対して批判的なのか、なぜあれ程 Ehre のマイナス面ばかりを強調するのか、ここまで来てその理由が明らかになる。国民的 Ehre 感情を悪用したナチスの忌わしい過去が彼の記憶に焼きついて離れないのだ。Ehre を古き良き時代の価値として再評価するのはアナクロニズムだが、テルハイムのような人物を考える場合には Weinrich の Ehre 観を少し修正する必要があるのではないだろうか。

(Weinrich) : 自明であったものが神話へと言語化され、やがて神話の正体が暴かれて脱神話化が行なわれ、その流れに逆行する再神話化の試みがなされて、それも瓦解した後、現代社会にはまだかつての Ehre の遺物が残存しているが、それらも徐々に解体除去されねばならない。

しかし、他人によって価値を認めてもらうことは人間性の不可決の欲求であるが、Ehre が消え去った後それに代わるものは Prestige (信望) とか Ruf (名声) であろう。その違いは Ehre が既に与えられた特権・榮譽であって、それを失うことを恐れなければならないものであるのに対して、Prestige や

Ruf はあらかじめ与えられているわけではなく、誰もが自分の行動や業績によって獲得できる、あるいは、獲得しなければならない価値だという点にある。しかし、他人による価値承認の新しい形、Prestige や Ruf とて、所詮は時の流れの中で相対化され、忘れ去られてしまうものではあるまいか。

最後に注目すべきことは、Weinrich が innere Ehre (内面的 Ehre) を Ehre の歴史に通じている者から見れば自己矛盾的な概念であると言い切っている点である。他人による評価を無視することができ、自らの判断で自らをよしとすることで満足できる Ehre はもはや Ehre ではない。それはまったく別なもので、良心、品位、プライドなどである。それならそう呼べばいいので、それによって誤解が避けられる。

少し詳しくなりすぎたが、以上が Weinrich 論文の概要である。

その都度筆者のコメントを差し挟んできたので、簡単に異議をまとめると

1. Weinrich が代表的 Ehre 文学の主人公として名前を挙げているのはグストル少尉、エミーリア・ガロッチィ、グレートヘン、アグネス・ベルナウアーだが、筆者は同じレッシングの作品なら『エミーリア・ガロッチィ』より喜劇ではあるが『ミンナ』、同じヘッベルなら『アグネス・ベルナウアー』より『マリーア・マグダレーナ』の方がずっと Ehrendrama の名にふさわしいと思う。またドイツ文学の代表的 Ehre 文学と思われるブレンターノの『カスペルとアンネル』——そこには Ehre とその派生語が Alewyn の報告によると107回出てくるという<sup>3</sup>——になぜ Weinrich が一度も言及しないのか、また、シラーの『失われた Ehre からの犯罪者』は題名に Ehre という語が含まれているのに Weinrich がなぜこれを無視するのか、ともに理解に苦しむ。

なぜこういうことが起きるのか、筆者の考えでは、『ミンナ』や『カスペルとアンネル』に Weinrich が言及しないのは、この二つの作品とも彼が否定する innere Ehre (内面的 Ehre) にかかわっているからであり、『マリーア・マグダレーナ』と『犯罪者』に触れないのは Weinrich が Ehre をおもに貴族階級の Ehre に限定したがるせいである。



したがって筆者の批判は次の二点につながって行く。

2. innere Ehre (内面的 Ehre) について Weinrich は否定的だが、ごく手近なところで Der Sprach-Brockhaus を引いてみても、外面的 Ehre と内面的 Ehre の区分がなされていて、

Anerkennung unseres persönlichen, besonders unseres sittlichen Wertes und Verhaltens durch andere Menschen (äußere Ehre) und durch unser eigenes Gewissen (innere Ehre)

(われわれの人格的な、特にわれわれの道徳的な価値や振舞いが他人によって承認されることが外面的な意味での Ehre で、われわれ自身の良心によって承認されることが内面的な意味での Ehre である)

となっている。Duden や Wahrig も同じ区別をしている。

両親を初めとする外的権威による懲罰への恐怖が内面化されて罪悪感・良心・超自我が形成されるように、Ehre 喪失、Schande への怖れが内面化されて、態度、振る舞いに関する内的行動規範を形成するという風には考えられないだろうか。少なくともこれから論じようとしているテルハイム、カスペル、ファイト・フーゴーなどには外的 Ehre と緊密に結びついたある種の徳 (内面化された Ehre) が認められるように思われる。しかし、内面的 Ehre が常に美德を意味していて、問題的でない、と言うわけではない。

3. Ehre ある上流階級の者たちと一般市民層との間に歴然とした身分上の差異があったように、もう一ランク下の段階でも、Ehre ある階層の市民と Ehre を持たない賤民とに分かれていた。『犯罪者』や『マリーア・マグダレーナ』で問題になっているのはこのもう一段下の Ehre である。後者ではそれ以外に jungfräuliche Ehre も問題になっているが。

4. 民主制の下で Ehre は失効し、Prestige (信望) とか Ruf (名声) が Ehre に取って代わるべきだと Weinrich は言っているが、Weinrich 論文の 5 年後にベルの『カタリーナ・ブルームの失われた Ehre』が発表された。Ehre を貴族の特権としての Ehre に限定すれば Weinrich のように言えるかもしれないが、Ehre には彼がここで問題にしている以上の広がり多様性があり、それまでも考慮に入れなければ見えてこない Ehre の局面があるのでは

ないか。

以上はこれから作品に即して具体的に Ehre を考察して行く中で明らかにしなければならない点でもある。年代順にではなく、テーマごとにグループ分けして論じたい。ただ、Ehre の意味するところは見てのとおり多様であり、見方によって様々なテーマが考えられる上に、一つの作品に幾つかの Ehre が重なっているのでグルーピングは難しい。Weinrich が無視したり否定的に扱っている面に力点を置くという意図を込めて、次の四つの問題点で組分けしたい。

1. 市民社会の Ehre：『犯罪者』、『マリーア・マグダレーナ』
2. 古い Ehre 尊重ゆえの悲劇：『マリーア・マグダレーナ』、『古い印章』、『エフィ・ブリースト』
3. 内面的 Ehre の問題性：『ミンナ』、『カスベルとアンネル』、『古い印章』
4. 貴族的 Ehre の解体：Die Ehre

この他に、愛と Ehre の対立、jungfräuliche Ehre、Ehre と決闘、といった興味深いテーマが考えられるが、以上の章分けによって論じる中で必然的にそういった問題にも論及せざるをえないであろう。また、テーマ研究とは言っても、ある程度は作品論にならざるをえない。

## 第一章 市民社会の Ehre：『犯罪者』、『マリーア・マグダレーナ』

Ehre のこの側面が最もよく現れているのは Ehre を失った者としての前科者と市民社会との関係を扱ったシラーの『失われた Ehre からの犯罪者』である。

この主人公は密猟を重ね、三度目の逮捕で三年間の懲役に服し、初めはまだ「道を踏み誤った者」にすぎなかったのに、極悪人たちにまじって服役するうちに「ならず者」となり、自尊心も羞恥心も失ってシャバに出てくる。

ほかの地方へ行けば、ehrlich な人間と見なされてやって行けたかもしれませんが、せめて見せかけだけでもそのふりをする気力さえなくしていました。絶

望と汚辱からとうとうそんな気持ちになってしまっていたのです。残された最後の逃げ道は、Ehre などなくてもやって行ける方法をおぼえることでした。なぜなら、私にはもうそんなものを要求する資格はなかったからです (Es war die letzte Ausflucht, die mir übrig war, die Ehre entbehren zu lernen, weil ich an keine mehr Anspruch machen durfte.)」(V. 12)

ehrllich は翻訳なら「堅気の」と訳すところだが、ここでは ehrlich を日本語に置き換えないでその意味を考えたい。コンテキストから見てこれは〈Ehre を有する〉という意味であろう。主人公は前科者として Ehre を失っている。どこか他所へ行けばまだ Ehre ある人間と見なされてやって行けたかもしれないが、その気力も失せたので、このまま故郷の地にとどまって Ehre などなくてもやって行ける方法を習得してやって行くしかない、というのである。

「ehrllich な人間と見なされてやって行」く (für einen ehrlichen Mann gelten) の直訳は「Ehre ある人間として通用する」である。人々から Ehre ある人間と見なされ、それにふさわしい扱いを受けてやって行く、ということである。

Ehre ある市民と見なされ、それにふさわしい扱いを受けて生きて行く、とはどういうことか。先ず第一に市民的な生業に就いて生活することを許されるということであろう。ところが彼は二度目の懲役の後すでになかなか仕事に就けず、「ehrllich と言える働き口 (Posten des ehrlichen Namens) のうちでは最下級の仕事」である「豚飼い」になろうと申しこんでみたが雇ってもらえなかった。「計画はことごとくあてがはずれ、どこへ行っても断られて、彼は三たび密猟者となった」(V. 8) ののである。この ehrlich も unehrllich な職業、賤業と区別する意味で使われている。昔は「豚飼い」も unehrllich な職業の一つだったが<sup>4</sup>、ここでは最下級であってもとにかくそれが ehrlich な職業と言われているところから、すでにこの時代に啓蒙主義の影響で、賤業・賤民という概念がかなり解体していたことが窺える。unehrllich な者たちの範疇は狭められ、限定されてきていた。

だが、市民社会への仲間入りというのは ehrlich な市民的職業に就いて生活することを許されることだけではない。それ以前に、何よりも Ehre ある市民から挨拶してもらえ、こちらからも口を利き、挨拶することが許される関係を意味する。刑期を終えて故郷の町に戻って来た『犯罪者』の主人公のそばを「知人たちが次々に通りすぎるのにちょっと挨拶のそぶりでも見せてくれる者さえ誰一人おらず」(V. 11)、「有毒な人間みたいに誰も寄りつかない」(V. 12) 中で、彼が唯一対等に口を利くことを許され、彼に挨拶を返してくれるのは今や兵隊用の娼婦になり果てたかつての情婦だけである。豚飼いは unehrlich な職業ではもはやなくなっていたが、娼婦は依然としてそうであり、前科者とともに市民社会の Ehre に与かっていなかったのである。Ehre は市民社会の内と外を分けるメルクマールであって、Ehre を持たないということは市民社会から外へ排除されているというに等しい。市民社会からドロップアウトした者にはもはや同じ仲間どうしとのつきあいしか許されないのである。

ここで思い出されるのは『マリーア・マグダレーナ』で息子のカールが窃盗の嫌疑を掛けられ、逮捕拘禁されたことが町中に知れ渡るやいなや、それまではアントン親方の姿を見掛けるたびにこそこそ目を外らして逃げ隠れしていたこそ泥の「あばたのフリッツ」が路上であつかましくも親方に歩み寄り、握手を求めてきた、というエピソードである。「わしは横っ面を張り倒してやろうかと思ったが、思い直して、唾すら吐かなかった、なにしろわしと奴は一週間前から親戚どうしってわけだ、身内どうしなら挨拶するのが道理ってものじゃないか」(Ma. 40) と親方は自嘲気味に語っている。親方はその後これから山に住む年取った材木商のところへ行くが、それはこの材木商が耳が遠くて親方の Schande を知らないの、これまでどおり目をまともに見てくれるこの町で唯一の男だからだ、というのである。挨拶とコミュニケーションは何よりもお互いが仲間うちであることを確認しあう儀式なのだ。犯罪者やその家族は ehrlich な市民たちの仲間から脱落して、ドロップアウトの「身内」になるのである。

先の引用文「残された最後の逃げ道は、Ehre などなくてもやって行ける方法をおぼえることでした (Es war die letzte Ausflucht, die mir übrig war,

die Ehre entbehren zu lernen,)」(V. 12)における Ehre を邦訳は「体面」と訳しているが<sup>5</sup>、上の考察を踏まえると、「市民社会から仲間入りを許されなくてもやって行ける方法を——」と訳するのが適当ではあるまいか。Ehre はここでは市民権・公民権というに等しい意味合いを持っている。中世には公民権剝奪という刑罰があり、その状態を *entehrend* とか *ehelos* と呼んだが、制度が廃れた後も、その名残が Ehre という言葉に後々までつきまとっているのである。『犯罪者』では、Ehre を失うとは市民社会から排除されることである。Ehre は市民社会のパスポートのようなものであり、Ehre の喪失は社会的な死を意味する。

ちなみに『犯罪者』の主人公は Christian Wolf という名前である。彼は社会からつまはじきされたあげく、ついに殺人を犯し、森の奥深くに入って、そこで集団生活を営む前科者などアウトローたちからなる盗賊団に加わり、その首領に祭り上げられる。Wolf の運命は中世に実在した Werwolf (人間狼) のそれと非常によく似ている。犯罪を犯し、平和喪失宣言を受けて、実際に狼 (Wolf) の毛皮を被せられ、共同体の外へ追放された犯罪者が Werwolf であった。彼らは森の奥に入って集団で生き延び、中には強盗や追い剥ぎの盗賊団になった者たちもいたという<sup>6</sup>。主人公の Wolf という名前は偶然ではないであろう。18世紀啓蒙主義の時代になって、Werwolf が伝説上の存在と化したご時世にもなお、犯罪を犯した者が社会から排除されて、中世の Werwolf と本質的に変わらない運命を生きなければならない状況をシラーは告発したかったのである。

前科者なるがゆえに Ehre ある市民たちと挨拶をかわすことすら許されず、*ehrlich* な生業に就いて生計を立てて行くことも出来ない、したがって Ehre なき同類の仲間たちにたちまじって生きて行くほかになく、それによつてますます犯罪の深みに落ち込んで行かざるを得ない、そういう男の転落の人生を描くことでシラーは市民社会の非情な排他性を暴いてみせたのである。「失われた Ehre からの (*aus verlorener Ehre*)」という題名は、前科者なるがゆえに市民社会への復帰の道 (Ehre) を閉ざされてしまったがゆえの、という意味である。

一旦犯罪者の烙印が押され、札付きになってしまうと、少なくとも『犯罪者』に描かれた時代や社会では、もはや市民社会で生きて行くために必要とされる最低限の社会的信用が失われたと見なされてしまうのである。前に引いた「ほかの地方へ行けば、Ehreを有する人間と見なされてやって行けたかもしませんが、せめて見せかけだけでもそのふりをする気力さえなくしていました(ich hätte vielleicht in einer fremden Provinz für einen ehrlichen Mann gegolten, aber ich hatte den Mut verloren, es auch nur zu scheinen.)」という引用文で使われている gelten(・・として通用する、・・と見なされる)も scheinen(・・のように見える、・・と見られる)もどちらも「人々からどう見られるか」を問題にする動詞であるが、どう見られるかは、見られる側だけでなく、見る側の問題でもある。見られる側に必要とされるのは自分が信用に値する人間であることを裏づける証拠であるが、見る側について言えば、相手を信用するかしないかは見る者の判断力だけでなく、人間観や寛容・非寛容も大きくかわる。『犯罪者』の主人公には三度の前科があるから信用に値することを証明する証拠に欠けているばかりか、まさしく信用のおけない者であることを証明しているように見える。しかし市民社会から排除された段階での彼の犯罪はまだ密猟であって、強盗でも殺人でもない。密猟はむろん善ではないが、野性動物の保護が叫ばれる現代の森で行なわれた密猟ではない。領主が所有して、森の獣が農民の畑を荒らすのもかまわず、自分達だけで猟を楽しむために、手前の勝手に禁漁区に指定した森での密猟である。「われわれの畑や田んぼの作物を餌にしている領主の猪を二匹か三匹殺したくらいで、お前は何年もあちこちの牢屋や監獄にぶち込まれ、家も商売も取り上げられて、乞食にされちゃったんだ」(V. 18)と彼が最初に森で出逢った盗賊は言っている。これは『群盗』のカールの考え方に近く、シラー自身の意見ではない。しかし現代の視点から見れば、横暴で無法なのは権力者の側であって、貧困ゆえの密猟者は少なくとも情状酌量に値する。シラーが代表していた醒めた批判的理性とヒューマンイズムの立場からすれば、『犯罪者』の主人公程度なら、より人間的な刑罰制度と更正施設の整備と市民の寛容な人間観と社会復帰への協力とによって社会的信用(Ehre)を回復し、更正して再び市民権

(Ehre) を取り戻しえたはずなのである。

市民社会の排他的性格をよく表しているのは、序論でも触れたとおり、Ehre ある市民層から Ehre なき賤民たちを差別する市民社会のシステムである。先ほど『マリーア・マグダレーナ』で息子のカールが窃盗容疑で逮捕され、アントン親方が犯罪者の「身内」と見なされかけたことについて述べたが、息子の窃盗容疑ぐらいでアントン親方の家が行きすぎた家宅捜索を受けて、親方の病弱な妻がそのショックで死に、カールが見せしめに町の通りをあちこち引き回されたりするのは、以前アントン親方が廷吏アーダムに侮辱的言動を行なって彼の恨みを買っていたためである。アーダムがかつて飲み屋でアントン親方に乾杯を求めてグラスを近づけて来たとき、親方は自分のグラスを引いて、「青い折返しのある赤い上着を着ている奴ら（廷吏）は昔は木製の足のついたコップで飲まなきゃならなかったもんだ。店の窓の外とか、雨降りなら戸口の外に立って飲み屋の亭主が飲物を渡してくれたら、神妙に帽子を脱がなきゃならなかったもんだ。それから誰かとグラスを合せて乾杯したけりゃ、仲間の皮剥人が来るまで待ったもんだ」(Ma. 45f.) [ ( ) 内引用者 ] と言ったのである。

ここにも先ほど論じた挨拶とコミュニケーションの問題が見られるが、アントン親方は廷吏のアーダムが求めてきた乾杯を拒むことで、彼が Ehre ある市民の数に入らない賤業の者であることを彼に思い知らせようとしている。ここに Ehre という言葉は一度も出て来ないが、ドイツでは11世紀頃から身分差別が始まり、廷吏 (Gerichtsdienner) は刑吏 (Henker) や皮剥人 (Fallmeister) らと共に unehrlich な職業、つまり賤業と見なされていた。それには幾つかの厳格なタブーが付随していて、賤民と接触した者は、本人はもとより、時にはその家族までも Ehre を奪われ、賤民の地位に落されたから、Ehre ある市民は unehrlich な賤民と飲食を共にすることはおろか口をきくことすら避けねばならなかった。この制度は18世紀までドイツの多くの地方で続いていて、ある地方都市では19世紀になってからも、Ehre ある実直な農村の青年が町に出てきて居酒屋に入り、他所から来た刑吏の徒弟と、それとは知らずに一緒のテーブルについて杯をかわし、事情を知る者たちからその場面を目撃され、由々し

い事態に気づいて刑吏の徒弟はすばやく姿を消したが、噂はあっと言う間に広まって、青年の前途は悲惨なものとなった、という。彼は家族からも村落共同体からも仲間からも閉め出され、半狂乱になって山に隠れたというのである<sup>7</sup>。

アーダムという廷吏は、後にカールの言うところによると、大勢の人々の恨みをかっていたようだし、「悪い (schlimm)」(Ma. 46) とも言われているし、確かに彼の言動は卑劣でもあるので、乾杯拒否の際のアントン親方の侮辱的発言の原因としてアーダムという人物に対する嫌悪があったのかもしれない。しかし以上述べたような歴史的事情がその発言の背景にあることを否定することは出来ない。常に Ehre を重んじるアントン親方はここでアーダムに、廷吏など Ehre ある市民の数には入らない、廷吏は大工の棟梁などとは別種の Ehre なき身分に属していて、乾杯の相手としては皮剥人ぐらいが適当であり、Ehre なき廷吏の分際でこのアントン親方にグラスを合わせての乾杯を要求するとは僭越至極、Ehre ある市民への侮辱 (Beleidigung) を意味する、と言っているのである。

前科者の場合には、失った Ehre (市民権、市民社会のパスポート) を取り戻すための道が用意されていないことが問題であったが、賤業・賤民の場合には市民社会の内と外とを分けるメルクマールとしての Ehre の線引きがきわめて恣意的、非人間的であることが問題である。

## 第二章 古い Ehre 尊重ゆえの悲劇：『マリーア・マグダレーナ』、 『古い印章』、『エフィ・ブリスト』

アントン親方の言動が侮辱を意味することになるのはその発言がアナクロニズムだからである。親方自身ははからずも「昔は (ehemals)」(Ma. 45) と断っているように、今では時代も変わって、『犯罪者』の「豚飼い」に関して述べたように賤業は姿を消し、廷吏はもはや賤民ではない。これはだから差別発言にはかならず、「昔」とは逆に廷吏にとっての侮辱を意味する。アーダムの公権力を使っただけの報復行為それ自体は卑劣であるが、彼の憤懣は当然であり、アントン親方の発言こそ問題的なのである。息子の窃盗容疑で親方の家を検査する際、アーダムは捜査の行き過ぎを注意した同僚に向かって「おれはこいつ



(アントン親方)が憎くてならんだ、飲み屋での一件以来な——。お前もあのことは知っているだろう、もしお前が背骨に Ehre を持っているなら、お前だってきっと侮辱されたと感じるのじゃないかね (Er müßte sich auch beleidigt fühlen, wenn Er Ehre im Leibe hätte.)」(Ma. 35) と言っている。

ここでアーダムが Ehre という言葉を口にしているのは興味深い。それはかつて ehrlich な市民層から unehrlich とされた職業の賤民を区別した Ehre ではない。第一に、それは万人に与えられた基本的人権であり、市民としての自覚と人権意識を意味する。第二に、それがここで差別的意味を持つとしても、堅気の市民から犯罪者やその家族を差別する意味である。アーダムは家宅捜索の際、犯罪者——正確にはまだ容疑者の段階なのだが——やその家族と Ehre ある (Ehre im Leibe) 自分たちとは同等でないことを強調して、「ならずや泥棒はわしらの同類じゃない (Schelme und Diebe sind nicht unsers Gleichen.)」(Ma.34) と言っている。Ehre の線引きは時代とともに移動し、かつての賤民は Ehre ある市民社会の一員となったが、犯罪者とその家族は依然として Ehre を失い、市民社会から排除されると言うのである。犯罪者が Ehre を失うのはやむを得ないが、容疑者の段階で、しかもその家族までとなると、この線引きも問題的であるが。

廷吏に対する差別発言はアントン親方のツンフト所属職人としての古い Ehre 意識が新時代の潮流との間に軋轢を引き起こす例だが、彼の古い Ehre 観はさらに二重三重にこの悲劇にかかわってくる。古い Ehre を重んじてやまないアントン親方の振る舞いが親方とその家族から逆に Ehre を奪い、彼らに Schande をもたらすというのがこの劇の基本構造になっている。

アントン親方の態度が最も問題的なものに映るのは、息子が窃盗容疑を受けて逮捕された直後に、娘のクララに向かって「お前までも人から後ろ指を指されるようになったと気付いたら、その時にゃわしは剃刀で——自分の喉に手を当ててサッと切るまねをする——ひと思いにこうだ」(Ma. 40) とか「およそ何でもわしは我慢できるし、そのことを証明してもきた、だが Schande だけはごめんだ。わしの肩に何を載せようとかまわんが、わしを倒れないよう支えている筋を断ち切るのだけはどうかやめてくれ (nur nicht

die Schande! Legt mir auf den Nacken, was ihr wollt, nur schneidet nicht den Nerv durch, der mich zusammen hält!）」(Ma. 41) と言って、未婚のまま身ごもっているらしい娘を追い詰めて行く、あの場面においてである。

アントン親方がそれにだけは耐えられないと言っている Schande とは Ehre の喪失に他ならない。彼が恐れているのは Ehre の喪失、社会的な死である。彼を「倒れないよう支えている筋 (Nerv)」というのは Ehre、つまり、Ehre ある市民社会の一員であるという誇りである。「町中でいちばん ehrlich な男」(Ma. 17) の ehrlich には〈Ehre を重んずる〉という含みも込められているのであろう。

ここで問題になっている Ehre の一つは jungfräuliche Ehre である。序論でも述べたとおり、娘は身分にかかわらず皆 Ehre を持っているが、未婚のまま身ごもってしまった娘はその Ehre を失い、お胎の子の父親と結婚する以外に Ehre を回復する手だてがない。純潔の Ehre を守った娘だけが結婚のとき身につけることを許される純白の花嫁衣装とミルテの花冠のことが第一幕の幕開け早々話題にされていることから、この劇のテーマの一つが jungfräuliche Ehre にあることは明らかである。娘が純潔の Ehre を失ってしまった場合には市民社会による残酷な制裁が娘を待ち受けていて、それを恐れるがゆえに、未婚のまま母親となった若い娘による証拠隠滅のための私生児殺しが頻繁に行なわれた。これは大きな社会問題となり、とりわけドイツ文学では重要なテーマとしてたびたび取り上げられて、グレートヘン悲劇をはじめとする嬰兒殺し文学が数多く生み出されることになった。『マリーア・マグダレーナ』もそのような作品の系譜に属する。妊娠してお胎の子の父親が結婚してくれないために娘としての Ehre を失うことが決定的なクララは、そのような Schande によって父親殺しになるくらいなら自殺や赤ん坊殺しの方がまだまし (Ma. 59) と思いつめ、井戸に飛び込むのである。彼女の場合は、市民社会の制裁を恐れてというより、我が娘が未婚のまま子供を産むようなことになれば、その Schande には耐えられないから自殺するという父親の言葉に追い詰められて、死を選ぶのである。

だが、アントン親方の Schande への恐怖は19世紀半ば近い時代にあつてどの程度客観性のあるものだったのか、時代錯誤の主観的な思い込みの部分が大きかったのではないのかどうか、疑ってみる必要がある。先ほど指摘した第一幕第一場での母娘の対話だが、そこで話題にされていたのは母親の記念の花嫁衣装であり、想い出の中の Myrtenkranz である。身分差別的な Ehre がアナクロニズムであるように、jungfräuliche Ehre も母の世代のものであつて、娘の世代にはたしてアントン親方が気に掛けてやまないほどこれが厳格に守られねばならない Ehre であったのかどうか。「罪の襦袢 (Sünderhemdchen)」一枚になつての「教会贖罪 (Kirchbuß) 」のことは *Faust* でも言及されているが、これは18世紀になつて、プロイセンにおけるフリードリヒ大王の改革、カール・アウグスト公やゲーテの尽力によって廃止されたヴァイマル公国のような例もあつたが、一般的にはまだしばらくこの見せしめの措置が続けられた。しかし、19世紀も30年代に入るとどうだったか。Büchner の *Woyzeck* にそのようなお仕置きについての言及はないし、Hebbel は Elise Lensing との間に二人までも私生児をもうけているが、彼女がそのような仕置きを受けたという記述は見あたらない。更に、E.Trunz は *Faust* 第一部の注で、私生児を産んだ娘に対して結婚式の際に行なわれた、花冠を引き裂いたり、戸口に刻み藁を撒いたりといった制裁は18世紀に入ってから徐々に廃れていった、と記している (Fa. 520)。ましてや『マリーア・マグダレーナ』は19世紀も中ば近くに題材を取っている。グレートヘンの兄ヴァレンティンは、かつてその清純さゆえに自分の誇りであり町の宝でもあつた妹が今や町中の噂の種にされている状況を嘆いて「どのごろつきでも当てこすりを言つたり、鼻に皺を寄せたりして俺を馬鹿にする。俺は情けない借金男のように小さくなって、何気なく人の言つた言葉にも冷や汗をかく始末だ。片端から奴等を殴り倒したい、とは思ふものの、奴等を嘘つきだとは言えないのだ」(Fa. 116) と言っている。この後彼はファウスト/メフィストに報復の剣を抜いて、逆に刺し殺される。一方、クララが自殺したとき書記はアントン親方に「あなたが娘さんにおつしやつたことを思い出してごらんなさい、あなたがあの人を死へと追いやつたのですよ。(中略) あなたが娘さんの苦しみに気付いた時、あなたは陰でこそそそ

わさしている連中のことを気に掛け、そんなことを囁きかわしているのが蛇のような下らない奴等であることを考えなかった、そしてあの人を絶望に駆り立てるような一言を口になさったのです」(Ma. 70f.)と言う。ヴァレンティンとの違いは明らかであろう。書記が当時としてはまだ珍しい大学教育を受けた青年であることは考慮に入れねばならないとしても、彼も市民社会の一員なのである。価値観は変わってきており、jungfräuliche Ehre 重視の風習などもはや滑稽な過去の遺物に過ぎない、そういった状況が徐々に生まれ始めていた、と考えるべきではないだろうか。廷吏アーダムに対するアントン親方の時代錯誤的な差別発言が彼の妻の命を縮め、息子に必要以上に大きな恥辱を味あわせる結果をもたらしたように、jungfräuliche Ehre への彼のこれまた時代錯誤的に過剰なこだわりが娘から命を奪うことになるのである。いずれも古い市民社会の Ehre —— Ehre ある市民社会の一員であるという誇り —— を抛り所として生きるアントン親方の生き方が招いた悲しい結末である。

ところで書記のこの最後の言葉からも分かるとおり、アントン親方が娘を追いつめていくとき問題になるもう一つの Ehre は社会の評価によって支えられる外面的 Ehre である。Weinrich は個人の人格や道徳的価値が「周囲の社会から承認されること」と言っていたが、そういう意味での Ehre である。『マリーア・マグダレーナ』を卒論で扱った学生が「世間体」という言葉を使ったのは Ehre のこの面に関してである。しかしアントン親方の意識の中にあるような伝統的社会秩序の中では、『犯罪者』やグレートヘン悲劇にその一端を垣間見ることが出来るように、Ehre の喪失は残酷な制裁を伴い、社会的な死を意味した。Schande への恐怖、Ehre 喪失への恐怖は実に生々しい現実味を帯びていたのである。「世間体」という日本語ではとても表現しきれない深刻な事情がそこにはある。問題は「世間体」を気にするアントン親方の小市民的な意識などではない。jungfräuliche Ehre の喪失が本人やその家族にとって市民社会からの転落を意味しかねない状況がもはや過去のものとなりつつあるにもかかわらず、なおも古い Ehre 観念 —— Ehre ある市民社会の一員であるという誇り —— に取り憑かれているアントン親方のアナクロニズムこそがここでは問題なのである。

しかし既に「はじめに」でもちょっと触れたように、アントン親方が重んじて止まない Ehre はこれまで述べてきたような身分差別的 Ehre とか jungfräuliche Ehre とか Ehre 喪失への恐怖とかいった外面的な Ehre にとどまらない。自らの良心による承認を意味する内面化された Ehre、いわゆる内面的 Ehre をも彼は重んじる人物である。このことをよく示しているのが、老いて窮迫する若き日の恩人に対するアントン親方の徹底した報恩行為である。それはこの悲劇を考える上での最も重要なポイントであり、アントン親方を識る上で最も注目すべきファクターである。

早くに父親を失い、母親と二人の赤貧洗うがごとき生活の中で無為徒食を取っていた若者のアントンをゲーブハルト親方は授業料免除で自分の許に弟子入りさせ、一人前の職人に育て上げてくれたばかりでなく、何かと彼をかばい、めんどろを見てくれた。その親方が年取って、病弱と貧困のため気弱になり自殺しかけたところへ偶然アントンが来あわせる。彼は師匠の手から剃刀を取り上げて、傷の手当てをただけでなく、娘クララの持参金として貯めておいた千ターラーを困窮する恩人に老後の生活費として差し出す。上げると言えば相手が遠慮するので、貸すということにして受け取ってもらい、師匠が亡くなると、字が書ければ本当は Ehrlich bezahlt! (Ma. 30) と借用証に書き込みたいところだったが、字の書けないアントンは証書に縦の裂け目を入れて死者の枕の下にそっと差し込んでおく。Ehrlich bezahlt! には、貸した金はゲーブハルト親方から間違いなく返済してもらった、という意味と、〈師匠、貴方から受けたご恩はこれで ehrlich にお返ししましたよ〉という、二重の意味が込められていることは E. Hein が指摘しているとおりでであろう<sup>8</sup>。これは『マリア・マグダレーナ』という陰鬱きわまりない劇の中では数少ない心暖まるエピソードと言ってもいいが、この劇の悲劇性は、娘の持参金を年老いて窮迫した恩人を救うためにそっくり差し出すというアントン親方のまさしく ehrlich な行為が娘から Ehre を奪い、命までも奪う最も直接的な原因の一つになって行く点にある。

何度か述べたとおり、未婚のまま身ごもってしまった娘が jungfräuliche Ehre を回復する唯一の手だてはお腹の子の父親と結婚することだが、親方の

ehrllich な報恩行為によって持参金を失ったクララは持参金目当ての誘惑者レーオンハルトに捨てられて、Ehre を失うことが確実になる。Ehre を重んじるアントン親方の行為は娘から Ehre を奪うのみならず、先ほど見たとおり、親方が自分は Schande (Ehre 喪失) には耐えられないと言い続けることによって Ehre を失った娘を死へと追い詰めて行く。このような皮肉な展開の原因となるのは金と地位しか頭にない青年レーオンハルトの Ehre だの ehrlich だのとは無縁の ehrgeizig な生き方にほかならない。アントン親方の報恩行為の基盤にある Ehre はこの際ひとまずは人間的信義とでも呼ぶほかないものであるが、信義をまっとうするためには金をも惜しまないという生き方が、金のためには人間的信義など平然と踏みこむ生き方によって完膚無きまでに打ちのめされてしまい、というところに『マリーア・マグダレーナ』の悲劇性の核心部分がある。内面的 Ehre を重んじる古風な道義的行為が新時代のなりふりかまわぬ生き方によって踏みこまれてしまうのである。

窮迫するかつての恩人を救うために我が娘の持参金にと貯めておいた千ターラーを残らず差し出すというアントン親方の徹底した報恩行為をどう理解したらよいだろうか。劇中この話を知らされるのはただ一人、そういう行為を評価するところから最も遠いレーオンハルトだけである。それというもクララの持参金を狙う彼が金のありかについて確実なことが知りたくて親方に探りを入れたからである。あんたならどうする、と聞かれてレーオンハルトは、妻子のない身ならそういうことをしてもよいだろうが、と言葉尻を濁す。たとえ回教徒のように十人の妻がいて、アブラハムみたいに子だくさんでも、ちょっとでもためらうようなら、と、親方の態度は徹底している。親方のしたことが信義を重んじる立派な処置であったことは認めなければならないとしても、しかし常識的に見ればレーオンハルトの言うとおりで、娘の持参金を残らず差し出すというアントン親方の報恩ぶりにはどこか常軌を逸した徹底性がある。

親方をそういう行為へと駆り立てたものはたして何だったのか。信心深い親方はキリスト教の教える隣人愛を实践したのだろうか、それとも、今ある自分は「すべてこの人のお蔭」(Ma. 30) というほどの恩人に対する心底からの感謝の気持ちからそうしないではおれなかったのだろうか。それとも、今や19

世紀において衰えたりとはいえ、かつては隆盛を誇ったツフフトに所属する Ehre ある職人だという意識がやはりここでも行為の背景にあるのだろうか。同業者組合にはかつて病気や労災や老齢によって働けなくなった仲間を救うための相互扶助システムが制度化されていて、これが現代西欧の福祉制度の原型になったことをわれわれは知っている<sup>9</sup>。年老いて働けなくなった師匠に対するアントン親方の態度には、かつて隆盛だった頃のツフフト職人たちの相互扶助精神の名残、というより、伝統ある職人の昔ながらの仕来りを何としてでも守り通さねばやまぬ心意気を感じ取るべきなのだろうか。だとすれば、感動的な報恩行為の背後にも、自分はツフフト所属の Ehre ある職人なのだという時代離れした意識とプライドがやはり潜んでいることになる。これらの説明を否定する根拠はない。だがそれにしても親方のこの極端なまでの徹底ぶりには何か強迫的なところがありはしないか、何か悲愴なところが・・・。

「Schande だけはごめんだ」とアントン親方が言うとき、Schande は Ehre の喪失を意味すると言った。親方が失うことをそれ程までに怖れている市民社会的 Ehre の意味、Ehre 喪失の意味を最もよく教えてくれるのはシラーの『犯罪者』で、Ehre ある市民たちの社会からドロップアウトすることの悲惨をわれわれはこれによって理解できる。この作品を論じたとき、Ehre の喪失は社会的な死を意味する、と筆者は書いた。父親を失い、手についた職もなく無為徒食していた頃の若者アントンはまかり間違えば『犯罪者』の主人公と同じ道筋で転落して行くかもしれない危い状況にあった。この男も父親を亡くして、はやらない宿屋を続ける以外手についた職もなく、母親と二人の貧乏暮らしだったことを思い出しておこう。ゲーブハルト親方はそういう彼を拾い上げて Ehre あるツフフト所属の職人に育て上げ、Ehre ある市民社会の一員として生きて行く道を彼のために拓いてくれた恩人だったのである。Ehre ある市民社会の一員であることの自覚と誇りをアントン親方がなぜあれほど大切にするのか、なぜ彼があそこまで徹底して自分の師匠の恩に報いようとするのか、その秘密を解く鍵がそこにあるのではないだろうか。Ehre ある市民社会は既に幻想だとしても、彼にとってそれは依然として生々しい現実なのである。

ところで、そのなげなしの財産をもってするアントン親方の徹底した報恩行

為は、背後にどのような事情が潜んでいようと、間違いなく尊敬に値するものである。これは筆者に『ミンナ』の Ehre を重んじる軍人フォン・テルハイムの同じくらい ehrlich な或る措置を思い起こさせる。

プロイセン軍将校フォン・テルハイムは七年戦争中テューリングゲンの地方政庁から占領地負担金を厳しく取り立てるよう司令部より命令を受けるが、命令どおりの厳しきで献納金を徴収するにしのびず、不足分は自ら身銭を切って代納し、その金額分の手形を地方議会が彼に振り出す。しかし和平調印後、彼が軍による未払金の中にこの手形を加えてもらおうとしたとき、彼に収賄の嫌疑が懸けられる。テルハイムが自らに委託された権限の範囲内で占領地負担金を最小限に抑えてやった見返りとして地方議会が彼に贈ったリベート、それがこの手形ではないかという嫌疑である。Ehre を重んじるテルハイム少佐の ehrlich な行為は正当に評価されるどころか、おそらくは凡俗の理解をはるかに超えた高潔さゆえに誤解を招き、彼は免官され、著しく Ehre を傷つけられる。

フォン・テルハイム少佐とアントン親方とは職業も身分も違いすぎるが、内面化された Ehre の要請に従って為した ehrlich な行為が当人から逆に Ehre を奪うに至るという構造は両者の場合とも共通している。しかしアントン親方の行為を理解し評価してくれる者が誰もおらず、彼の ehrlich な行為はそれを知る唯一の人物によって悲劇の要因にされてしまうのに対して、テルハイムは最終的に嫌疑が晴れ、国王によって Ehre を回復されるばかりではない。何よりも彼は愛と尊敬の眼差しによって取り巻かれている。そもそもミンナがテルハイムをぜひ知りたいたいと思ひ、彼を愛するようになったきっかけが、戦時中にもかかわらず司令部の命令に逆らって厳しい負担金の取り立てを免除し、強制的献納金の不足額を自ら代納したあの ehrlich な彼の行為に他ならなかった。「かつて貴方に二千ピストーレの失費をおかけすることになりましたあのご処置ゆえに、私は、貴方をお慕いいたしたのでございます。あのご処置がありませんでしたら、私は、是非ともお近付きになりたいという気持を決して起したりはいたしませんでしたでしょう」(Mi. 488)とミンナは言っている。そればかりではない。かつての部下ヴェルナー曹長から詐欺師士官のリッコーま



で、フォン・テルハイム少佐を高潔清廉な人物として尊敬しない者はいない。

しかしミンナはテルハイムを「誠実で、気高い (ehrlich, edel) お人柄」と讃える一方で、「赦し難いプライドの高さ (unverzeihlicher Stolz)」(Mi. 472) と非難もする。Ehre 尊重と結びついた彼の克己心、身に染みついた noblesse oblige が尊敬を呼び起こす反面、Ehre と結びついた彼のプライドの高さが軽やかな諷刺の対象にされる。Ehre は既にこの作品でもアンビヴァレントな価値であり、Ehre の正体が暴露される寸前の危うい個所さえも見受けられる。だが最終的には国王の親書と家父長的なブルクサル伯爵の登場によって芝居は大団円を迎える。

Ehre を重んじる人物と周囲の社会との間に生じた裂け目は、テルハイムの場合こうして無事に閉じられるが、アントン親方の場合には最後まで傷口を開けたままである。『ミンナ』から80年近く後の Ehre 劇ではアントン親方の Ehre 尊重はすべて時代錯誤であり、幾人かの大切な命がそのために失われる。古い Ehre を重んじる生き方が新しい時代の潮流の中でことごとく破局につながる、それがこの劇の基本構造である。廷吏に対する古い Ehre 意識に基づく差別発言が妻の急死や息子の屈辱的引き回しにつながったり、Ehre 喪失への彼の過剰な恐怖が娘を自殺へと追い詰めて行ったり、といった経緯はアントン親方をけっして悲劇的人物にはしない。シラーが告発した昔の Ehre ある市民社会の排他的秩序に親方が無批判に与したことに対する罰を彼は受けたにすぎない。しかしその偏狭さにもかかわらずアントン親方をやはり悲劇的人物と呼びうるとすれば、それは、若き日の恩人に対する彼の ehrlich な報恩行為が愛する娘を死に至らしめる最も直接的な原因の一つになって行くという不条理な筋の展開のせいである。「わしにはもう世の中ってものが分らなくなった」(Ma. 71) というアントン親方の最後の言葉からは、時代の変化を無視した偏狭な人物のため息にまじって、悲劇的人物のつぶやきをもかすかながら聞き取ることができる。

Ehre を重んじるアントン親方の姿勢がことごとく裏目に出て、破局へとつながって行くのは親方の Ehre 尊重がアナクロニズムだからである。では親方の Ehre を時代錯誤に変えた新しい時代の波とは具体的に何なのか。

Ehre を重んじる姿勢は、アントン親方の場合まず第一に、Ehre 喪失への恐怖に現れている。Ehre の喪失は Ehre ある市民社会から転落すること—— 貴族の場合は貴族社会から追放、排除されること—— である。Ehre を汚され、Ehre を失ってもなお生きる者を社会や、あるいは、ある階級が排除し、Ehre を奪われて孤立した状態で生きることがその者にとって社会的な死、あるいは階級的な死を意味する、そういった状況があるからこそ、愛や家庭的幸福を断念してでも、子殺しの罪を犯してでも、また、決闘で命を賭してでも Ehre を守ろうとするのである。Ehre を汚され、Ehre を失って生きる生が死と同じだからである。その社会に固有の Ehre は社会全体、あるいは、ある階級全体の合意によって支えられている。

この点で貴族社会の Ehre は市民社会の Ehre より長く命脈を保ち続けた。『エフィ・ブリスト』の中で決闘について友人と議論するところでインシュテッテンは次のように言っている。

人は個人として生きているだけではなく、全体の一員である。この全体をわれわれはいつも顧慮しなくてはならない、われわれは徹頭徹尾全体に依拠して生きている。もし独りぼっちで生きることが出来るのなら、私はこの件をこのまま何もせずにはうっておいてもいい、(中略) 人から幸福を奪った奴をどうしてもこの世から抹殺しなくてはならぬ、というわけじゃない。もし人がこの世に背を向けて生き続けるつもりなら、幸福を奪った相手を見逃してやることも出来る。しかし人々との社会生活の中ではある何か (ein Etwas) が形成されていて、この何かはいったん形成されてしまうと、その条項に従ってすべてを、他人をもわれわれ自身をも判断する、そのことにわれわれは慣れてしまうのだ。だからその掟に違反するというわけには行かないのさ、そうすれば社会がわれわれを軽蔑し、しまいにはわれわれが自分で自分を軽蔑する、これには耐えられないから頭に銃弾を撃ち込むことになる。(Effi. 267)

インシュテッテンがここで社会 (Gesellschaft) と呼んでいるのはむしろ貴族社会のことである。序論でも述べたとおり、貴族社会では、妻の裏切りを知っ

た夫は妻を離縁し、妻の愛人と決闘してこれを倒すことによって失われた Ehre を取り戻す、妻の裏切りを知りながら決闘もしないような男は貴紳としての資格を疑われ、軽蔑され、貴族社会から排除されるのである。19世紀末でも貴族社会には、妻に裏切られた夫に関して、まだここに言われているような「ある何か」掟のようなものが依然として残っていて、それに違反することはその男にとって貴族社会のパスポート (Ehre) を失うことを意味し、社会的な死、最後には本当の死をさえも招く、そういう状況があった。「ある何か」こそ貴族社会全体の協定のようなものである。ある階級や社会の通行証としての Ehre を保とうとすればこの全員による無言の合意に逆らうわけには行かない。醒めた理性がいかにそれを不条理と見抜いていても、その社会の中に留まって生きていこうとすればその無言の掟 (Ehre を保持するための掟) に従うしかない。インシュテッテンがこれを「われわれを暴君的に支配しているあの社会的な何か」と呼ぶのはそのためである。これを受けて彼の友人は、「世の中はともかくそういうものなんだからしかたがない。ものごとはわれわれが望むようにではなく、他のみんなが望むように進むのさ。〈神明裁判 (Gottesgericht)〉などと仰々しく言いたてる者がいるが、そんなのはもちろんナンセンスだ。そんなじゃない、逆だよ、Ehre のためのわれわれの儀式は一種の偶像崇拜 (unser Ehrenkultus ist ein Götzendienst) さ、しかしこの偶像が倒れないうちは、その前に拝跪するしかないのだ」(Effi. 268) と言っている。

貴族社会で19世紀末になってもその社会独自の Ehre に関する合意が生き続けていたのに対して、市民社会からは既に19世紀半ば近くで、市民社会の Ehre についても、jungfräuliche Ehre についても、かつてのような合意は消え去るか、あるいは消えかかっていた。テルハイムとアントン親方の運命の差は時代的な隔たりだけではなく、市民社会の旧来の Ehre が貴族階級の Ehre より早く廃れていったことから来ている。平等化の波が王侯貴族を消滅させるまでには20世紀を待たねばならなかったが、市民社会においては18世紀に賤民を消滅させ、Ehre ある市民とEhre なき賤民の差別をなくしてしまった。その時点で市民社会の旧来の Ehre も消滅したのである。しかしパスポートとしての Ehre そのものがなくなることはない。Ehre 保持のための条件が変わっ

たのだ。アントン親方の誤りはこの変化を無視したことである。では19世紀中ば近くで Ehre 保持に関するどうい合意が市民社会にあったか。結論から先に言ってしまうと、犯罪者以外はすべて Ehre を持つ、という合意である。

基本的人権の平等を説く人権思想の浸透とその制度化による賤民の消滅だけでなく、総じてこの芝居の中で市民社会における階層秩序は流動化してきている。これを促進しているのは教育の普及と産業・経済の発展である。「皆だんだん賢くなる (Die Welt wird immer klüger.)」(Ma. 15) とアントン親方の妻は言っているが、親方とその妻は読み書きが出来ないが、同じ階級でも若い世代のレーオンハルトは読み書き計算の能力を身につけ、それによって彼には官吏への道が開ける。収税吏になったばかりのレーオンハルトの前でアントン親方は帽子を被る許しを乞うてみせている (Ma. 22)。レーオンハルトは階層の梯子を一段昇ったわけだが、彼は更に上を目指し、初めはクララの持参金に目をつけるが、それが空しいと分かると今度は市長の姪との結婚を足掛かりに選ぶ。いくら彼が官吏になったとはいえ、普通ならこんな逆玉は無理なところだが、背むしで醜いというハンディが相手にあるためにかろうじて釣り合うのである。レーオンハルトもアントン親方と同じく市民社会の秩序に重きを置いているわけだが、親方にとって重要なのは昔ながらの身分階層秩序であり法や道義の秩序だが、レーオンハルトの場合問題になるのは地位と財産の階梯でしかない。しかし彼は時代の潮流を反映しているだけである。

例えばこの劇中「金の鎖 (die goldene Kette)」が二度 (Ma. 13, 42) 出てくる。一度は「金の鎖を頸に下げておいでのお方」(Ma. 42) という言い方で市長を指すときに使われていて、そこで「金の鎖」は現世の権力と富と地位の象徴である。もう一度は、こちらが先なのだが、カールが買ったばかりの「金の鎖」を母親と妹に見せびらかす場面である。彼はそれを手に入れるために—— そのためだけではなく、遊ぶ金や飲み代ほしさにでもあるが—— 夕方他人より二時間長く働いて金を貯めたと言っている。奢侈や華美という点で、職人でもその気になりさえすれば上流市民層と部分的に肩を並べられる時代が来ていた。かつては上層の市民にしか許されなかった贅沢に、職人でも労働さえ厭わなければある程度与えられる時代になった、意識の上では市民の間の階級的

な差異が希薄になってきている、「金の鎖」のモチーフが伝えようとしているのはそういうメッセージではあるまいか。

一般的な時代背景を言うと、1835年にドイツ初の鉄道が敷設され、鉄道の総延長はその後猛烈なスピードで伸びていった。産業通商物流と資本主義は「後進国」ドイツでも着実に進展しつつあったのである。消費は拡大し、拡大することが望まれる状況が生まれつつあった。かつて市民社会を支えていたのは禁欲・清貧・恭順を旨とした克己的な生き方で、その基盤にキリスト教があったのだったが、この時代には地上的な生と欲望を肯定する新しい現世的価値観への転換が始まりつつあった。かつてはほんの一握りほどの上層階級にのみ許されていた欲望の充足、奢侈や現世的幸福の追求と享受の可能性が、産業革命の進行によって広く庶民階級にまでも押し上げられ、権利として認められるようになり、アントン親方に代表されるような克己的な生き方が市民階級の意識の上でも、また、産業経済消費の振興という時代的な要請の上からも、その基底の部分揺さぶられ、つき崩され始めていたのである。今や教育の普及と資本主義の進展（産業通商消費の発展）とが平等を押し進め、階級移動を活発化し、欲望肯定的な現世的価値観を是とする新しい時代を出現させ始めていた。このことは「金の鎖」のモチーフに現れているだけではない。欲望の充足に対して寛容な精神は市民社会の秩序や道徳規範や規制を内部から緩め、善悪の輪郭や階級間の境界をも曖昧にし、「秩序」からの逸脱は昔ほどには定かではないし、かつて市民階級の娘たちを飾ると同時に縛めてもいた *jungfräuliche Ehre* の相対化にも寄与した。

今時の若いやつらは、どこに居ても修養を積む、ってえことでもわしたちより進んでいる。小鳥を捕まえる時でも、散歩する時でも、それどころか飲み屋でもやつらはお祈りができるんだ：「天にまします我らの神よ」——「よう、ペーター、晩のダンスの時会えるかい」——「御名の崇められんことを！」——「そうさ、笑うがいい、カトリーネ、今にそうなるよ」——「御心のままにならんことを」——「くそっ、いまいましい、俺はまだ髭剃ってねえや」——まあどこまで行ってもこんな調子だ。祝福はめいめい自分が自分に与え

る。だってみんな牧師様と同じ人間だ、黒い服から出てくる霊力なら、青い服にだってこもっているってえわけさ。わしもこれに文句は言わぬ、あんたがたが七つの祈願の合間にビールを七杯差し挟んでも、どうってえことはない。わしはビールと宗教が折り合はないなんてことは証明できん。これが聖晩餐をいたゞく新しい流儀になって礼拝式に取り込まれるかもしれない。もちろん罪深い年寄りのわしだ、流行を追いかけるほど強くない、わしは往来でまるで黄金虫を捕まえるみたいに信仰心を起こすことは出来ない。わしにとってはスズメヤツバメのさえずりじゃあオルガンの代りは務まらない。わしの心が厳かな気持ちになるには、わしの後ろで教会の重い鉄の扉が閉まる音を聞いて、あれが俗世間からの出口だつたな、と思はなきやならないのさ。まばゆいあつかましい世俗の光を篩いにでもかけたみたいに暗くして通す細長い窓の付いた陰鬱な高い壁がわしの周りから迫って来なくちゃならん、そうして遠くにあの髑髏を壁に積み重ねた納骨堂が見えなきや気がすまんのだ。つまりは、そう——念には念を入れなきや。(Ma. 24f.)

これによってアントン親方の ehrlich な報恩行為がなぜ彼や彼の娘から Ehre を奪うといった皮肉な結果を招く原因になるのかが理解できる。内面化された Ehre は内面に取り込まれた社会的合意であるが、アントン親方が取り込んでいるのは一世代も二世代も前の社会のものであって、現在の社会の価値観との間に大きな隔たりが生じてしまっている。親方がそういう時代錯誤的な内面的 Ehre の命ずるところに従って行なった恩人への ehrlich な報恩行為が現実の社会とのこのような大きな生き方の相違によって無価値化され、禍の原因に転化されてしまうとしても、不思議はないのである。

さらに、周囲の社会による評価と承認によって成り立つ Ehre を重んじるということは、社会の判断を重んじて、個人の判断や行動の基準にするということである。ところが社会は彼がここで批判的に描き出してみせているとおり、彼とはあまりにも異なる価値観を体現しつつある。そのような社会の判断、そこでのうわさ話や指弾を気に掛けることは第一、彼自身にとって矛盾ではないか。

第二に、社会の判断というのがどの程度のものか、「パリサイ人」「蛇のような下らない奴等」といった書記の最後の言葉を待つまでもなく親方にも分かっていたはずなのだ。レーオンハルトが収税吏の職を得たことが分かったのは、彼の仲間達が彼の悪口を言っているのを耳にしたからだ、とアントン親方は言ったのではないか。これだけではない。他人の幸福をやっかみ、他人の不幸を喜ぶ市民社会の実態はこの芝居のいたるところに描かれている。そういう事情を常日頃から知っていたからこそ親方はあのような推測をすることができたはずなのだ。妬み、やっかみ、復讐心、足の引っ張りあい、これがアントン親方の重んじてやまぬ〈Ehre ある市民社会〉のありのままの姿である。商人ヴォルフラムの気の狂った妻の Schadenfreude はその最も無残なケースにすぎない。

クララがレーオンハルトに身を任せるという信じ難い暴挙をあえて冒したのもとはといえば、彼女が大学に行ったフリードリヒに捨てられたらしい、という市井の人々のひそひそ話が原因だった。この陰口も Schadenfreude である。これに挑戦して、自分はフリードリヒのことなんか何とも思っていないと言いたために、また、乙女の自尊心を傷つけたフリードリヒの〈忘却〉に対する復讐のために、クララは愛してもいない男の誘惑にあえて最後まで逆らい切らなかったのである。レーオンハルトの方も持参金問題以外に、このフリードリヒの帰郷によって嫉妬心を刺激され、彼に対する対抗意識から競争相手の先を越したかったのである。どんな手段を用いてもライバルを出し抜くというのがこの男の生き方の基本になっていて、収税吏の職を手に入れるときの彼のやり方によくそれが出ている。彼は、牧師の甥であるがゆえに有力な競争相手が酒に弱いのをいいことに前夜にしたたか酔わせておき、翌日の面接試験に失敗させただけではない。市長の右腕と言われていてその覚え目出度い背むしの姪にあらかじめ取り入って、状況を有利に調べておくのである。かつて Ehre なき階級のピカロですら実行を躊躇したほどに狡猾な手口をれっきとした市民が使うのである。こういう手合いが官吏になり、アントン親方の娘婿になりかねない、親方が重んじ、誇りにしてやまない Ehre ある市民社会のこれが実態なのだ。廷吏アーダムがアントン親方の侮辱に復讐する際に見せる執念深さと陰険さには凄まじいものがあるが、疑いが晴れて獄から出て来たカール

は船乗りになって海へ乗り出す前に必ず恨みは晴らす、と言う。

市民社会はこういう血縁や情実の絡まりあう人間関係とどろどろした相互感情から成り立っていて、この芝居を陰鬱なものにしているのは、そのような細部が念入りに書き込まれているためである。嫉妬、羨望、恨み、復讐心などが渦巻き、他人の不幸を喜び、他人の幸福をやっかみ、互いに足を引っ張りあう、といった社会はまさしくルネ・ジラルの言う模倣欲望によって支配された世界にはかならない。

けっして追いつくことが出来ないほど高みにあり、したがって絶対にライバルとはなりえないキリストのような理想像のまねびが、キリスト教の衰退とともに廃れて行って、追求すべき精神的宗教的理想の代わりに地上的なものごとが目標になり始めると人は身近にいる隣人に刺激されて、隣人の欲するところと同じものを自らも欲するようになる。隣人の欲望を模倣して同じ対象を欲するのである。隣人は凡庸だし、彼の欲するものは地上的な幸福や富や女や栄光だから、たとえ初めは隣人の方が少し先行していても、いつかは追いつくことができるまで接近する。隣人はしたがって初めは模範でありえても、やがてはライバルに転じる。隣人の方からすれば自分を模範にした人は初めは弟子であったとしても、後には自分に近づき自分の地位を危うくするライバルとなるので、蹴落とさねばならない。こうして隣人どうしの間に熾烈な競争敵対関係が生まれる。例えば兄がAという女を欲するのを見、それに刺激されて弟も同じAに関心を持つようになる。初め兄は弟のモデルだが、やがてAをめぐる兄は弟にとっての競争者、邪魔者となり始め、兄にとって弟は危険なライバルになる。兄弟の心には互いに対する警戒心や激しい嫉妬心が目覚める。兄弟は同じAを欲するという点だけでなく、互いに相手を蹴落とし、出し抜こうとする点でも、相手を妬み憎む点でも、まるで双子のように見分けがつかないほど似てくる。これが模倣欲望とか欲望の三角形とか呼ばれる理論である。

この世界の特徴は垂直方向に超越的第三者がいなくて、どこまで行っても水平次元での地獄のような人間関係の連鎖が続くという点である。新しい世代を中心に見られるそういう世界とアントン親方との違いを最もよく示しているのは、過剰な家捜しによって親方の妻を急死させ、不当な引き回しによってカー



ルに屈辱を味あわせた廷吏アーダムに対する親方と息子カールとの態度の違いである。カールは船乗りになって海へ出る前に必ず廷吏に恨みを晴らすと言うが、親方は「口で言うのはかまわんが、やってはならん (Das tadle ich nicht, aber ich verbiet es dir!)」と禁じ、「わしはお前から目を離さんぞ、もしお前が奴に手出しするようなら、わしは奴に加勢する」(Ma. 69)と付け足す。おっ母さんがいたわしくないのか、と息子に尋ねられて「今に分かる (Ich werd' s beweisen. 直訳：その思いは証明してみせる)」(Ma. 69)とだけ答えている。親方はどうするつもりか。答は第二幕第一場にある。もしカールが無罪放免になったらどうするつもりか、とクララに聞かれて親方は次のように答えている。

そのときは弁護士を雇って、おれのシャツの最後の一枚まで投げ出してでも、市長さんが ehrlich な男の件を牢屋にぶち込んだのが正当だったかどうか、聞かせてもらう。やり方に間違いがなかったのなら、文句は言わん。だって誰の身にでも起きることなら、わしも我慢しなけりゃならんからな。わしが運悪く他人の千倍もひどい目を見なけりゃならなかったのなら、それはさだめだったんだ。神様がわしをお打ちなされりゃ、わしは手を合わせて〈主よ、あなたはこのわけをご存じです〉って言おう。だが、もしそうではなくて、金の鎖を頸に下げておいでのお方が、あの宝石を失くした商人が義理の兄弟だってえことばかり頭において早まったことをしでかしたのなら、法律の本に穴があるかどうか、王様はその穴を埋めなくても済むかどうか、はっきりさせてもらおうじゃないか。何しろ、臣民が忠誠を尽くすのと引き換えに正義 (Gerechtigkeit) を通さなきゃならねえ、いちばん身分の低い者にいちばん手落ちのないようにしてやらなけりゃならんのが王様なんだから。(Ma: 41f.)

これはアントン親方の考え方の特徴を最もよく示している個所の一つである。Ehre を重んじる親方が王を頂点とする司法秩序を信じ、それに訴えて、傷ついた正義の秩序の復活を願う、というのは Weinrich の Ehre 理論にも合致する。親方にとってはひびの入った Gerechtigkeit の修復がそのまま彼や家族の

Ehreの回復につながるのである。後に『ミンナ』や『カスベルとアンネル』のところで論じるが、Ehreを重視する人間にとってEhreはGerechtigkeitとほとんど同等の意味を持っている。彼らにとってはEhreもGerechtigkeitもその最終的な承認と保証を王から受け取る公的な価値である。EhreはGerechtigkeitの別名になる場合さえある。超越的第三者に訴えて全体のgerechtな秩序を建て直す中で自らのEhreを回復しようとするアントン親方のやり方——親方は「ehrlichな男の伴を牢屋にぶち込んだのが正当だったかどうか」という言い方をしている——はテルハイム少佐にも見られるものである。これと、闇討ちをかけて報復することで自分に加えられた不正を相殺しようとする息子のやり方との違いは明らかであろう。超越的第三者もそれに基礎を置く正義の秩序もカールの意識にはない。新しい世代はみな総じてこうである。書記フリードリヒを中に挟んだレーオンハルトとクラーラの関係については既に述べた。その書記もアントン親方に向かっては、愚にもつかぬ市井のうわさ話を気にしすぎて、我が娘を追い詰める致命的な言葉を口にしてしまったと責めているけれども、彼自身はクラーラの妊娠を知らされると、「どんな男だってそれには耐えられない」と言い、相手がレーオンハルトだと聞くと、「顔に唾を吐きかけてやりたい奴の前で目を伏せなければならないのか」(Ma. 52)と言って、クラーラと結婚するためにはレーオンハルトを消すしかない、彼を果たし合いへと強制的に連れ出す。ちなみに、これは正式な決闘ではない。決闘=Duell・Zweikampfの場合もまさしく二者(Dual/Duell)的(超越的第三者のいない)水平的な関係だが、何人か介添人や医者がついていて、ルールに定められた手続きを踏み、マナーを守って行なわれる分だけまだほんの少し垂直方向の第三者の仲介があると言えなくもない。しかし書記とレーオンハルトの場合、つい先頃まで学生だった書記はともかくとして、レーオンハルトは決闘の許される身分ではないし、書記がレーオンハルトを森の空き地に連れ出すときのやり方は相手に有無を言わさぬ強引なものである。これは果たし合いでしかない。相手を倒した書記は自らも瀕死の重傷を負って戻ってきて「彼女(クラーラ)の復讐は遂げた(Sie ist gerächt)」(Ma. 69)と言っている。彼女のために仇討ちをし、自分が彼女と結ばれるに当たっての目障りと

なる人間を消す、これは中世の騎士たちが敬愛する婦人の Ehre を守ったり、回復したりするために戦った決闘とは根本的に異なる。その決闘は神による審判の代わりであり、そこでの Ehre はほとんど正義 (Gerechtigkeit) と言い換えてもいいものだったが、書記とレーオンハルトの果たし合いにそういう超越的第三者は見あたらない。市井のひそひそ話や後ろ指を恐れてクラーラを死へと追い詰めたアントン親方を批判する書記自身も他者の判断によって行動を左右される。誠実な彼はそのことに気付いていて、「私はクラーラが言い難い不安の中で私に心を開いてくれたとき、彼女を抱き締めてあげる代わりに、私はそれを見て変な顔をするかもしれない奴のことを気にしたのです、そして——私よりもくだらない奴に心を左右されたことをこうして命で償うのです」(Ma. 71) と懺悔している。

では書記が批判したように市民たちの陰口と指弾をあれほどまでに恐れるアントン親方はどうなのか。彼も結局みんなと同じように超越的第三者のいない水平的次元でしか生きていないのではないだろうか。いや、アントン親方の場合は事情が違うのだ。彼の意識においては、市民社会は依然として Ehre ある市民社会であって、その判断は彼の行動の規範であり、その規範に違反することは依然として Ehre の喪失であり、社会的な死を意味する。Ehre ある市民社会は王を頂点とする家父長的社会秩序であって、超越的第三者そのものではないにしても、神や王を後ろ盾にした権威ある社会である。彼の意識においてはいまだにそうなのだ。

アントン親方と新世代とはほとんど別世界の住人である。親方の問題性はほぼ見終えたと思うが、超越的第三者なき世界に生きる若い世代の先行きはどうか。若い世代で最後まで生き残るのはカールである。ここで再び「金の鎖」に話を戻すなら、鎖 (Kette) というモチーフだけに限定すると、劇中これは更に二度出て来て、一度はクラーラが、自分はレーオンハルトのような破廉恥漢に「繋がれているのだ (gekettet)」(Ma. 22) と嘆く場面、もう一度はカールが「鎖に繋がれていても噛み付かないすべての忠犬バンザイ (Es lebe jeder brave Hund, der an der Kette nicht um sich beißt!）」(Ma. 64) と、市民社会の飼い馴らされた者たちを嘲る場面である。「鎖に繋がれていても噛

み付かない忠犬」は、「金の鎖」を見せびらかして喜んでいたかつてのカール自身をも含んでいて、その彼が不当な逮捕監禁を体験して目を覚ました、ここでは市民社会にだけでなく、「金の鎖」を誇っていたかつての自分にも別れを告げている、船乗りへの夢はその証しだと受け取るのか、それとも、依然「金の鎖」によって市民社会に繋がれていることも忘れて、ただ威勢よくクダを巻いているだけの甘ったれた若造をここに見るべきなのか。クラークがあればほど自殺への度重なるサインを出しているのに、カールは自分のことにばかり気を取られて、いっこうそれに気付く気配もない。ついには水を所望して彼女をみすみす死に赴かせる始末である。こういう自己中心性と甘ったれた無神経は、彼が最初に登場して「金の鎖」を誇らしげに見せびらかし、妹へのケチくさい妬みを口にして、母親から小遣い金をせびる場面から終幕に至るまで少しも変化が見られない。

ただ、市民社会を断罪している点でカールと書記は同じで、未知の可能性を示唆しているようにも見えなくはない。だから書記は最後に「おお、カール！」(Ma. 71)と言って、彼に我が身を託すのかもしれない。しかし、カールは「あの向こうの海こそ俺の王国」と歌いながらチラと時計に目をやって「何時かな。9時だ」(Ma. 68)と言うような男である。彼はアダムを10時に待ち伏せするつもりで時間を確かめたのだが、威勢のいいマドロス讃歌の途中で市民社会を象徴する時計が出てくることで、「海へ」という彼のロマンチックな夢もどの程度信用できるものなのか疑わしくされている<sup>10</sup>。

レーオンハルトは論外としても、クラークも書記もカールも Vormärz の政治的、社会的な閉塞状況の中で行き場を見失った若者達である。ただ一人磐石と見えたアントン親方も彼の生の基盤である古い Ehre の有効性がもはや信じられなくなってしまう。こうした出口なしの時代状況こそテキストが伝えようとしているものであり、クラークが身投げする暗くて狭い井戸はそれを象徴しているのではあるまいか。

最後にアントン親方の古い Ehre 尊重の問題性についてまとめておくと、

1. 身分差別的 Ehre : 既に過去のものとなった古い人権無視の Ehre にこだわる。

2. jungfräuliche Ehre : ヒューマニズムと現世的価値観によって相対化されつつある古い Ehre の重視。1. とともにアナクロニズム。
3. 外面的 Ehre : 周囲の社会によって与えられる承認としての Ehre
  - ① 彼が期待するような承認を価値観の異なる新時代から得ることは不可能。
  - ② 社会全体がもはや信用に値しないものになってしまっているいじょう、その意見や評価にあまり意味がない。
4. 内面的 Ehre : 彼が取り込んでいる Ehre は一、二世代前の社会の価値観であり、それに基づいた行動は新世代によって評価されないだけでなく、新しい生き方によって空洞化され、裏切られる。

にもかかわらず何故アントン親方がこんなにも古い Ehre にこだわるのか：市民社会の末端で貧困に喘いでいた少年時代の悲惨な暮らしが彼のトラウマになっている。生れつき自明のこととして Ehre に与かっている者たちよりも、努力の末やっとのことで Ehre に与えられるようになった者たちや、Ehre の基盤がそれほど安定していない者たちの方が Ehre を重視し、Ehre の掟に忠実であろうとする。本章29ページと第三章82ページを参照のこと。

さて、ここで古い Ehre という価値観ゆえの悲劇という視点からもう一つ同じテーマを扱った作品を取り上げておきたい。それはヘッベルと仲が悪かっただけでなく、何かにつけて対照的と見なされてきた作家シュティフターの『古い印章』という初期の物語である。書かれたのは『マリーア・マグダレーナ』の前年の1843年。

主人公のフーゴーは軍人だった父親が亡くなった時「何よりも名誉を重んずべし (Servandus tantummodo honos)」(Si. 130) というラテン語の銘が彫られた古くから家に代々伝わる印章を受け継ぐ。それには「この格言に従う限り、失われるものは何もなく、自分自身の前にも他人の前にも正当で非の打ち所のない者として立つことが出来る」(Si. 130) という書面が添えられていた。「よし、変わることなくこの格言を守ろう。生きている限り、私の心をも Ehre をも汚すことはしないぞ、どんな者にも私を非難するようなことを言わせはしない、そしてとりわけ私が自分だけの密かな罪を隠し持つようであって

はならない。私は偉大で有益な事業を成し遂げる助けとなりたい、これで十分だろうかと良心に問うて、もし私の良心が：〈お前の父親が生きていれば、それをいつか夕べの団欒のとき家族の者たちに話して聞かせるに値すると思うだろう〉と答えれば——その時には私は故郷の家に帰るのだ」(Si. 130)と独りごちる。

都会に出て勉学に励んでいた彼はやがて一人の婦人と知り合い、深く愛し合うようになるが、彼女はある日忽然と姿を消し、フーゴーは折から始まった反ナポレオン解放戦争に参加して、再会するのはやっと11年後である。その時彼は彼女の口から、当時彼女が既に人妻であり、二人が近づき、愛し合うようになったのは、彼女の横暴な夫を憎んでいた執事が、薄幸の彼女に同情して、子供のなかった彼女が高齢の夫が死んだ際に遺産を相続できるようにと密かに仕組んだ計略のせいだったことを知らされる。執事の思惑どおり彼女は身ごもって娘を生み、年の離れた彼女の夫は死んで、彼女は遺産を受け継いだのだった。これを聞いたフーゴーは「あなたのしたことは良くない、あなたの夫に対しても私に対しても。私はもうあなたを信じるわけに行かない」(Si. 179)と言う。執事の計画のことは当時は彼女も知らず、後になって初めて知らされたのであるが、フーゴーは自らの運命と和解することが出来ない。その時の二人の主張の違いは次のやりとりから読み取ることが出来る。

「未亡人と結婚して、あの男は夫の生前から既に彼女と出来ていたのだと噂されるような、そんな人生とは違った人生を私は送るつもりでした」

「そんな噂は立ちません、フーゴー、だって誰もこのことを知らないのですから」

「なら、私自身が言うでしょう」

「あなたは自分を責める必要はない、あなたに罪はないのですから。あなたは相手が人妻だとは夢にも思わなかったのです」

「それならますますあなたが悪いことになる。いいですか、ケレステ、もしあなたが自分が人妻であることを私に告げていたら——、私は近づかないで、他の誰をも愛さず、神の思し召しによって、二人が結ばれてももは

やそれで（姦淫の）罪を犯さずに済む時が来てから、神と人々の前に（vor Gott und der Welt）恥じるどころなく（frei）結婚したでしょうに」

「私は怖かったです、あなたを失うのではないかと。どうか赦してください」

「あなたには分っていない、ケレステ。私は心からあなたを赦し、私たちの身の上を嘆きます（Ich verzeihe dir von Herzen und beklage uns.）。あなたが最も身分の低い下女であっても、あなたが豚飼いの娘だとしても、私はあなたを花嫁としてこの腕に抱いて祭壇に運ぶでしょう——しかし、これまで承知の上で我が身に不正を容認したことはない私です、その私が今からどうやって私自身の前に立つことが出来るのでしょうか、私を今まで畏れ敬い、どんな小さな汚点も私に対して非難できなかった者たちの前にどうして私はこれから立てるのでしょうか」

「それではあなたは温かい永遠の晴れやかな人生を犠牲にしてもいわず Ehren とやらを守ろうとなさるのですね。（中略）天上の神があなたのその血も涙もない美德に報われますように、でも私の心はそれを呪います（Also könntest du der sogenannten Ehre das warme, ewige, klare Leben opfern?（——）möge Gott im Himmel diese harte Tugend lohnen, aber mein Herz verflucht sie）、心は引き裂かれようとしているのですから。——確かに私は罪深い女（Sünderin）です、しかしこの罪（die Sünde）は私にとって容易なものではなかった、あなたはその優しい果実だけをご覧になっていたのです、罪ゆえの戦いには私一人で耐えたのです。私の罪の方があなたの美德よりも人間的なのです（Meine Sünde ist menschlicher als deine Tugend.）」（Si. 180f.）<sup>11</sup>〔（ ）内引用者〕

その時、フーゴーと同じ見事な金髪の娘——二人の子供。問題の執事がケレステに子供を授かる計略を練ったとき、彼はケレステの夫と同じ金髪の青年を探した。むろん夫に自分の子供であることを疑わせないためである。執事が

フーゴーに白羽の矢が立てたのは、彼の美しい金髪ゆえにである——が部屋には入ってきて「お母さん」と呼びかけるが、その子供らしく澄んだ声の響きを耳に残しながら彼は彼女の館を立ち去り、陣営に帰り着くとそのまま横にならずに明け方までかかってケルステ宛に別れの手紙を書く。手紙の文面は出てこないが、手紙を書き終わった後の場面は次のように描かれている：「書き終って手紙をたたみ、封印したとき、彼は印章の文字に目をやった。文字は明け方のロウソクの曖昧な光の中に (in dem zweifelhaften Scheine : 直訳は「疑わしい光の中に」) 陰鬱に並び (düster dastanden)、きめ細かな赤い封蝋に〈何よりも名誉を重んずべし〉という銘を刻みつけていた」(Si. 183)

解放戦争は終り、フーゴーは故郷の祖先の屋敷に帰って、農地や山林を管理しながら、村人たちの啓蒙活動にあたり、慈善事業をして余生を過ごす。老境に近付き、「その顔つきから戦争が刻みつけた厳しさが消え」て、優しい気持ちを取り戻したとき、フーゴーは「良心の呵責 (Gewissensbissen)」に苦しみ、さめざめと涙を流して「彼女のような人はいない、彼女のような人はいない」(Si. 184) と言うのだった。その美しい金髪が白髪となった時、彼は近くの高い山に登り、あの〈何よりも名誉を重んずべし〉と刻まれた祖先から伝わる「古い印章」を「氷河の裂け目の底深くに (in eine unzugängliche Schlucht)」(Si. 184) 投げ込むのである。

『古い印章』という作品が伝えんとするメッセージは明らかであろう。

フーゴーは貴族ではないが上流出身の軍人で、貧乏職人のアントン親方とはずいぶん違った境遇で、違った人生を生きているが、古い Ehre を重んじる生き方が新しい時代の波によって裏切られ、空洞化され、その生き方を貫くことが不幸と破局の原因になるという構造の点で、『マリーア・マグダレーナ』と『古い印章』とは驚くほど共通するものを持っている。

フーゴーの堅苦しい人生観や価値観の古さは、彼が山村の出であり、彼の若い優しい母が早くに死んでしまって、祖父ほども年の違いう高齡のしかも元軍人の厳しい父親の手一つで教育された、といった事情の相乗作用によって説明される。その点彼には古い Ehre を重んじる父親に追い詰められてゆく娘クララの立場に似たところも認められるが、彼女ほど受動的ではない。



では、フーゴの重んじる古い Ehre とは何だろうか。ケルステは彼の Ehre 尊重の姿勢を二度にわたって美德 (Tugend) と呼び一度はそれを血も涙もない (hart) と形容しているが、彼女は更にその美德を「天上の神 (Gott im Himmel)」と結びつけ、自分を「罪深い女 (Sünderin)」と呼び、何度も「罪 (Sünde)」という言葉を使っている。Ehre を重んじるフーゴの古い生き方に対して彼女が主張する新しい価値観は「温かい永遠の晴れやかな生 (das warme, ewige, klare Leben)」、「私の心 (mein Herz)」、「より人間的 (menschlicher)」といった言葉によって表されている。フーゴの Ehre に対して、たとえ罪に汚れていようとも真摯に生きられた地上的、人間的な生の価値が主張されている。ちなみに彼女は革命の国フランスの女性である。

「天上の神」が言及されているのでフーゴの態度はあたかもキリスト教的「美德」だと言われているように見えるが、これは「罪深い女」とか「罪」と対照させるためのケルステのレトリックであろう。むしろ彼女が言いたかったのは「血も涙もない」という方で、フーゴの態度はキリスト教的「美德」などとは無縁の、異教的非寛容であり、「血も涙もない」リゴリズムにすぎない、ケルステの言説の重点はむしろそちらの方にある。かつての自らの峻厳な振舞いを悔いる晩年のフーゴの「良心の呵責」を知ると、やはりケルステの方が正しかったのではないかという風に考えたくなる。

しかし、フーゴ／ケルステの対決を判断するさい注意しなければならないのは、彼らの「罪」が姦淫の罪だけではない点である。たとえ執事が仕組んだことで、彼ら自身の与かり知らない計画だったとはいえ、これが遺産相続のために仕組まれた姦通であり、それによってケルステの夫を二重に欺くという犯罪的な意図を持ってなされた陰謀だったからである。フーゴがケルステを責め、自分を責め、運命を呪う (Ich — beklage uns) のはそのためである。たとえ彼が年老いて気が弱くなってから、優しかったケルステを懐かしむ思いをつのらせ、失われて二度と取り戻せない人生の幸福を嘆いて、Ehre を重んじ過ぎた自分の非情さを責め、「古い印章」を氷河の谷底深く投げ込んだとしても、あの対決の場面でのフーゴの判断が間違っていたと完全に言い切れないのはこのためである。彼の内面化された Ehre が耐えられないと言う汚辱はキ

リスト教的な罪の概念に思いのほか近いところがあることは否定できないのではないだろうか。

しかしここでもう一つ考慮しなければならない点がある。それはケレステがあのような恐ろしい秘密をフーゴーには知らせず黙っていてもよかったはずなのに、つつみ隠さずすべて打ち明けた驚くほど ehrlich な告白の重みである。その晩眠らずにフーゴーがどんな手紙を彼女に書いたかは分からない。しかし対話の中には彼女の感動的なまでに率直な態度に対するフーゴーからの言及は一言もない。一切は執事の計画したことで自らは何も知らなかったとはいえ、その行為の罪深さに対する強い呵責の念と悔恨が彼女になればこのような告白、それはほとんど懺悔と呼んでもよいものだろうが、罪深い過去についての打ち明けはありえなかったのではないだろうか。Ehre にばかり心を奪われて、ケレステのそのような心中を見抜けず、彼女の優れた人間性の深みを洞察できなかった、そこにこそ Ehre 観念に囚われたフーゴーの限界があり、彼の過ちがあったのではないか。晩年に彼があれほどケレステを懐かしみ、深い悔恨に苛まれるのは年老いてようやく彼がそのことに気づいたためではないかと思われる。

『マリーア・マグダレーナ』でもクラウラが書記にレーオンハルトとの関係と妊娠を婉曲に打ち明ける場面がある。それを受けて「たいていの女たちなら狡賢く黙っていて、甘い忘我の瞬間を狙って夫の耳と心にささやいただろうに。君の率直さに報いたいと思う (Ich fühle, was ich dir schuldig bin!)」(Ma. 52) と書記は言っている。フーゴーがあの場合でケレステに言うべきだったのはそういう言葉ではなかつたらどうか。書記にそういうことが言えたのは彼が Ehre などという観念の虜になっていなかったからかもしれない。しかしその彼も最後の場面で自らを責めているように、すべてを受け入れて彼女を抱き締める代わりに、「そんなことをしたらそれに向かって変な顔つきをするかもしれない」レーオンハルトのことが気になり、素直な行動が取れなかった。

クラウラが自殺した後の最終場面で書記は、アントン親方のかたくなな Ehre 至上主義を地上的な愛やかけがえのない命の重みに対置し、この短い一度限りの人生の中でいざというとき Ehre などより肉親の愛やいたわりの方が

どんなに尊いかを次のように語っている。「あなただって今どんなにガッシリと立っていても、そのうちいつかこうおっしやる時が来るでしょう、娘や、わしの周りのパリサイ人たちが首を振ったり肩をすくめたりしても別にどうってことはなかったのだ、お前がわしの臨終の床で側についてくれてわしの体からあぶら汗を拭き取ってくれることの方がわしにとってどんなに有り難いことだったろうか、ってね」(Ma. 71)。書記の言葉はクララの心中に思いを致す代わりに下らない奴であるレーオンハルトのことを考えて行動の自由を奪われ、かけがえのないものを失ってしまった彼自らにも向けられているのであろう。

興味深いことに『古い印章』でも最後に、生の一回性とその中での人間の孤独、そして愛のかけがえのなさが強調されている。Ehre より、たとえ罪深くあろうとも、罪を悔い、過去の過ちを乗り越えて一度限りの地上的な生を精いっぱい生きることこそ価値があるのではないか、というケレステの主張が最後に来てもう一度繰り返されているように思われる。

フーゴーが亡くなったとき、遺言にしたがって遺産相続の手続のために外国から若く美しい金髪の婦人——フーゴーとケレステの娘。ケレステはフランス人で、革命の嵐が去った後ふたたび故国に帰った。若くて金髪ということからこの婦人がフーゴーとケレステの間に生まれ、母親のもとで育てられていた娘の成長した姿であることが分る。フーゴーはこの娘を相続人に指定していたのである——が山腹の館を訪れ、フーゴーの墓の前で長いこと涙にくれる。

(——) その後彼女は二度の夏に夫と二人の子供とともにやって来て、山腹の館に数週間滞在した。しかし、それから後はもう彼女が訪れることは二度となく、建物は次々と借家人たちの手に帰して、しだいに朽ち果てていった。

教会からは昔のままに朝の鐘が鳴りわたり、小川は昔のままにざわざわと音立てて流れているが、かつての館は今では廃墟となって、もの悲しい陰鬱な眺めと化している。

ただ山々だけが今なお昔ながらの壮麗な姿でそびえている——それらの頂は、われわれやその後続く世代の者たちが死んでからもなお輝き続けるであろう、ちょうどローマ人たちがこれらの谷々を通りすぎ、それからアレマン人

が、それからフン族が、それからまたさらにいろいろな種族がここを通りすぎたとき輝いていたように。——われわれが死んだ後、まだどれほど多くの者たちが後に続き、あの峰々が彼らの心に喜びや穏やかな哀しみを分け与えるか知れない、しかしその彼らとてやがては去り、われわれにはそれがどんなに磐石に思え、永遠にこのまま在り続けるように見えようとも、この美しく優しい大地さえもがおそらくは消え去る日が来るかもしれないのだ。(Si. 184f.)

ここでは宇宙的な広がりや悠久の時の流れの中に人間の束の間の命の営みが置かれ、人間がけし粒のように相対化されている。このように時空を無辺大にまで拡大するとき、Ehreのような人為的社会的な価値はある特定の時代や社会に強く結びつけられた相対的なものにすぎないことが意識され、急速に色褪せてしまい、代わって愛のような宇宙的生命と通じ合う根源的な価値が輝きを放ち始める。このような視点が出てくるということ自体、古い社会や道徳の秩序が揺らぎ始め、古いEhre 尊重の生き方が疑われ始めていた証拠である。

『エフィ・ブリースト』で、たとえEhreが偶像と解っていても、偶像が倒れない限りはその前に拝跪するしかないと、貴族社会のEhreの掟の命ずるところに従って決闘に赴いて相手を倒し、エフィを離別したインシュテッテンはその後どうなったか。あれから数年後、彼がめでたく本省の局長に昇進した日の晩、お祝いに訪れた友人ヴェラーズドルフとの対話で彼はこう述懐している：

僕は喜びなんて忘れてしまったよ。(中略) 部屋の中を見回して見たまえ、すべてが何と空しく味気ない(Leer und öde)ことか。(中略) 僕にはもう何一つ気に入るものがないのだ。顕彰されればされるほど、ますます僕にはそういったすべてが無価値に思える。僕の人生は失敗さ。(中略) ここから立ち去るのだ、ここを去って、文化ともEhreとも無縁の真っ黒な土人たちのところへ行くのだ。あの幸福な者たち。だって元凶はこれなんだ、すべての責任は文化だのEhreだのというがらくたにあるんだ。最後がどうなろうとかまわぬといった情熱からはあんなことしやしないよ。単なる観念のためなんだ、観念のためだよ！(bloßen Vorstellungen zuliebe, Vorstellungen!) (Effi. 326ff.)

ここで問題になっているのは貴族社会の Ehre だが、このように語るインシュテッテンは、晩年になって「良心の呵責」に苦しみ、さめざめと涙を流して「彼女のような人はいない、彼女のような人はいない」と言うフーゴーや、「わしには世の中ってものが分からなくなった」と呆然自失する最後の場面のアントン親方にとてもよく似ている。

### 第三章 内面的 Ehre の問題性：『ミンナ』、『カスペルとアンネル』、 『古い印章』

フーゴーやアントン親方の悲劇に彼らの内面化された Ehre が強く関わっていることについてはもはや付け加える必要はないと思う。

ここではむしろシラーの『失われた Ehre からの犯罪者』の Ehre について補足しておかねばならない。これを論じたとき、aus verlorener Ehre を〈市民社会に加わって生きて行くための必要最低限の社会的信用〉を失ったと見なされて、〈市民社会への仲間入り（社会復帰）を許され〉なかったがゆえの、という意味だと結論づけた。しかし「失われた Ehre」をそういう意味にだけ限定するのは早計であろう。

16-17pに引用した個所でも「せめて見せかけだけでも堅気のふりをする気力さえなくしていました。絶望と汚辱からとうとうそんな気持になってしまっていたのです」と言われていた。主人公はまた「私はついに恥じることをさえて忘れてしまっていたのです (ich hatte endlich verlernt, mich zu schämen.)」(V. 12) とも言っている。つまりそこで問題にされているのは羞恥心、自尊心、社会復帰への意欲であり、それが「失われ」てしまったことである。「失われた Ehre」はこの文脈だと、羞恥心、誇り、更正への気力の喪失を意味する。

彼からそういう気持ちを奪ったのは三年間の監獄生活だった。彼は背中に絞首台の焼印をおされ、非情で野蛮な看守のもとで、「二人は殺人犯、あとはみな悪名高い強盗と浮浪者」という二十三人の囚人たちとともに拘禁されて、「獄に入ったときは道をふみはずした人間というだけだったが、出てきたときにはごろつきになって (Ich betrat die Festung als ein Verirrter und verließ sie als ein Lotterbube.)」いた。「以前はまだ、世の中に大切なも

のがあったのですが、私の誇りは恥辱をうけて屈しました (Mein Stolz krümmte sich unter der Schande.)」(V. 9) と言っている。

この文脈で読むと、この作品は Ehre、つまり、羞恥心も誇りも更正への意欲も根こそぎ奪い取ってしまう当時の刑罰のあり方を告発していることになる。

Ehre が羞恥心、誇り、道徳的自尊心、堅気に生きて行こうとする気力といった精神的姿勢を意味するとすれば、これは内面的 Ehre と呼ぶべきものである。既に批判したとおり Weinrich は Ehre をもっぱら外的なものに限定し、Ehre が他人による承認を意味する以上、内面的 Ehre というのは言葉の矛盾だと言っている。しかし、「はじめに」に掲げたドイツ文学の幾つかの作品では、明らかにこの内面的 Ehre と呼ぶほかないもの、つまり、道徳的自尊心、誇り、ehrlich に生きようとする気概、志操といった精神的姿勢が問題になっている。これは、身分や職業の違いはあっても、アントン親方にもフーゴーにも等しく認められる徳だった。

内面化された Ehre を考えるにあたって、最もふさわしい作品はレッシングの『ミンナ・フォン・バルンヘルム』とブレンターノの『健気なカスペルと美しいアンネルの物語』であろう。

『ミンナ』は七年戦争後のベルリンの一ホテルを舞台とし、免官されたプロイセン軍将校フォン・テルハイム少佐と七年戦争でプロイセンとは敵どうしだったザクセン国テューリンゲン地方の貴族の娘ミンナ・フォン・バルンヘルムとの Ehre と恋のもつれ、Ehre と金銭の関係を描いた喜劇である。

和平締結後行方の分からなくなった婚約者で旧敵軍将校のフォン・テルハイム少佐を探し求めてミンナがベルリンのホテルに投宿するところからこの喜劇は始まる。彼女の泊まる宿の一室こそ彼女が探し求めるテルハイムがその直前まで起居していた場所なのだが、彼女はそのことを宿の主が見せた指環から知る。彼女の部屋の先住者が払えない宿代のかたに質入れしたというその指環は、かつてミンナがテルハイムに与えた婚約指環だったからである。宿の亭主は支払能力のない旧将校を見限って追い出し、その後にミンナを迎え入れたのだった。偶然が重なって意外に早く恋人に再会できたミンナだったが、テルハイムはそこで、Ehre を傷つけられて免官され、戦傷で片腕が麻痺し、無一文になっ

た自分のような男にはミンナのように立派な女性と結婚する資格などない、自分の不幸と不名誉とにミンナを巻き込みたくない、自分のことは忘れてくれ、と言うのである。戦争後彼が別れも告げずに彼女の前から姿を消したのも、同じ理由からである。ミンナは、テルハイムが今なお彼女を愛している、それだけで充分ではないかと言うのだが、今なおミンナを愛し尊敬するにもかかわらず、いやそれゆえにこそ今の我が身を彼女に結び付けるわけには行かない、自分は彼女にふさわしくない、とテルハイムは言い続けて、後へ引かない。

テルハイムは愛＝ミンナ (Minne = Minna) の命ずるところではなく、「Ehre の命じるところ」(Mi. 485) に従う。テルハイムの Ehre とは何か、

フォン・テルハイムは喜劇の主人公でありながら、ドイツ文学史上まれに見る廉潔の士である。「世界一勇敢」「こよなく誠実」(Mi. 435)「世界一立派」(Mi. 442)——これは惚れた弱みでミンナが口にする褒め言葉だから割り引いて聞かねばならないとしても、強欲な宿屋の亭主でさえ「その他の点では(貧乏という点を除けば)申し分のないお方」(Mi. 442)と言い、詐欺師のフランス人士官リッコですら「まったく礼儀を弁えたお方です、少佐殿こそ紳士の鑑」(Mi. 475)と言っている。召使いの目で見ればヒーローなどいないという諺に反して、従卒のユストはテルハイム少佐をまるで主人に懐く忠犬のように慕い、ヴェルナー曹長は戦争が終って退役した後になっても、不遇の身をかかっているかつての上官の身を案じ、何とかして力になりたいものと奮闘している。

テルハイムの清廉ぶりが最もよく発揮されるのは金銭が絡むときである。この退役軍人は宿の払いもままならず、部屋を追い出されることになってもかつての部下が彼に預けていった金に手をつけようとしめない。その金は実は預けるという名目で、手もと不如意のテルハイムに使ってもらおうとヴェルナーが置いていったものなのである。文無しと思って軽蔑していた少佐の机の引き出しから思わぬ大金が出て来たので宿の亭主がすっかりびっくりして、部屋換えの措置を早まったか後悔するほどである。ちょっと払いが悪いくらいで立派な軍人をさっさと部屋から追い出してしまう亭主のやり口に怒った従卒のユストは亭主に罵詈雑言を浴びせ掛けるが、テルハイムは支払いが出来ないじょう

「当然の措置だ」(Mi. 421)と恬淡としている。

宿代も払えないほど困窮している彼のところへ、戦死した部下マールロフ騎兵大尉の未亡人が亡夫の遺言にしたがってその借金を返しにやって来る。テルハイムは遺児を抱えて苦勞する彼女の窮状を察して、相手の自尊心を傷つけないよう気を配りながら上手に申し出を拒否する。貸した覚えはない、借用証書など残っていない、証書がない以上、それは亡くなられたご主人の思い違いである、安心して引き取られよ。少佐の意のあるところを悟った未亡人が感謝の涙にくれながら去った後、彼は懐中から当の証書を取り出し、「手許が苦しくなるとふと出来心を起こして、これを使わぬでもないからな」(Mi. 426)と独りごちながらこれを引き裂いてしまう。

これが『エミーリア・ガロッチィ』のクライマックスの場면을思い起こさせる、と言えどとっぴな連想だろうか。ずっとこのまま公爵のもとに捕らえられていたらついには誘惑に負けて操を汚すことになることを恐れて命を絶つヒロインの意志的な決断の場面である。「操は暴力にあって屈するものではあるまい」と言う父オドアルドーに対して、エミーリアは「けれども、どんな誘惑にも負けないとは申せません。——暴力、暴力といいますが、暴力に逆うことは誰にだってできましょ。暴力というものはそんなに厄介なものではありません。誘惑こそ本当の暴力です。わたくしの身体にも血が通っていますよ、お父様。世間の乙女と同じように若々しい、熱い血潮が流れていますわ。わたくしの官能もありふれた官能ですわ。自分のことながら、なんとも保証はできません」(Em. 590)と言って、娘の胸を刺し貫いて娘を辱めから救った昔のけなげな父親の話をして、故事に倣うよう父を挑発する。娘を刺したあと呆然自失する父親に向かって「薔薇の花を嵐が散らす前に手折ったのです」(Em. 591)と慰める気丈なエミーリアの死の場面である。

深刻さの度合いに開きはあるものの、テルハイムとエミーリアの行動の論理は同じである。自らの内なる欲望を自覚し、誘惑に負ける人間的な弱さを認めたと上で、誘惑の根を断ち、誘惑される危険を排除する倫理的意志。ドイツ文学の古典はこのような自律的・道徳的意志の勝利に満ち満ちている。「克己心(Sieg über sich selbst)」(Mi. 449)「決して下劣な真似はすまいという固い



決意 (fest entschlossen, keine Niedertächtigkeit zu begehen) (Mi. 451) とテルハイムは別のところでは言っている。テルハイムの Ehre とは、とりあえずは、自分の物質的・金銭的欲望に打ち克つ克己心、自らのあからさまな欲望肯定によって他者、特に弱者に負担をかけるのは軍人にとって恥辱だという矜持の姿勢、と言っておこう。エミーリア・ガロッティは jungfräuliche Ehre を守るために命を擲つ覚悟をする。その決意を促すのは彼女の内なる Ehre であって、制度としての jungfräuliche Ehre に圧され、追い詰められてではない。フォン・テルハイムは貧困に耐えても軍人としての Ehre を貫く。これも軍人としての面子や体面のためではなく、内面化された Ehre である「克己心」や「決して下劣な真似はすまいという固い決意」の命じるところに従っている。内面的 Ehre はストイシズムと結びついて、愛、結婚、幸福、富、そして命さえもの断念を要求する。このことはアントン親方やフーゴの例にも既に見られたとおりである。

金銭と Ehre の相反的、問題的な関係は『ミンナ』における最も中心的なテーマの一つであるが、『マリーア・マグダレーナ』でもアントン親方が娘のなけなしの持参金をはたいて恩人の貧窮を救うという重要なモチーフがあった。だが、金銭を擲って Ehre の命ずるところ (人間的信義) を全うしたアントン親方の ehrlich な行為が娘からも親方からも Ehre を奪う、このいきさつについては既に詳しく述べたとおりである。

『ミンナ』でも『マリーア・マグダレーナ』と同じようなことが起こりかける。プロイセン軍将校フォン・テルハイム少佐も七年戦争中占領地に対する苛酷な収税通達を実施するを潔しとせず、自らの責任において自腹を切って不足額を代納し、戦後その代納分を政府に返却するよう請求するが、逆に収賄の罪に問われ、著しく Ehre を傷つけられる。この経緯についてもアントン親方の場合と比較する目的で既に述べた。ミンナと再会したときテルハイムを苦しめていたのはこの不当な汚辱の状況である。

収賄の嫌疑そのものよりも、それ以上に耐え難いのは Ehre の命ずるところに従ってやった ehrlich な行為が正当に評価されないことの方である。彼は「正義 (Gerechtigkeit) (Mi. 490) を疑い、「人間憎悪の恐ろしい笑い声 (das

schreckliche Lachen des Menschenhasses)」をあげる。「その笑いを聞くのは死ぬ思いでございます、テルハイム様。もし貴方が人間の徳と神の御心を信じていらっしゃるのなら (Wenn Sie an Tugend und Vorsicht glauben)、どうかその笑いをおやめください」(Mi. 488) とミンナは懇願する。彼はまさしく「神の御心」、神の摂理が信じられない状況にある。これは彼にとって自らの Ehre の問題である以前に「正義」の問題なのである。なぜ ehrlich な人間の行為が正しく理解も評価もされず、逆にこのように不当な汚名を着せられる原因にならねばならないのか。なぜ ehrlich な人間が不当な汚辱を受けて苦しまねばならないのか。テルハイムの置かれた状況は、少なくとも彼の意識においては、義人ヨブのそれと同じである。ということはアントン親方の運命にもヨブ的な要素があるということである。ゲープハルト親方への報恩行為が彼と娘を破局に追いやる経緯に関してだけ言えば、あれはヨブ的な運命である。

もう一度第四幕第六場に戻るなら、テルハイムはそこで「Ehre というのはわれわれの良心の声でも、少数の誠実な人達の証言でもありません—— (Die Ehre ist nicht die Stimme unsers Gewissens, nicht das Zeugnis weniger Rechtschaffenen——)」(Mi. 490) と言っている。彼の台詞はミンナによって遮られてしまうので、その後何が続くはずだったのかわからない。しかしその前の台詞で「特別の思し召し (Gnade) など結構、私が望むのは正義 (Gerechtigkeit) です」(Mi. 490) と言っているところから、国王によるとりなしだの恩赦などではなく、軍司令部なり、政府なり、司法当局なりによって彼の ehrlich なあの措置が、ねじ曲げられることなく、あるがままに正しく理解され、評価されること、そのことをこそ彼が望んでいることが明らかになる。彼にとって自らの Ehre の回復は正しい秩序の回復、正義の回復なのである。「Ehre というのはわれわれの良心の声でも、少数の誠実な人達の証言でもありません」の後には「そうではなくて正義なのです (sondern die Gerechtigkeit)」が続くはずだった、と推測してまず間違いないであろう。ちなみに、「特別の思し召し (Gnade) など結構、私が望むのは正義です (Ich brauche keine Gnade; ich will Gerechtigkeit.)」の所も「私の Ehre は—— (Meine Ehre——)」(Mi. 490) と続いていて、そこでミンナによって遮

られる。その後が続けられていたとすればやはり「正義です (ist die Gerechtigkeit)」しかありえないのではないだろうか。テルハイムがあれほど自らの Ehre にこだわるのは、それがこの場合には正義と同義だからである。

「Ehre というのはわれわれの良心の声でも、少数の誠実な人達の証言でもありません」と言うテルハイムに対してミンナは “Nein, nein, ich weiß wohl. —Die Ehre ist— die Ehre.” (Mi. 490) と答えている。有名なタウトロギーである。もしその前に「そうではなくて正義なのです (sondern die Gerechtigkeit)」を想定すれば、この同語反復は「ちがいます、ちがいます、私にはよく分かっています。Ehre は — Ehre です (Ehre は — 正義などではなく、所詮それだけのものですわ)」(Mi. 490) となって、つじつまが合うのではないだろうか。

Ehre を重んじる人間が Gerechtigkeit を求める例をわれわれは既にアントン親方において見た。彼は Gerechtigkeit を守護するのが王様の責任であると言っていた。王の権威によって世の Gerechtigkeit が守られることを当然のこととして期待し、それを信じてもいた。後で見るように Ehre を重んじるアンネルもまた Gnade ではなく Gerechtigkeit を望む。『古い印章』のフーゴーも自分とケルステの上に正義による裁きを下したと信じたのではあるまいか。

Ehre は主観的にはすべて Gerechtigkeit なのである。距離を置いて冷静に評価すれば Ehre は常に Gerechtigkeit というわけではないのだが、ある時代のある社会の全体が Ehre を正義と見なしていたからこそ Ehre は Ehre たりえた。社会全体がある種の Ehre を正義と見なしていたからこそ、例えば Ehre ある市民に対して Ehre なき賤民を平然と差別し、Jungfrauenehre を失った娘に対して残酷な弾劾を加えることに誰一人疑いも抵抗も感じなかったのである。そういった Ehre = 正義の多くは時代と共に相対化され、有効性を失っていったが、テルハイムがここで正義だと主張している Ehre は今日でもやはり正義であるし、アントン親方の ehrlich な報恩行為があのような破局につながったことについては様々の要因が介在しているとはいえ、やはり正義の秩序が損なわれていると考えるしかない。内面化された Ehre、つまり人間的信義としての Ehre、Ehrlichkeit としての Ehre は今日でも依然として正義たりう

る場合が多い。

このように『ミンナ』はヨブ的な重い主題を持っている。にもかかわらずそれが悲劇にはならず喜劇でありうるのは、国王の親書によってテルハイムの Ehre と正義が最終的に回復されるからだけではない。また、宿の亭主、ユスト、リッコーといった喜劇的登場人物のせいばかりでもない。高潔廉直の士フォン・テルハイム自身に喜劇的要素があるためである。では、彼の何処が滑稽であり、彼のどのような考え方や態度に諷刺の矢が向けられているのだろうか。

皆から敬慕される清廉の士テルハイムが親しい者たちをはっきりと怒らせる個所が何箇所もある。一つは第三幕第七場で、ヴェルナーによる金銭援助の申し出を彼がしつこく拒否し続けて、ついには実直なヴェルナーを怒らせてしまう場面、もう一つは同じ幕の第十二場で、テルハイムが我が身の不幸と汚辱を理由にミンナとの結婚を辞退し続けることにミンナが機嫌を損ねる場面である。いずれも、どんなことがあっても他人の保護は受けたくない、他人の善意に頼ったり、好意に甘えたりはしない、というテルハイムの姿勢を、愛と友情と信頼に対する裏切りと見なす善意の人々の怒りにほかならない。

テルハイムは宿代も払えないほど貧窮しているくせに、亡夫の借金を払いに来た未亡人を、相手の身の上を思いやって上手に追い返すばかりではない。軍に請求し続けている未払金がなかなか支払われないために手許不如意のかつての上官テルハイムを氣遣って、ヴェルナー曹長が彼に預けていった500ターラーの金にもいっさい手をつけようとしない。その金ももうそろそろ底をつく頃だろうと見計らってヴェルナーは新たに資金をテルハイム少佐にとどけにやって来る。新たな戦争のためペルシャに出かける決心をして処分した領地の代金100ドゥッカーテンがそれである。対応するのは従卒のユストである。

ユスト：で、この金をどうしていただくんです？

ヴェルナー：どうしていただく？ じゃんじゃんお使いになるがいい。賭博をするなり、酒を飲むなり、とにかく—— 気ままにお使いになることだ。あの人には金が要りようだ。だって、あの人の当然の権利に（軍当局が）色よい返事をしないなんて、あんまりじゃないか。（中略） さあ、この100ドゥ

カーテンを取って、少佐殿にお渡しするんだ。(中略)

ユスト：ヴェルナーさん、ご好意はほんとうに身にしみます。ですがお金は頂戴するわけにゆきません。このドゥカーテンは納めて下さい。例の100ピストーレも、要るとおっしゃれば、手つかずでお返しできます——

ヴェルナー：そうか？ いったい少佐殿はまだ持ち合わせがおりなのか？

ユスト：いいえ

ヴェルナー：どこかでなにがしか借りて来られたのか？

ユスト：いいえ

ヴェルナー：じゃいったい何で二人の暮しが立ってるんだ？

ユスト：つけにしてもらっております。もうつけがきかず、追い立てを喰うと、残りの所持品を質入れして、喰いつないでゆくのです。(Mi. 342f.)

亡夫の借金を返しにやって来たマールホフ騎兵大尉未亡人を引き取らせる場面ではしんみりさせられた観客もこの個所ではいささかの笑いを禁じ得ないのではなかりうか。なぜテルハイムはそんなに瘦せ我慢を張り続けるのだろう。

その後ヴェルナーはテルハイムに会って、少佐の窮状を救うべく何とかお金を受け取ってもらおうと手を変え品を変え涙ぐましいばかりの説得を試みる。それに対してテルハイムの方でもさまざまに理由らしきものを述べ立てては頑として金を受け取ろうとしない。ヴェルナーから金を借りても相手はそれによって少しも困窮しない。ヴェルナーはマールホフ騎兵大尉未亡人とはまるで異なる立場にいる。「本人に金が入用だという人物から借金するのは大の禁物なのだ」とテルハイムが言うのに対して、ヴェルナーは「こっちは金の要らない人間なんです」(Mi. 466)と切り返している。それにもかかわらずテルハイムがヴェルナーからの金銭援助を受け付けないとすれば、「返すあてがないのに借りるものではない」(Mi. 466)といった日頃の信条のためだけだろうか。なるほどテルハイムは二度までも部下のヴェルナーから命を救ってもらった。そのお返しが出来なかったのはただ単にそのような機会がなかったからにすぎない。テルハイムはヴェルナーよりもはるかに劣る者たちのためにだって何度となく体を張ってその命を守ろうとした。だからそのことで彼はヴェルナーに感謝は

していても、負い目や引け目は感じていないし、その必要はない。しかし今ちょっと手許に金がないので一時貸してもらおうというのとはちがって、テルハイムには借りても返す当てなどまったくない。となると、彼は金銭面で負い目、引け目を感じ続けねばならない。しかもかつての部下に対してである。結局テルハイムの本音は「お前の債務者になるのはふさわしくないのだ、お前の債務者にはなりたくない (es ziemt sich nicht, daß ich dein Schuldner bin; ich will dein Schuldner nicht sein.)」(Mi. 465) という言葉に尽きるようだ。しかしヴェルナーはかつての部下、というより、共に幾度も死線を乗り越えてきた戦友である。テルハイムが渴きで死にそうなときに貴重な水を軍曹から分けてもらい、命の危ないところを二度までも救ってもらった命の恩人ですらある。そのヴェルナーが真心から差し出す善意のお金を彼がどうしても受け取ろうとしないのに対してヴェルナーが「これを水だと思ってください」(Mi. 465) とか、二度までも命をお助けした「そういう男から金を借りたからとて、もはや何でもないじゃありませんか。それとも私の命よりも財布の方が値打ちがあるのでしょうか (Was können Sie diesem Mann mehr schuldig weden? Oder hat es mit meinem Halse weniger zu sagen, als mit meinem Beutel?)」(Mi. 465) と言うのは当然である。それでもなおテルハイムが頑として金を受け取ろうとしないとなると、これはもう友情と善意に対する裏切りだと取られても仕方がない。

ヴェルナー：私はどうかすると、こんなことを考えたものでした。年を取ったらおまえの身の上はどうなるのだろうか？ みっともない切り傷を身に負っているなら？ 無一文になっているなら？ 物乞いをして歩かなければならないというのなら？ すると、こう考え直したものです。いやいや、物乞いをして歩く気遣いはなかりうぜ。テルハイム少佐殿のところへ行くがいいのだ。少佐殿は、なけなしの金をはたいて、分けて下さるだろう。お前を死ぬまで食わせて下さるだろう。あの方の傍におれば、堅気の身で、死んでゆけるぞ。

テルハイム：(ヴェルナーの手を握りながら) それで、どうなんだ、もうそう

は思っていないのか？

ヴェルナー：ええ、いませんよ。——ご当人にゃ要りようで、こっちにもあるというのに、私から一切受け取ろうともしないご仁なら、そちらにあって、こっちが欲しいというときにも、決してよこそうとはなさらんでしょからね。——愛想もこそも尽きましたよ！（立ち去ろうとする）（Mi. 466f.）

ここでテルハイムは慌てて「まだ金はある。（中略）いよいよ無一文だとなったらお前に言う。いくらかでも用立ててもらおうとすれば、お前を措いてほかには誰もいない」（Mi. 467）と自らの「Ehreに懸けて」ヴェルナーに約束する。そうすることでやっと相手の気を取り直させることに成功する。

しかしテルハイムがこともあろうに自らの「Ehreに懸けて」誓うにもかかわらず「まだ金はある」というのは嘘であり、彼は今既に無一文なのだから後半の約束も嘘である。懐に一文もないのになぜ彼は嘘までついて借金を断るのか。

マールホフ騎兵大尉未亡人から亡夫の借金を返済してもらえばこちらは窮状を救われる代わりに、それによって逆に相手を窮乏させる。それが分っているからテルハイムは自らの権利を当然のこのように放棄してしまう。また、たとえ軍上層部のからの命令であろうと敗戦国から高い献納金を無理やり取り立てることは、占領地に対する献納金の要請が当時としては戦勝国側の当然の権利要求であったとしても、それによって占領地のただでさえひどい窮乏状態をいっそう悪化させる。ならば上司の命令といえども従うわけには行かない。疲弊する占領地に負担金を強制することは軍人のEhreに反する。そうするくらいなら身銭を切っても負担金を代納する。金銭的な要求が相手の負担になり、自分や自分達のせいで相手が困窮する場合には、断固要求を差し控える、それがEhreを重んじる軍人にとって当然の振る舞いである。このテルハイムの行動と論理は賞賛に値する。同じ金銭の要求でも、軍に対しての未払金の請求（その中には自分が代納した分の献納金も含まれる）は当然の権利である上に、権利を行使しても相手が軍、国家、国王のような強者であり、相手に負担を掛

ける心配はない。しかも、戦時中テルハイムが代納した献納金が返済されるか否かはテルハイムの Ehre と正義にかかわる重大事である。返済されるということは、テューリンゲン地方議会の手形がリベートではないことが認められ、彼の収賄容疑は消え、Ehre ある彼の行動が正しく理解されたことを意味する。傷つけられた彼の Ehre が回復され、世界に正義の秩序が戻ってくるのである。二千ピストーレの代納金返済よりもこちらの方が彼にとってははるかに重大問題なのだ。彼の行動論理はここまではよく理解できる。

しかし、ヴェルナーからの金銭的支援の拒否となると話は違う。「お前の債務者になるのはふさわしくない、お前の債務者にはなりたくないのだ」(S.465) ということは、かつての部下の債務者となることは上官としてふさわしくない、ということであろう。テルハイムの Ehre はここでは Stolz (プライド) と言い換えてもよい。お前から金を借りるのは俺のプライドが許さない、などというあからさまなことを彼が言わないのは、高潔で一徹なフォン・テルハイム本人にそういう意識が実際にはないからであろうが、無意識的にそうなのだ。

この第三幕第七場のテルハイムとヴェルナーのやり取りに関する限り、どう見てもヴェルナーの主張の方に論理的にも心情的にも説得力があって、テルハイムの主張は論理性に欠ける。ということは何らかの非合理的な価値観、人生観、信念、情念といったものによってテルハイムが支配されているということである。言うまでもなくその非合理的な価値観こそ彼の Ehre なのだ。

テルハイムは金銭に限らず他人の庇護は受けたくない、同情し保護する立場には立っても、同情され保護される立場にだけは立ちたくない、たとえ自分が困窮のどん底にあっても他人の負担にだけはなりたくない、借りを作る、つまり債務者 (Schuldner) となることは彼の Ehre を傷つける、彼の Ehre 感覚にとってそれは耐え難いことである、金銭をめぐる一連の彼の言動はそのようにしか説明できないのではあるまいか<sup>12</sup>。他人の保護を受けず、他人の負担にならずに済むためなら自らの「Ehre に懸けて」嘘の誓いをしてかまわない、それによって彼のより重要な Ehre が守られるのだから。そうすると Ehre とは所詮他人に対する優越の保持であり、他人の保護を受け、債務者となること



はこの優越を損なう、だからテルハイムはあれほど債務者になることを避けようとするのである、そう考えるしか説明の手だてはないのではあるまいか。

Ehre はもともと、優越、特権、不平等と結びついている。社会的にも君主制を基盤とした身分制社会の価値観であって、Weinrich も言っていたように民主制の下では Ehre は死滅する。ところが貨幣の獲得と所有は身分の上下に関わりなく万人にその機会が与えられており、金銭の所有と非所有も身分の上下に関わりがない。所有する富の大小は簡単に身分関係を逆転させてしまう。貨幣はまた新しい不平等を作り出すが、古くからの固定した身分制を打ち壊してしまう。その意味で貨幣は民主主義思想などよりもはるかに強力な平等主義者なのだ。貨幣は君主制や身分制社会とだけでなく、それを基盤とする Ehre とも不倶戴天の間柄である。この時代はまだ少なくともドイツでは産業革命は始動しておらず、産業資本主義には程遠い時代である。しかし戦争とその後の混乱が富の配分を狂わせていたから、一時的にであれ身分関係が金銭の力によって逆転されうる状況があった。現にフォン・テルハイム少佐がかつての部下ヴェルナー曹長の債務者になる可能性があったのである。Ehre を重んじるテルハイムが部下の債務者になることをあれほど避けようとするのは、Ehre の拠って立つ基盤をつき崩す貨幣の危険性をどこかで察知していたからではないだろうか。金銭によって自分が保護者の立場に立てる限り、彼は惜しげもなく富を分かち与えるが、逆の場合には頑ななまでに債務状態を避けようとする。

ミンナとの愛と Ehre の葛藤の場合はどうだろう。

紹介したとおり、リベートの嫌疑を掛けられて「名誉を傷つけられ」、片腕に負傷して「不具者」にされ、自らの財産をもって立て替えた献納金も返してもらえず、それに更に軍による未払金の不払いまでもが重なって「乞食になった」フォン・テルハイムは婚約者ミンナを今なお愛し尊敬してやまないにもかかわらず、いやそれゆえにこそ、彼女まで自らの不幸と汚辱の巻き添えにはすまいと、ミンナに婚約の解消を申し出る。彼の決意はいかにもフォン・テルハイム少佐らしい朴訥な誠実さから出たものであるが、

テルハイム：貴女の探しておられたのは、幸福で、貴女の愛を受けるにふさわ

しい人物です。それなのにここにいるのは——みじめな男なのです。(中略) 不幸な人間は何も愛してはならないのです。もしあの克己心を堅持することができず (wenn er diesen Sieg nicht über sich selbst zu erhalten weiß)、自分の愛する人々までも自分の不幸の巻き添えにしてはばからないようなら、そんな奴は不幸になって当然ということになる。——自分に打ち克つ (dieser Sieg) というのはなんと難しいことでしょう。理性とやむなき事情 (Notwendigkeit) とがミンナ・フォン・バルンヘルム嬢を忘れよと命令して以来、私はどんなつらい思いをしたか知れません。(Mi. 448f.)

「克己」というところで Sieg über sich selbst (自己自身への勝利) という表現が使われていることに注目したい。これはテルハイムの本領たる軍人や戦争の領域に由来する、というだけではない。Ehre は先ず名誉と訳されるように、もともと栄誉、武勲、誉れという意味でもあり、勝利や優越と結びついている。Ehre が己の卑小なエゴや醜い欲望に打ち克つことを意味し、道徳的自律性や克己という徳と結びついたとき、これは内面化された Ehre となる。貴族や軍人の Ehre は必ずしも外部にばかり向けられるわけではない。侮辱を受けて決闘を挑むだけの Ehre からは noblesse oblige など生まれてこない。マールロフ未亡人に対する態度や、ヴェルナーが語るテルハイム少佐の戦場での活躍を見ると、彼の内面的 Ehre が noblesse oblige であることは明白である。この Sieg は自らのエゴイズムに対する勝利である。しかし Ehre が、他人を保護する立場には立っても、保護される立場には立ちたくないという態度と結びつくとき、他人に対する勝利や優越としての Ehre という原初の意味合いが前面に出てくるのである。無一文でも部下からは金を借りたくない、人から援助を受け、保護され、同情される立場には身を置きたくない、というのは甘えを拒否するという意味でストインズムを意味すると同時に、優位が失われることへの抵抗という意味では他人に対する勝利と優越への意図が潜んでいると言えるのである。高潔であると同時にプライドが高い、テルハイムの言動にはしばしばこの二つの要素が微妙に入り交じっている。もちろんテルハイムの

剛直朴訥な人柄は暴露心理学的のこすっからい分析を受け付けないところがあるが——。

「理性とやむなき事情」がミンナを忘れよと命じるそうだが、その理性とやらがどの程度理性的で、やむをえないというのがどの程度のものか、ぜひ聞かせてほしいというミンナの願いに対してテルハイムは次のように答えている。

テルハイム：（中略）貴女は私をテルハイムとお呼びです。名前は正にその通りです。けれど、私が、おくにで知り合われたころのテルハイムだと、きめてかかっておいでです。生氣潑刺として、いろいろな方面に意欲もあり、覇氣満々の男。全身全霊を思うがままに活動させ、その前途には栄達と幸福の大道がひろびろとひらけており、その当時はまだふさわしくなかったにしても、貴女のお心とお手をうけるにふさわしく、日ごとになってゆくのだと、希望をつないでいられた男。あのテルハイムで、今の私がないことは私が自分の父親でないのと同じです。どちらも今は亡き者の数に入っています。私は、お役ご免になり、名誉を傷つけられたテルハイム、不具者で乞食なのです。——お嬢さん、貴女が婚約なされたのは前者です。今のテルハイムに対しても義理立てをなさるおつもりですか？（Mi. 450f.）

彼の言葉はいかにもレッシング劇の主人公らしい潔癖と誠実にあふれたものだが、この台詞の流れを受けて第三幕第十二場でミンナは侍女のフランチスカにこう言っている。

ミンナ：あのお手紙（テルハイムがミンナに送った婚約解消とその理由を説明した手紙。劇中で何度か言及されるものの、その中身が朗読されることはない。しかし上に引用したテルハイムの台詞を聞けば内容はほぼ推察できる）、ほんとお心のこもったお手紙。どの行を拝見しても、誠実で、気高いお人柄がにじみでているのよ（Jede Zeile sprach den ehrlichen, edlen Mann.）。私との結婚を諦める、そのお言葉の一つ一つが、愛情の

誓いととれるの。(中略) 但至少しプライドが高すぎる (nur ein wenig zu viel Stolz) ところが、あの方の振舞いにはあるような気がするわ。何故って、恋人からさえ、幸福を受けようとなさらないなんて、プライドが高すぎるわよ、赦し難いプライドの高さだわ (unverzeihlicher Stolz)。(Mi. 472) [ ( ) 内筆者注 ]

ヴェルナーが怒るのも、テルハイムが生死を共にした戦友からさえ、金銭援助を「受けようとなさらない」からである。しかしミンナの台詞からはアンビヴァレントな心情がにじみ出ている。「誠実で、気高い (ehrlich, edel) お人柄」と「赦し難いプライドの高さ」。そしてテルハイムの言動にも、見事な克己心や独立不羈の心意気にまじって、かすかな Hybris の気配。彼は、自分はその手紙の中で「Ehre が私に命ずる処置以外には何一つ (Nichts, als was mir die Ehre befiehlt.)」(Mi. 485) 書いていない、と言っている。「Ehre の命ずる処置」、ミンナとの婚約を解消したいという彼の申し出もヴェルナーから金を借りるわけにいかないという彼の言葉もマールホフ騎兵大尉未亡人に対する処置や占領地負担金の代納もすべてが「Ehre の命ずる処置」に他ならない。それらは「誠実、高潔」であると同時に、幾つかの場合には確かに「赦し難いプライドの高さ」を感じさせる。テルハイム的 Ehre の両価性である。

ミンナは愛するテルハイムの本性をさすがによく見抜いている、同情し保護する立場には立っても、逆の立場には立ちたくないという彼の性格を。ミンナは一芝居打ってテルハイムに少々意地悪をし、人生レッスンを施すことにする。

ミンナ：あの方のプライドが目にも余るものになったら、フランツィスカ。

フランツィスカ：そうしたらあの方を諦めるおつもりですか？

ミンナ：(中略) 何言ってるのよ、お馬鹿さんね、たかが欠点の一つぐらいで、お似合いの相手を諦めるものですか。諦めはしないけど、ふといたずらを思いついたの。あのプライドのお返しに、同じくらいのプライドによって、あの方を少し困らせて上げようと思うのよ。(Mi. 472f.)

ミンナ：今に分るわ。あの方の気心なら、心底から知り抜いているのよ。今は、こちらにありあまる財産があるにもかかわらず、婚約解消なんて言っているけれど、私が不仕合わせで寄べもないなんて聞こうものなら、世界中を向うにまわしてでも、私を手に入れようとなさるでしょうよ (Der Mann, der mich jetzt mit allen Reichtümern verweigert, wird mich der ganzen Welt streitig machen, sobald er hört, daß ich unglücklich und verlassen bin.)。 (Mi. 474)

この後第四幕でミンナは最後の説得を試みるが、テルハイムの意志は固い。

テルハイム：(中略) 当然私の受け取るべき金を、(軍当局が) こんなふうに、四の五の言って、よこさないなら、私の Ehre に充分なつくないをつけてくれないなら、私には、お嬢さん、貴女のお相手になる資格がないのです。世の中の眼から見ると、お相手たるにふさわしい人間ではないからです。フォン・バルンヘルム嬢には、非の打ちどころのない男性こそふさわしい。自分の愛する者に、軽蔑の汚辱をしのばせて、恬として恥じないなど、愛の名に値しない、唾棄すべき行為です。己れの幸福のすべてを、一人の令嬢に負うて平気でいる者は、男の屑です。その令嬢の盲目的な情愛が

令嬢：じゃ本気でおっしゃるのね、少佐様？—— (突然、彼の方に背を向ける)  
(Mi. 490f.)

説得が無駄と分ると、ミンナは予定どおりフランチスカとかたって芝居をする。後見人の薦める縁談を断り、こともあろうにかつての敵軍プロイセンの将校テルハイムと婚約したためにミンナは今や廃嫡され、家出して、無一文の身の上という設定なのだ。愛に訴えても駄目なら、同情 (Mitleid) を刺激しようという作戦である。「貴方の愛が私に拒んだものを貴方の同情ならかなえてくれたかも知れませんわね」 (Mi. 491)。

なぜ愛は Ehre とぶつかり、Ehre に勝てなくても、同情ならうまく行くの

か。同情は優越としての Ehre に合致するからだ。自分が不遇の身、相手が裕福という状態で結婚することは相手を自分の不幸と汚辱の巻き添えにするから許されないのだ、という論理をテルハイムは繰り返しているが、その陰には彼の口に出さないもう一つの理由が潜んでいる。不遇な自分が裕福なミンナとの結婚によって救われるのは優越としての彼の Ehre を傷つける、という理由が——。それをミンナは「今は、こちらにありあまる財産があるにもかかわらず、婚約解消なんて言っていらっしゃるけれど (Der Mann, der mich jetzt mit allen Reichtümern verweigert)」<sup>13</sup>と皮肉ってみせたのだ。不遇の自分が裕福なミンナと結婚できないというテルハイムの主張の背後には「誠実で、気高い」志操と、彼自身は意識していないけれども、「赦し難いプライドの高さ」が潜んでいるのである。テルハイムは「自分の愛する者に、軽蔑の汚辱をしのばせて、恬として恥じないなど、愛の名に値しない、唾棄すべき行為です」と言い、続けて「己れの幸福のすべてを、一人の令嬢に負うて平気にいる者は、男の屑です」と付け加える。この後半の台詞に現れているものこそミンナが「赦し難いプライドの高さ」と呼んでいるものにほかならない。ミンナが正攻法を諦めて「いたずら」による人生「レッスン」に取りかかる決心をするのはこの台詞を受けてである。

「ミンナが不遇」、と思い込まされたテルハイムは案の定人が変わったように元氣を取り戻す。ここからが喜劇の本番である。

テルハイム：どうしたというのだろう——心のすみずみまで氣力が満ち満ちたのだ。わが身の不幸を思って、氣が減入った。苛立ち、先見えがせず、氣持がいじけ、無氣力になった。あの人不幸だと聞くと、立ち直り、行きがかりを捨てて周囲を見まわし、どんなことでもあの人のためならやっのけようという、張りのある氣力を感じている。どうしてぐずぐずしていられよう？ (Mi. 495f.)

この豹変は笑いを誘う。この笑いはどこから来るのだろうか。

一つにはテルハイムの豹変が無意識的で大真面目だからであろう。子供の無

心の言動がほほえましいのと同じである。観客は一瞬緊張をほぐされ、心が和み、日常の常識的枠組みから解放される。第二に、これが通常とは逆の変化だからだ。困ったとき助けが得られると分った途端に元気づくというのが普通なのに、テルハイムの場合は常に逆である。困っている間はどんな援助の申し出があっても不機嫌にこれを拒み続け、助けを必要とする相手が出現した途端に生氣を取り戻す。世俗的常識の枠組みが壊されて、緊張が緩む。

観客が舞台の上の喜劇的人物に距離を置いて、その言動を批判的に見る、あの風刺的な、嘲りを含んだ笑いはテルハイムとは無縁である。しかし保護される側から保護する側へと立場が逆転したことを知った途端に元気づくというのはほほえましいと同時に、幾分か諷刺的笑いを誘うところがないとは言えない。テルハイムの態度には、noblesse oblige が身に染みついていて、他人から保護を受けるという立場にはどうしても馴染めず、他人の援助を素直に受け入れられないほほえましいごちなさ混じって、常に保護者としての優越を失いたくないという無意識的なプライドがある。諷刺的笑いが向けられるとすればこれに対してである。しかしこれはけっして露骨な嘲笑ではない。

さて、テルハイムの求婚に今度はミンナが身を引くそぶりで対抗する。これ以後はそれまでと裏返しの関係が演じられる。先ほどもまでのミンナの台詞を今度はテルハイムが語り、テルハイムの台詞をミンナが口にする。ミンナは意識的に芝居を演じているのだが、テルハイムの方は大真面目である。彼はこれまでの相手の立場に身を置くだけでなく、今風に言えば、さっきまでの自分の姿をビデオで見せられ、録音された自分の言葉を聞かされるわけである。これは自己客観化の機会というより、思いがけず目の前に鏡を突き付けられて、そこに映った自分の姿にどぎまぎするショック療法に近い。

テルハイム：本心を偽っていらっしゃるのだ、あなたは。——失礼、お言葉の真似をしてしまって。(Mi. 499)

しかし、ミンナに謝る必要はない。それは少し前までの自分のことだ、と思いが当たる。彼女の思うつぼだ。

テルハイム：この指環を貴女が私の手から初めてお受けになったのは、二人の境遇が同じ、つまり幸せだった頃のことでした。貴女はもはやお幸せではないが、その代わりかえってお互い同じになれたのです。平等こそ常に愛のこよなく固い絆なのです。(Mi. 499)

皮肉なことにこの直後に国王からの親書が届き、テルハイムの Ehre が回復され、財産が彼の許に戻ってくる。「常に愛のこよなく固い絆」である「平等」の関係はこれによって再び崩れ去る。今や両者の立場は逆転している。だが彼はそのことに気づかない。彼の求愛は一層熱を帯びる。ミンナは逆襲する。

ミンナ：自分の愛する者に、軽蔑の汚辱をしのばせて、括として恥じないなど、愛の名に値しない、唾棄すべき行為です、っておっしゃいましたわね。——ごもっともですわ。でも、こちらも、ご同様、純粹で気高い愛情に及ばずながらあやかろうと致しておりますのよ。(Mi. 505)

ミンナ：どなたか後ろ指を指されない奥様こそお似合いですわ。(中略) 不遇なバルンヘルムごときがもっと恵まれておいでのテルハイム様の玉の輿に乗るわけには絶対に参らないのでございます。(中略) 平等こそ愛の固い絆なのですわ。(Mi. 506)

ミンナ：幸福のすべてを平気で一人の男性の盲目的愛情に負っている人は女の屑です。(Mi. 507)

これらはすべてほんの今しがた第四幕の終わり近くでテルハイムがミンナに対して口にした台詞ばかりである。貴方に男としての誇りや Ehre があるように女である私にだって同じように誇りがあり Ehre を重んじる気概があるので、とミンナは言っているのだ。

テルハイム：間違っています、大間違いです。



ミンナ：自分でおっしゃったことが、私の口の端にのぼると、平気で、悪く言うおつもり？

テルハイム：詭弁好きだなあ。それでは、男性には似つかわしくない性質（＝素直に相手の援助や保護に頼ること。他者に依存する生き方）によって女性は Ehre を失うでしょうか？女性にこそふさわしい態度（＝素直に相手の援助や保護に頼ること。他者への依存の態度）を、すべて男性がすすんで身につけよ、とおっしゃるのですか？自然が、相手側の保護者に定めておいたのは、どちらの性でしたかね？（むろん男性こそ女性の保護者であって、その逆ではありませんよ）

ミンナ：ご安心下さいまし、テルハイム様！—— 貴方の保護を受けますことを、止むを得ずご辞退いたしましたところで、こちらは、まったくあてがないわけでもございません。（Mi. 507）〔（ ）内引用者〕

つい今し方「平等こそ常に愛のこよなく固い絆」と主張したテルハイムがここまで来てついに、男性は保護する性であり、女性は保護される性であると主張するに至る。これによって、はしなくも自らの家父長的男性中心主義と反平等主義を暴露してしまう。彼の言う「平等」とは結局、男子たる彼が引け目を感じなくても済む状態のことにすぎない。自分が不遇でミンナが恵まれた状態、という以外なら彼は引け目を感じなくて済む。両者とも恵まれているか、両者とも不遇か、それともテルハイムは恵まれていてミンナだけが不遇か。これが彼の言う「平等」なのだ。「赦し難いプライドの高さ」とはこのことである。

結局ミンナやヴェルナーは、意図的にではないにしても、家父長的社会秩序を揺るがす試みをしていたことになる。男が女を保護するものであってその逆はあってはならず、上司が部下を庇護しても、上司が部下の債務者になるのは不適當である、そういうテルハイムの家父長的な固定観念を覆す試みを。しかし「芝居」にかかってからのミンナは幾分か意図的にテルハイムの男性中心主義と彼のプライドを批判している。

しかしこれはテルハイムの Ehre の一面であって、彼の尊重する Ehre をそれだけのものという風にシニシズムで片づけてしまうのは間違いであろう。

Ehre ははるかに多面的な価値である。

Weinrich によれば Ehre と愛の相克は Ehre 文学の最も基本的なテーマの一つであるが、この劇において Ehre と愛、あるいはミンナとの関係はそれほど簡単ではない。既に見たとおり、Ehre の命ずるところに従ってテルハイムが取った強制献金代納の処置がミンナの愛を目覚めさせたのだから、Ehre と愛が常に敵対関係にあるわけでないのは明らかである。むしろミンナの愛の原点には Ehre を重んじるテルハイムへの尊敬がある。しかし、まさしく Ehre の命じたその行為に対してリベートの嫌疑を懸けられたことで深く Ehre を傷つけられ、そのうえ富も健康も失ったテルハイムは、そういう身でありながら裕福で幸福なミンナの好意に甘えるような卑劣なまねはすまい (keine Niederträchtigkeit zu begehen) と決意する。これもまた彼の「Ehre の命じるところ」であるが、このテルハイムの決意に対してミンナは「私をまだ愛していられる、私にはそれで充分」(Mi. 450) と言い、度重なる説得にも彼が頑として決意を曲げないと分かると、そこに「赦し難いプライドの高さ」を見て取って腹を立てる。

論理的に見るとミンナは矛盾している。一つにはそれは Ehre の二重性のためだ。醜いエゴイズムに対する勝利としての Ehre、noblesse oblige としての Ehre は彼女の心に愛と感動を呼び覚まし、優位を失うまいとする Ehre は勝ち気なミンナの反発を招く。第二に、彼女は名前のとおり Minna = Minne であり、愛の論理そのものだからだ。「いつも Ehre という亡霊の方を狐つきみたいに見つめている荒っぽく融通の利かない男たちなんて！他のすべての感情には固く心を閉ざして！（“O, über die wilden, unbiegsamen Männer, die nur immer ihr stieres Auge auf das Gespenst der Ehre heften! für alles andere Gefühl sich verhärten!”）」(Mi. 489) とミンナは言う。しかし彼女の方は愛一筋で、テルハイムの苦悩の原因である傷つけられた Ehre がこの場合、傷つけられた正義の秩序であることに盲目である。「他のすべての感情」といっても、それは愛だけである。テルハイムにも Ehre など気にせず、愛に忠実であってほしい、と彼女は願う。しかしそれは危険な願いでもある。彼は間もなくミンナの芝居に引っかかって、「不幸な」彼女に結婚を申し込まずに

はおれない。このとき初めて彼は愛を選んで Ehre を諦めるわけだが、こう言っている。

そうです、どんな事情であろうと私はこれ以上当地には留まりますまい。これからは、当地でわが身に加えられた不正に対して、侮蔑の眼しか向けられないにしましょう。ここだけが世界というわけではない。人生いたるところ青山あり、ではないでしょうか？私はどこへ行ってもかまわんのです。私に就くことの許されない勤めなどあるのでしょうか？どんな遠い土地に勤めを探す羽目になりましても、どうか、安心してついて来て下さい、ミンナさん。何一つ不自由はおかけしません。(Mi. 500)

つい先ほどまで、Ehre と正義の回復を願って止まなかったときには、「こそこそこを立ち去りなんかいたしませんよ。いっそ八方塞がりの苦境に立たされて、おためごかしのごますりどもの目の前でやつれ死にする方がまし——」(Mi. 490) とまで言っていたことを考えると、これはまたたいそうな進歩を意味するようにも見える。しかしこの台詞からは、公的な社会に背を向ける覚悟をした世捨て人の悲愴感のようなものがかすかにだが聞こえてくるような気がする。苦境の中でやつれ死んでもかまわぬ、梶子でもここを動いてやるものが、と意気込んでいた時のテルハイムの方がはるかに意気軒高として希望に満ちていた。ミンナと二人での愛と家庭的な幸福だけに希望を繋いで、遠い土地に勤めを探す覚悟の彼はやはりどこか寂しげではないか。「人は個人として生きているだけではなく、全体の一員である。この全体をわれわれはいつも顧慮しなくてはならない、われわれは徹頭徹尾全体に依拠して生きている。もし独りぼっちで生きることが出来るのなら、私はこの件をこのまま何もせずほらっておいてもいい、(中略) もし人がこの世に背を向けて生き続ける覚悟なら、幸福を奪った相手を見逃してやることも出来る」(Effi. 267) とインシュテッテンは言っていた。置かれた状況は違うけれども Ehre などもうどうでもよいという気持ちは、Ehre がまだ重んじられている社会では必然的に世捨て人への道に通ずる。これがはたして「人間憎悪の笑い」(Mi. 488) を恐れたミンナの望

むテルハイムであろうか。彼女はもともと Ehre を重んじるテルハイムだからこそ愛したのではなかったか。

国王からの親書がテルハイムの許に届くのは、Ehre = 正義の回復を諦めて、彼が Minna = Minne を選ぶ決意を披瀝した直後である。この親書によって彼の求めて止まなかった Ehre = 正義が回復される。それがなくてもこの芝居は悲劇にはならなかっただろうが、晴れやかな大団円には至らなかったであろう。先の台詞から窺えるような、Ehre = 正義への期待を捨て、正義ならざる世の秩序への「侮蔑」を胸に、公的な社会に背を向けて都落ちする男の寂しさが、テルハイムの後ろ姿に漂ったのではないだろうか。親書は劇の結末に晴れやかさをもたらした、と言える。これを受け取った後のテルハイムの台詞：

運好く私の手許に返って来るものは、分別をわきまえた男の念願を叶えて余りあるものではありませんが、この先も、ほかの誰かの麾下に属したものでしょうか、ひとえに、ミンナさんのお心次第です。ひたすら貴女に奉仕することのみ私の一生を捧げたいのです。お偉ら方に仕えることは、危い橋を渡るものです。労苦や束縛や屈辱を味わわせてくれる反面、それに見合うほどのことはありません。ミンナさんは、自分の夫に姿を借りた、肩書きや頭職ばかりを愛するような、見栄を張る女連中とはたちがちがう。私を愛して下さるのは、私の人物を認めて下さってのことでしょう。ですから、私も、ミンナさんのためなら、俗世のことなんかさっぱりと忘れてしまうのですよ。私が軍人になったのは、党派心と、それに気まぐれからですよ。どんな政治上の原則を奉じてなのか、自分でもわからないのです。この階級に籍をおいて、しばらくの間、危険と名のつくすすべてのことに慣れ親しみ、冷静さと決断力を身につけることが、ehrlich な男にはふさわしいことだって思ったんです。危急存亡の秋というのでしたら、この試みを本分となし、このかりそめの勤めを本職と心得もしたでしょう。けれど、もはや危急の場合でない今となっては、私の念願するところは、普通、唯一途に、悠々自適する者でいよう、ということなのです。そういう者に、私は、ねえミンナさん、貴女と一緒に暮せば、きつくなって見せませよ。私は、貴女が寄り添っていて下されば、終始一貫そういう者を通して見

せませす。(中略) この広い人の世のどこかに、このうえもなく、静かで朗らかで笑いにあふれた片隅を探しましょう。幸福な夫婦さえ揃えば楽園になるというようなところをです。そういうところで暮らしましょう。そこで、私どもの過す日々は—— どうなされたのです、お嬢さん？(ミンナは、落ち着きを失くして、顔を左右に振り、感動を隠そうとする)(Mi. 504f.)

親書の前と後のテルハイムの台詞は本質的に同じ決意を語っているように見える。しかし違うのだ。先程の第五幕第五場の台詞と違うところは「当地でわが身に加えられた不正に対して、侮蔑の眼」というところが消えていて、その分だけ前の台詞に漂っていた悲愴感のない和やかなものになっている点である。

「危急存亡の秋」にはまた軍隊に復帰するかもしれないという思いも後の台詞からは読み取れる。Ehreと正義の回復を諦めていた時の台詞からは期待できなかったことである。親書によって彼は正義の世界秩序への信頼を取り戻し、世界と和解した。世界の秩序への信頼をなくし、世界に背を向けてミンナと二人きりで遠いところへ行っただとしても、そこは「静かで朗らかで笑いにあふれた片隅」にはならなかったであろう。Minna = Minneだけではなく、Ehre = 正義の秩序への信頼をも取り戻す、国王の親書によって晴れやかな大団円がもたらされたというのはそういう意味である。

では、国王の親書はデウス・エクス・マキーナだろうか。国王の親書は、本来ならもっと早く来るべきはずのものが遅れて届いた、そういう性質の出来事である。権威の唐突な介入による動機付けのない安易な解決策ではない。

ミンナのレッスンによってテルハイムが変わったかどうかは分からない。かつて「生氣潑刺として、いろいろな方面に意欲もあり、覇気満々の男。全身全霊を思うがままに活動させ、その前途には栄達と幸福の大道がひろびろとひらけて」(Mi. 450)いた七年戦争当時のテルハイムはここにはもはやいない。代わりに「ひたすら貴女に奉仕することにのみ私の一生を捧げたいのです。(中略) ミンナさんは、自分の夫に姿を借りた、肩書きや頭職ばかりを愛するような、見栄を張る女性たちとはたちがちがう。私を愛して下さるのは、私の人物を認めて下さってのことでしょう」と言い、「この広い人の世のどこかに、こ

のうえもなく、静かで朗らかで笑いにあふれた片隅を探し（中略）幸福な夫婦さえ揃えば楽園になるというようなところで」ミンナと二人で暮りたいと言うテルハイムがいる。この変化は「お偉ら方に仕えることは、危い橋を渡るものです。労苦や束縛や屈辱を味わわせてくれる反面、それに見合うほどのことはありません」という軍隊生活への幻滅から来ただけではない。「私が軍人になったのは、党派心（中略）からですよ。どんな政治上の原則を奉じてなのか、自分でもわからないのです」と言っているところから見ると、戦争には当事者双方が主張するような大義名分など実際には存在しないのではないかという、戦争に対する根本的な疑念さえも窺われる。ehrlich な行為に対してあのように信じ難い誤解を受け、収賄の容疑までも掛けられ、文字どおり冷水を浴びせられて、テルハイムは冷静を取り戻したと言うべきか。

『ミンナ』で愛と Ehre の関係を複雑にしていたのは Ehre の多面性であり、それらに応じてミンナは感動し、惹かれ、反発する。またテルハイムもこれら Ehre の諸相に応じて玉虫色に変化する。テルハイムは内面的 Ehre の申し子のような男だから、彼に対するミンナの「誠実で、気高い」と「赦し難いプライドの高さ」というアンビヴァレントな評価はそのまま内面的 Ehre に対する評価と見なすことができる。

Ehre に対するこの両価の評価はそのまま『健気なカスベルと美しいアネッルの物語』に受け継がれている。このブレンターノの作品はゾーダーマンの *Die Ehre* より70年以上前に書かれた小説だが、そのテーマはまさしく Ehre であって、その中に出てくる Ehre という語の頻度もゾーダーマンに劣らない。だが、世紀末の Ehre 劇が Ehre の徹底解剖を行なって Ehre 概念を相対化し、Ehre の解体を図っているのに対して、『カスベルとアネッル』は、Ehre は神様にだけ委ねるべきだ、人間があまりにも Ehre を気に掛け、Ehre ばかりを口にするのは僭越なことだという考え方、それは作中老婆が口にし、変奏されながら何度か繰り返される「Ehre のことは神様だけにお任せよ (Gib Gott allein die Ehre!)」に表現されているのだが、その考え方を基調に据えながらも、Ehre をただ外面的な Ehre に限定せず、潔癖、道徳的自律性、誇り、

といった内面的な Ehre により大きな重点を置いて、自らの Ehre を汚すまいとする一途な執念から Ehre の犠牲となるひたむきな若者たちの死を悼む鎮魂の姿勢につらぬかれている。

この作品はいわゆる Rahmenerzählung で、カスベルとアンネルの物語のほとんどは、まるで民話と民俗の世界から抜け出してきたような八十八歳になる信仰心厚い百姓の老婆の口を通して語られる。

彼女は領主の公爵にぜひとも嘆願したいことがあってそのために村から45キロの道のりを一人歩いて町まで来たのだったが、着いたのは真夜中近く。立派な館——七十年前彼女はその館で女中奉公をしていたことがあった——の門前に座り込んだ老婆をもの珍しそうに人々が取り囲む中、そんな人たちにはいっこう無頓着に泰然として寝仕度を調べている老婆に興味を引かれた語り手の「私」は、彼女に話しかけて少しづつその旅の目的である嘆願の内容とそこに至る経緯を聞き出すのである。

彼女の嘆願は、自殺した孫のカスベルのために母親の隣に ehrlich な墓を建てて (K. 775) きちんと葬ってやってほしいというものである。このカスベルの自殺に至るいきさつがほぼ物語の前半にあたる。

カスベルは槍騎兵として軍隊に勤務する百姓の伴だが、少年の頃からいつも「心を大切にする (hielt etwas [——] auf die Seele)」「素晴らしい子 (ein herrlicher Junge)」(K. 779) だった。小学校のときも誰より潔癖 (der reinlichste) で勤勉だったが、とりわけ驚くほど Ehre を大切にし、騎兵連隊に入隊してからも、中隊の Ehre はひとえにカスベルが担っている、と隊長に言われるほどだった。フランスの駐屯地に勤務して、そこから初めて故郷に帰って来たとき、Ehre など歯牙にもかけない父親や腹違いの兄との間で Ehre をめぐって口論となり、父親と兄がフランス人を劣等な国民のように貶したのに対して、カスベルがフランス人擁護のために昔フランスの軍隊で起きたある事件のことを話して聞かせる。昔王政時代の頃のこと、フランス軍隊に鉄拳制裁令という新しい制度が導入された。制裁令制定から間もなく閲兵式が行なわれ、その際に粗相のあった部下を、制定されたばかりのその規則に従って、拳で12発殴るよう命令された伍長が職務上やむなく上司の命令に従ったが、そのあと

自らの行為を恥じてその部下の銃で自決した。このことが国王の耳に達するに及んで鉄拳制裁令は直ちに撤回された、そういう逸話である。「Ehreを重んじるっていうのはこういう奴のことをいうんだ」(K. 780)とカスペルは誇らしげに言う。

この逸話によってカスペルの重んじる Ehre が内面的な Ehre、他人の目という外部の基準によってではなく、自らの「良心」に照らして恥ずかしくない行為をする、立場上もしそうできなかった場合には自らの意志で責任を取る、そのことによって自分が外部のいかなる権威によっても支配され得ない独立した人格であることを示す、そういう、人間の最終的な道徳的自律性を証明する勇氣と気概、それが彼の言う Ehre であることが明らかになる。

しかし、この逸話について老婆は、この「話を全部が全部了簡違いとも思わなんだが (die Geschichte [—] zwar nicht ganz verwerfen)」と言い、カスペルには「Ehre のことは神様だけにお委せよ」(K. 781)と答えている。語り手の「私」は「Ehre というものについていろいろと考えさせられた。キリスト教徒たるものこの伍長の死を立派だと考えていいのだろうか。これについていつか誰かの口から納得の行くことを聞ければ、と思った」(K. 781)と言っている。Weinrich は Ehre とキリスト教は相容れないと言っていた。『マリーア・マグダレーナ』では長男が窃盗容疑で逮捕された後、牧師がアントン親方を訪ねて、人間はけっきょく自分のことについてしか責任を負い得ない、たとえ息子であろうと自分以外の者のしたことについてまで責任を負おうとするのは「キリスト教徒にふさわしくない思い上がり (ein unchristlicher Hochmut)」(Ma. 142)である、と諫めると同時に、慰めてくれたという話がでてくる。キリスト教と Ehre 的価値観との対立こそまさに『カスペルとアンネル』のテーマであり、「Ehre のことは神様だけにお委せよ」が老婆の口癖だが、民衆の知恵と信仰の化身のような老婆からすれば、人間が自他の過ちについてどこまでも自分で責任を取ろうとするのは傲慢 (Hybris) なのだ。神ならぬ身は完全ではありえない。にもかかわらず、正しくありえなかったことについて自分を徹底的に責め、あくまで自分で責任を取ろうとするのは、人間としての限界を認めようとしなないことだからである。Ehre は常に幾分か窮屈な潔



癖や正義感と結びついていて、父の死に際してフーゴーが受け継いだ古い印章には、そこに彫られた「何よりも名誉を重んずべし」という格言に従う限り「自分自身の前にも他人の前にも正当で (gerechtfertig) 非の打ち所のない (untadelig) 者として立つことが出来る」(Si. 130) という書面が添えられていたし、それを受けて彼自身「よし、変わることなくこの格言を守ろう。生きている限り、私の心をも Ehre をも汚すことはしない (kein Makel) ぞ、どんな者にも私を非難するようなことを言わせはしない (es soll kein einziger sein, der etwas Schimpfliches über mich zu sagen wüßte)」(Si. 130) と独りごちたのだった。この完璧主義と気負いがいずれは悲劇の原因になるだろうことを予想するのはそれほど困難ではない。だが自分に対して峻厳すぎたとはいえ、あくまで Ehre を重んじて生きたフーゴーの人生に読者がある種の感慨を禁じ得なかったように、老婆の敬虔な知恵に逆らって Ehre のために生き、Ehre の犠牲になって死んだ若者たちへの哀悼の気持ちにいちばん深く満たされているのも他ならぬ老婆自身であり、老婆に深い感銘を受けている語り手の「私」もそうなのである。

槍騎兵カスベルの自決はフランス人伍長の場合よりもっと壮絶哀切である。彼は休暇をもらってフランスの陣営から故郷へ帰る途中で、もうあと少しで故郷の村というところまで来て、馬と旅囊を盗まれてしまう。馬は自分のものではない、公爵の軍隊から貸与されたものだったから、カスベルにとってことは深刻で、徒歩で家へ帰る途中祖母の許にちょっと顔を出して挨拶した際には、「泥棒を追い掛けるためにすぐ行かなければならない、俺の Ehre は馬を取り返すかどうにかかっているのだから」と言った。この時も老婆は「自分の務めを果たして、Ehre のことは神様だけにお任せよ (Tue deine Pflicht und gib Gott allein die Ehre!)」(K. 789) と答えている。家に帰りつくとも馬のいなくなき声がして、男が二人顔に塗った煤を洗い落としているところだった。泥棒は彼の父親と兄だったのである。親兄弟だからといって不正を容赦することは法や正義を曲げることだから Ehre を重んじる彼にそんなことはできない。カスベルは軍から貸与された馬を取り返すことにこそ彼の Ehre が懸かっていると信じている。己が肉親であろうと司直の手に委ねるしかない。「おれは胸

が張り裂けそうだったが、やつらを捕えて、司直に委ねるよりほかなかった。なにしろおれは公爵の軍人だ。わが身の Ehre を思えば、容赦はいっさい許されない。わが父、わが兄を司直の手に委ねたのも Ehre のためだ (meine Ehre erlaubt mir keine Schonung. Ich habe meinen Vater und Bruder der Rache übergeben um der Ehre willen) (K. 792) とカスペルは手帳に書いている。「俺の Ehre は、俺の Ehre は台なしだ。俺は恥ずべき泥棒の子なんだ (Meine Ehre, meine Ehre ist verloren, ich bin der Sohn eines ehrlosen Diebes.)」(K. 789) と彼は叫び、彼らを司直に引き渡すときには「裁判官様、盗っ人は何と私の父、私の兄でした。生まれてこない方がよかった (o daß ich nie geboren wäre!)」(K. 790) と言っている。彼はその後墓地に行き、母親の墓の前でアンネルに持って帰ってきた花環を胸のボタンに挿し、その花環越しに銃で自殺したのだった。「俺だって Schande を受けてまで生きていくことはできない (Auch ich kann meine Schande nicht überleben)。俺の親父も兄貴も盗人で、俺の物まで盗みおった」(K. 792) と彼は手帳に書いているが、彼の Schande は自分が泥棒の子であるという Schande だけではない。たとえそれが公爵の軍人としての Ehre の命じるところであったとはいえ、我が父親と兄とを捕えて司直の手に引き渡したということも彼にとっての Schande である。

Ehre のためとはいえ、自分の手で父と兄とを捕らえ、司直の手に委ねなければならなかった盗人の子はその Schande を忍んでまで生き延びることは出来ない (aber der Sohn eines Diebes, der seinen Vater aus Ehre selbst fangen und richten lassen muß, kann seine Schande nicht überleben)。ああ！どうか皆さんお願いだ、俺が倒れたこの場所、母のこの墓の隣に、俺のために ehrlich な墓を作ってくれ。俺は花輪越しにわが身を撃ったのだが、その花輪は、婆さんから美しいアンネルに贈って、俺からよろしくと伝えてくれ。ああ！あの娘のことを思うと、俺は身を切られるようにせつない。だがあの娘を盗っ人の子と結婚させるわけには行かないのだ。あいつは、いつも Ehre をたいせつにしていた娘だもの (aber sie soll doch den Sohn eines Diebes

nicht heiraten, denn sie hat immer viel auf Ehre gehalten.)。愛する美しいアンネル、俺のことを聞いても、あんまり驚かないでくれ、諦めてくれ。  
(中略)俺の Schande に対して俺はどうすることもできないのだ。俺はずいぶん努力もして、生涯 Ehre を失うまいと努めてきたのに (Ich kann ja nichts für meine Schande! Ich hatte mir so viel Mühe gegeben, in Ehren zu bleiben mein Leben lang)。(中略)アンネル、愛するアンネル、どうかこの花輪を受け取ってくれ、俺はいつも変わらずおまえを愛していたのだ、これは誓って言う！今はもう、アンネル、お前はまた昔のとおり自由の身だ、でも俺の Ehre のために、けっして俺よりつまらない奴なんかとは結婚しないでくれ、そして出来たらお願いだ、俺がおふくろの隣の ehrlich な墓に葬ってもらえるよう俺のために頼んでくれ、もしお前がこの俺たちの村で死ぬようなことになったら、お前も俺たちのかたわらに埋葬してもらうがいい、婆さんも俺たちの仲間に加わるだろう、そしたら俺たち皆いっしょだ。俺の旅囊に 50 ターラーあるからこれはお前の初子のために貯金しておくがいい、俺の銀時計は、俺が ehrlich に葬ってもらえるなら、牧師さんに上げておくれ。俺の馬、軍服、それに武器は公爵様にお返しする、この手帳はお前にやる。さようなら、いとしい人よ、さようなら、お婆さん、みんな俺のために祈ってくれ、ごきげんよう——神よわれを憐れみたまえ——ああ、俺の絶望は大きい (ach, meine Verzweiflung ist groß!) (K. 792f.)

これが Ehre を重んじた「健気なカスペルの物語」である。

老婆から手渡されてこの手記を読んだ「私」は「この確実に高貴 (edel) で不幸な人間の最後の言葉を読んでからはらと涙を流し」「カスペルというのはほんとに立派な人 (ein gar guter Mensch) だったにちがいないね、お婆さん」と言い、老婆は「そう、あんな立派な奴はいなかったよ (Ja, es war der beste Mensch auf der Welt)」(K. 793) と答えている。

カスペルの悲劇には身内の犯罪を暴かねばならなかったという不運だけではなく、小作人の伴から軍に入隊し、伍長にまで取り立てられた者としての気負いも与かっていることを Gerhard Kluge が指摘している。もともと Ehre を

重んじる性格だったカスベルは Ehre と最もつながりの深い軍隊に入り、伍長にまで出世して上官に重用されたために、軍人としての職業的な Ehre を過大に重んじた (Überbewertung der Standesehre) のだというのである<sup>14</sup>。

カスベルに限らず、生れつき自明のこととして Ehre に与かっている者たちよりも、努力の末やっとのことで Ehre に与えられるようになった者たちや、Ehre の基盤がそれほど安定していない者たち、成り上がり者、地方出身者、弱小貴族、野心家といった者たちの方が Ehre の保持に汲々としなければならない分だけ、Ehre を重視し、Ehre の掟に忠実であろうとする。フーゲー、アントン親方、Die Ehre のローベルト、インシュテッテンなどがこれにあたる。

カスベルに休暇が認められて帰郷することが許されたとき、馬は隊長が「彼に貸与した馬 (das ihm anvertraute Pferd)」であり、帰りには「代わりの馬を連れて来るようにと言われていた (Er sollte (—) mit der Remonte zurückkommen.)」(K. 787)。しかも貸与された馬は盗まれたとはいえともかく無事に我が家に連れてこられていたのだし、彼の旅囊も見つかったのであるから、もしあれほど公爵の軍人としての Ehre ばかりに心を奪われていなかったなら、彼はもう少し冷静な判断をして、事態に然るべく対処できたのではなからうか。後のアンネルの場合もそうだが、カスベルの悲劇にも「真の Ehre (die wahre Ehre)」(内面的 Ehre = 道徳的自律性) にまじって「間違った Ehre (die falsche Ehre)」へのこだわり (どんなことがあっても公爵の軍人としての体面を汚してはならじという強迫的な思い) が強すぎたのである。

しかし、カスベルの悲劇の原因はもっと根源的なところにあるのではないだろうか、Ehre の命令が神の命令に合致しえなかったところに。彼の悲劇の根底には Ehre の秩序と神の秩序との背反がある。ここでも Ehre は Gerechtigkeit と深く関わっていて、人間の Ehre と神の Ehre、人間の正義と神の正義の不一致、と言い直すことも出来る。

カスベルが置かれた状況の悲劇性は「Ehre のためとはいえ、自分の手で父と兄とを捕らえ、司直の手に委ねなければならなかった盗人の子」というところに凝縮している。軍から貸与された馬を取り戻せ、自分の父であれ兄であれ不正を容赦してはならない、と軍人としての Ehre は命令する。しかし自分の

父や兄を告発し、司直の手に委ねることは神の秩序、神の正義に違反するのみならず、人間としてのカスベルの Ehre にも違反する。彼の「絶望」はそこにある。彼の Schande は軍人としての Ehre にも人間としての Ehre にも関わっている。カスベルはこの Schande には耐えられず、彼の Ehre は恥を雪いで自決せよと命ずるが、自らの命を絶つことは神の秩序に違反するのである。

これはフランス人伍長の場合も同じである。粗相のあった部下を拳で殴ることは彼の Ehre に反するのみならず、神の正義にも反するものであろう。軍人であるいじょう軍律に背くわけには行かず、やむなく部下を打ちはしたが、それは自らの Ehre をも、神の正義をも傷つける行為である。彼の Ehre は、自決によって恥を雪げと命令する。しかし、それは神の命令に違反する。だから老婆は、この「話を全部が全部さうだとも思わなんだが」と言い、「Ehre のことは神様だけにお委せよ」と付け加えるのである。

カスベルは「俺の Schande に対して俺はどうすることもできないのだ。俺はずいぶん努力もして、生涯 Ehre を失うまいと努めてきたのに」と書いていた。どんなに ehrlich に生きて、汚辱を身に受けまい、Ehre を失うまいと努めてみても人知には限りがあり、人間の努力には限界がある。内面的 Ehre は自らの身をあくまでも清く正しく持して行こうとする気概だが、その努力はしばしば人知を超えた力によって空しくされてしまう。アントン親方やフーゴーの場合もそうだった。テルハイムも危うくそうなりかかった。だから信仰心厚い老婆は「自分の務めを果たして、Ehre のことは神様だけにお委せよ」と言うのである。人間の限界を認め、その限界内で自らの務めを果たし、後は神の御心に委ねるしかない、これが人間に定められた分限だ、と言っているのである。

ehrich に生き、Ehre を失うまいとするひたむきな努力は一面で高潔な人格を形成するが、自分の努力が社会によって然るべく評価されないことを過剰に気に掛けたり、思いがけない汚辱を身に受けると、そこに人間の限界を認めて測り知れない神の摂理の前に黙って頭を垂れる代わりに、責任をすべて自分一人で引き受けようとする傾向を帯びる。一見謙虚に見える態度の背後に人間の努力や知の限界を認めようとしない不遜が潜んでいる。内面的 Ehre は自分

の身をあくまでも汚れなく保ち続けようとする志操だが、所詮それは人知では測り切れないめぐりあわせによって挫折させられる運命にある。「絶望」は卑小な存在に過ぎない自分の力の限界を認めようとしないところかやってくる。人間の分限を弁えない Hybris、「キリスト教徒にふさわしくない不遜」である。やはり「Ehre のことは神様だけにお任せよ」は Ehre を重じすぎる生き方に対する宗教的知の答えなのであろう。

さて、老婆が45キロもの道のりを徒歩で町にやって来た目的の一つは、自決した孫カスベルのために彼の願いどおり母親の墓の隣に ein ehrliches Grab を建てる許可が得られるよう嘆願することにあつた。当時の法律の定めるところによると、憂鬱 (Melancholie) からの自殺者は ehrlich に埋葬してもらえが、絶望 (Verzweiflung) からの自殺者は解剖台に送られることになっていて、カスベルの手記の最後の一行「ああ、俺の絶望は大きい」が彼の希望である ein ehrliches Grab 実現の障害になっていたのである。

「そりゃまた奇妙な掟だな」と「私」は言い、しかし「この公爵様は良いお方だから、いっさいの事情をお聞きになったら、きっとそのかわいそうなカスベルに、おっ母さんのかたわらに眠るのを許してくださるよ」(K. 793) と慰めるが、老婆はそこでまた奇妙なことを言い始める。自分がカスベルのあの手帳と、美しいアンネルのための花環とを持ってはるばるここへやって来たのは、「あの娘の晴れの日 (an ihrem Ehrentag)、せめてものはなむけに慰めを与えてやれればと思って」である、「カスベルは良いときに死んだ、何もかも知らされていたらそれこそ悲しみのあまり気も狂っていたろう」(K. 794) と。

「私」の求めに応じて老婆が語って聞かせた話：アンネルは町へ女中奉公に出た後も、カスベルから言われたとおりいつも Ehre ばかりを念じていた、彼女は Ehre への執心がもとで身を誤ったのだ (Sie war zuschanden gekommen aus Ehrsucht)、身分ある男に騙され、誘惑され、生まれたわが子を絞め殺した、誘惑した男は、カスベルはフランスで戦死したと偽りを言い、結婚の約束までしていたのに、結局アンネルは捨てられ、絶望のあげくしたことである、彼女は自首した。子供の父親の名前をあかせば恩赦が得られると言われたが、

彼女は「私はあの人の子を殺しました、私は死にます、あの人を不幸にしたいのです。私はわが子のところへ行くためにも罰を受けねばならない。あの人の名前を言ったらあの方は破滅です」(K. 798)と言って恩赦を拒否した。この早朝四時がアンネルの処刑の時刻である。

ここにもグレートヘン＝モチーフ、身分ある男による庶民の娘の誘惑と子殺しのモチーフが出てきて、ドイツ文学におけるこの問題の根の深さを感じさせずにはおかない。「あの娘があんなにいつも Ehre ばかり気に掛けずに、神様におすがりして、どんな苦しいときでも神様を忘れず、人間の Ehre なんか大事にする代わりに、神様のことを思って恥と嘲りを忍んでいたらよかったのに (Wäre das Kind nur nicht stets hinter der Ehre her gewesen und hätte sich lieber an unseren lieben Gott gehalten, hätte ihn nicht von sich gelassen, in aller Not, und hätte seinetwillen Schande und Verachtung ertragen statt ihrer Menschenehre.)」(K. 784)と老婆は言っている。Ehre を重んじる生き方の誤りは、社会の判断 (= 恥と嘲り) にせよ、良心の判断 (= 恥) にせよ、所詮人間の評価でしかないものを過大に重視して、神の判断の代わりに据える点にある。老婆の言葉はこの点を衝いている。

だが、アンネルの物語には Ehre が三つの意味でかかわっている。一つはカスベルが戦死したと聞かされた後、アンネルが身分ある男の誘惑に負けたこと、つまり彼女は Lenz: *Die Soldaten* の Mariane Wesener や L. Wagner: *Die Kindermörderin* の Evchen のように玉の輿に憧れたという意味で身分的な Ehre の誘惑に負けたことである。第二に子殺しの罪を犯す多くの娘と同じように jungfräuliche Ehre を失うという Schande にアンネルは耐えられなかった、そういう意味での Ehre にかかわっている。老婆が言っているのはこれら二つの意味での Ehre に関してである。だがもう一つの Ehre があって、それがなければ「美しいアンネルの物語」はありきたりの誘惑と子殺しの劇にすぎない。子供の父親の名前をあかせば恩赦を与えと言われたのに、名前を言えば相手の男の身の破滅になるからと、アンネルは男の名前を秘したまま犯した罪の償いをする覚悟を変えなかった。これは彼女の最終的な道徳的自律性を証明すると同時に、彼女の自尊心を示している。裏切られたとはいえ、かつて自

分が愛した男の名前を明かす (verraten = 〈明かす〉は〈裏切る〉) でもある) ようなふるまいを恥じたのだ、という風にも解釈できる。しかし Ehre のこの第三の相についてはもう少し考えてみる必要がある。

哀れなアンネルの話を聞いて心動かされた「私」は公爵に「恩赦 (Pardon)」を願い出ると言うが、老婆は冷静に「恩赦より正義のお裁きの方がいい (Gerechtigkeit ist besser als Pardon.)」(K.798) と言う。これは老婆の口から言われるとはいえ、恩赦を拒絶して裁きを受けるアンネルの覚悟を言い表している。ここでテルハイムの「特別の思し召し (Gnade) など結構、正義 (Gerechtigkeit) こそ望むところです」(Mi.490) というあの台詞を思い起こしても、それほど見当ちがいではないだろう。ちなみに Pardon はすぐこの後「私」によって Gnade と言い換えられている。あの個所で、ミンナによって遮られた Meine Ehre —— の後には ist die Gerechtigkeit. と続けるのが適切だと言ったが、アンネルの最後の決意においても Ehre は Gerechtigkeit と結びついている。ただフォン・テルハイム少佐の「正義」が彼自身の Ehre の回復と地上の正しい秩序の再建を意味し、アンネルの望む「正義」が神の正義を意味する、という違いがある。恩赦にこだわる「私」に老婆は「地上の恩赦が何になるというのかね。われわれはみんな最後の審判に出なければならないんだよ」(K.798) と答えている。最後には神の正義が実現される、地上の恩赦など一時のごまかしに過ぎない。信仰心厚い老婆の考え方は現世的思考の枠組みを超越していて、反ヒューマニズムなのである。さっき老婆は「あの娘の晴れの日に (an ihrem Ehrentag)」と言っていたが、Ehrentag とはアンネルの処刑の日、アンネルにおいて神の正義が実現され、神の Ehre が讃えられる日、という意味だったのだ。「Ehre のことは神様だけにお委せよ！」と言う老婆の言葉はアンネルの死において実現される。『ミンナ』では国王の親書によって地上の正義が回復され、それはまた神の正義の比喻でもありえた。アンネルの場合はこれから見るとおり、地上の裁きが神の正義を実行する。領主の恩赦 (ヒューマニズム) は遅れて到着し、神の正義に及ばない。恩赦を拒否して裁きを受ける覚悟をしたアンネルの Ehre の第三の相は、神の Ehre、神の正義と重なるのである。



老婆の頼みは「カスベルとアンネルのために ehrlich な墓が建つようお願いしておくれ。すぐに行っておくれよ」(K.798)である。しかしあくまでも恩赦を求めたい「私」は処刑の時刻が迫っているので韋駄天駆けに駆けて、公爵の館の警備に当たっていた士官候補生グロッシンガー伯の制止を振り切り、まだ夜も明けやらぬことをも顧みず公爵に面会して、事の次第を説明する。「この哀れな娘は誤った Ehre 欲 (Ehrsucht) の犠牲でございます。ある身分の高い男に夫婦の約束まで受け、誘惑されたのです。ああ、それなのに何と殊勝なこと、相手の男の名を申すくらいなら、いっそ死ぬ方がまし、と申しているでございます」(K.801f.)と言うと、公爵はなぜか目に涙を浮かべて、「私」にグロッシンガー伯とともに「恩赦、恩赦 (Gnade)」と叫びながら刑場へ馬を走らせるよう命じる。だが一瞬遅く、彼らが着いたときにはアンネルの処刑は終わっていた。狂気のように馬を駆ったグロッシンガー伯はアンネルの血の滴る首を見せられると、「殺せ、俺を殺してくれ、皆の衆、誘惑したのは俺だ、俺が殺したのだ」(K.802)と叫んでアンネルの亡骸に身を投げかける。

後から馬車で駆けつけた公爵の計らいで、カスベルには望みどおり母親のとなりにアンネルと一緒に ehrlich な墓が建てられることになり、二人の埋葬の際には「Ehre はただ神にのみ委ねよ (Gebt Gott allein die Ehre!)」という言葉についての説教が行なわれ、伍長カスベルは士官に叙せられ、棺の上にグロッシンガー伯から取り上げられた剣 (Ehre の象徴) が置かれ、埋葬の際には三度の礼射を受けることとなった。アンネルは、「私」が公爵のところへ向かう途中で拾い、それを振りながら「恩赦、恩赦」と叫んで公爵の命を伝えようとして果たせなかったあのヴェールを棺に入れて葬られることによって、赦しを受け、ehrlich に死んだ徴とすることが決められた。その立派な葬儀の行われている最中に老婆は息を引き取る。

その後グロッシンガー伯は服毒自殺を遂げ、アンネルは「言いようもなく高貴な人間だった。僕は唾棄すべき人間だった。あの娘は結婚を約束した僕の書面を持っていたのに、それを焼き捨ててしまったのだ」(K.806)云々という彼の最後の手紙が「私」の許に届く。

後に「不幸な Ehre の犠牲者」(K.806)カスベルとアンネルの墓所に記念

碑が建つこととなり、「それは十字架の前にもともに深々と地にひれ伏した偽りの Ehre と真の Ehre (die falsche und wahre Ehre) の二者を表したもので、一方には正義 (die Gerechtigkeit) が剣を揮って立ち、その向かいには恩寵 (die Gnade) が立って一枚のヴェールを投げかけている構図」(K.806) になっていて、この物語の内容を忠実にアレゴリー化している。Gnade は恩赦ではなく、カスベルとアンネルの死後彼らに与えられた Ehre 回復の措置を表しているのであろう。

さて、この Rahmenerzählung で、カスベルとアンネルの話は枠の中の物語で、アンネルの処刑が早朝四時に行なわれることを聞いた「私」が領主である公爵の館へと「恩赦」を求めて韋駄天駆けに走り始めるところからこの物語の外枠を為す話が始動し始める。外枠とは公爵と伯爵令嬢（グロッシンガー伯爵の妹）との物語である。

途中「私」がグロッシンガー伯爵の館のそばを通りすぎたとき、中から女の声で歌う歌が聞こえてくる。そこから百歩ほど行ったところで白いヴェールとそれにつつまれた芳しいいっばいの薔薇が落ちているのを見つけて、恩赦の微かと喜んで拾い上げ、それをかざしながらなおも走り続ける。途中マントに身を包み、顔を隠した男を見かける。公爵の館の前でグロッシンガー伯爵と通せ通さぬの押し問答をやっていると、さっきの男が階段を上って行くのが見え、やがて公爵の部屋の明りが灯る。その後面会を許された「私」から不幸なアンネルの話聞いて公爵はひどく動揺し、「私」がさっき道で拾ったヴェールと薔薇を差し出すと、それを感に耐えないように受け取り、馬を乗り潰してでも刑場に急ぎ、そのヴェールを合図にかざして不幸な娘の命を救うよう命じて、自らも後から馬車で駆けつける。馬車には男装の貴婦人が同乗していて、それがグロッシンガー伯爵の妹と分かる。それについての公爵の釈明は不十分なものである。グロッシンガー伯爵の館のそばを通り過ぎたとき、中から聞こえてきた女声の歌は次のような歌詞である：

Die Gnade sprach von Liebe  
Die Ehre aber wacht

Gnade は愛していると言った、  
Ehre はしかし目覚めていて、

Und wünscht voll Lieb' der Gnade  
In Ehren gute Nacht.

Gnade に愛を込めて  
鄭重に別れを告げた。

Die Gnade nimmt den Schleier  
Wenn Liebe Rosen gibt,  
Die Ehre grüßt den Freier,  
Weil sie die Gnade liebt.

Gnade はヴェールを剥ぎ取り、  
愛は薔薇をあたえた、  
Ehre は求愛する者に応えたのだ、  
Gnade を愛するゆえに。(K. 799)

ヴェールは処女性の徴であり、この詩は、身分ある男 (Gnade) の求愛、乙女 (Ehre = jungfräuliche Ehre) による拒絶、だが、ついには身分ある男 (Gnade) が乙女から純潔 (ヴェール) を奪い、乙女は彼を愛するゆえにその求愛を受け入れ、愛の喜び (薔薇) を与えたのだ、といった経緯が読み取れる。身分ある男 (Gnade) は公爵であり、乙女 (jungfräuliche Ehre) はグロッシンガー伯爵令嬢、この段階ではまだ、奪われた純白のヴェールが薔薇の花とともに路上に捨てられていたことから、公爵と伯爵令嬢との間にグロッシンガー伯とアンネルの関係、つまり身分違いの男女の不幸な誘惑の関係、がまさに生じかけていたことが推測される。だからこそ公爵は、身分ある男に誘惑されて捨てられ、子殺しの罪まで犯すことになった不幸なアンネルの話を聞いて、あれほど動揺したのであり、これが転機となって公爵は伯爵令嬢との秘密の関係を結婚によって正式のものにしたのである。「君は僕の妹の Ehre をも救ってくれたのだ」(K.806) というグロッシンガー伯の手紙の一文はそのことを指していたのだ。

公爵が伯爵令嬢との情事を悔い、彼女と結婚するに至ったきっかけは、哀れなアンネルの話、とくに誘惑され捨てられた娘が、それにもかかわらず相手の男をかばってその名を明かさぬまま死の裁きを受けるという ehrlich な態度に心動かされたことである。内面的 Ehre を重んじるアンネルの態度が公爵の内面的 Ehre を刺激し、グロッシンガー伯爵令嬢の jungfräuliche Ehre を救ったのである。

このブレンターノの物語について精緻極まる解釈を遺した Alewyn は、こ

れによって二人の Ehre の犠牲者たちの死は無駄にならなかった、枠の中のカスペル／アンネルの物語が外枠をなす物語＝公爵／伯爵令嬢の物語にとって警告的な意味合いを持つものになっている、作者はカスペル／アンネルの話をそれ自体のために語ったのではない、その教訓的作用の中にカスペル／アンネルの物語の意義を見ていた、と言っている<sup>15</sup>。

Rahmenerzählung の場合、重心は枠内物語にあって外枠物語は額縁的＝装飾的な意味合いしか持たないことが多い中において、この作品があくまで枠内のカスペル／アンネル物語を中心に据えながらも、外枠の公爵／伯爵令嬢物語が枠内物語と登場人物、テーマ、モチーフの上で重なり合い、互いに交錯しあっている。公爵／伯爵令嬢がカスペル／アンネルに刺激されて悲劇を回避でき、公爵／伯爵令嬢はカスペル／アンネルのお蔭で Ehre を失わずに済んだことへの感謝をも込めて、この二人に、二人の失われた、あるいは失われそうになっていた Ehre (ein ehrliches Grab と jungfräuliche Ehre の象徴としてのヴェール) を返してやる。Ehre を絆にして外枠と枠内が調和的に統合されている。

#### 第四章 貴族的 Ehre の解体：Hermann Sudermann: Die Ehre (1889)

時代は19世紀末、場所はベルリン、シャルロッテンブルクにあるミューリンク工場施設内の立派な表の家とみずぼらしい裏の家、立派な表家の住人は商工業顧問官ミューリンク夫妻と息子クルトと娘レノーレ、裏家の住人はハイネッケ夫妻とその娘アルマ、結婚して今は別のところに住んでいる姉のアウグステとその夫で大工のミヒャルスキ。十数年前ハイネッケはミューリンク家の祝の日に馬車にひかれて手足が不自由になり、それ以後ずっと同家の敷地内の家に住まわせてもらい、庇護を受けている。

主人公はハイネッケ家の息子ローベルト。ミューリンク家の出資で教育を受けさせてもらい、その後、ミューリンクの甥が取り仕切っているインドの商会へミューリンク社の社員としてコーヒーと茶の買い付けに派遣される。商会が存亡の瀬戸際にあるときローベルトはコーヒー王トラストーザールベルク伯爵の知己を得、この人の忠告と指導を得て商会の危機を脱し、ミューリンクの甥が自堕落な生活を続けるうちに商会の実権はローベルトの手に移って、莫大な

利益をミューリンク社にもたらした。こうしてインドで知り合ったパトロンで友人のコービー王トラス伯爵とともにハイネッケ家の長男ローベルトが帰郷するところからこの戯曲は始まる。ローベルトがベルリンを発って実に9年半ぶりのことである。

インドで成功して金持ちになり、上流階級の作法と価値観を身につけてしまったローベルトは久しぶりにベルリンのうらぶれた我が裏家に帰ってきて、家族の生き方、考え方にことごとく違和感を覚える。お気に入りの妹アルマが表家の息子クルト・ミューリンクの情婦になり、姉のアウグステ夫婦が自分の住居の一室を彼らの密会場所に提供してクルトから謝礼金を得ていると知ったとき、彼の驚きと憤りは頂点に達する。ローベルトは東洋植民地の支配階級であるヨーロッパ人社会で身につけてしまった Ehre 感覚をいたく刺激され、妹アルマの jungfräuliche Ehre や我が家の Ehre がこれによって傷つけられたと感じて、監督責任を怠った両親を責め、妹を説得してそのような関係を止めさせようとするが、会話は行き違い、彼の苛立ちはつるばかりである。

ローベルトの妹アルマは世紀末のグレートヘン、アンネル、クララであるが、彼女らの深刻さはアルマにはまったく認められない。若くて美しい自分には青春を享受する権利があり、貧しい身の上で人生を楽しむためには上流階級で金持ちの青年との援助交際しか道がない、と割り切っている。罪の意識など微塵もない。グレートヘン、アンネル、クララとちがってアルマが妊娠していないという点を考慮に入れるとしても、その間の意識の隔たりは相当なものである。アントン親方の立場にあるハイネッケ夫妻は娘の行状をさして気に留める様子もない。実の姉や義理の兄はひそかにアルマとクルトとの交際を後押しし、それによってなにかの利益まで得てほくほく顔なのである。かつて jungfräuliche Ehre を失った娘を待ち受けていた社会の残酷な制裁やそれに対する恐怖は今や昔の物語である。

jungfräuliche Ehre 尊重の風習が社会から消えた分、上流階級の身分的 Ehre と庶民の娘の jungfräuliche Ehre との葛藤はなくなり、誘惑する側からもされる側からもこだわりや抵抗が消えた。身分と富を誇る上流階級の青年は下層市民階級の娘を誘惑して欲望の捌け口となし、埋め合わせに当人やその

家族に金品をくれてやれば済むという意識である。娘自身やその家族も見返りの金子や贈物に満足し、感謝している。当面の生活が辛く苦しいので、一時的にでもそこから逃れて楽しみが味わえ、多少の贅沢ができるなら、それでいい。誇りだの Ehre だのは何不自由なく暮らす上流階級のみが享受できる贅沢である。実際トラスト伯爵は Ehre を ein Luxusgefühl だと言っている (Eh. 53)。上流階級の差別的特権としての Ehre、優越としての Ehre だけは依然健在だが、ミューリンク夫妻やクルトやその友人達にはテルハイムを特徴づけていた noblesse oblige はほとんど見られず、経済的強者の尊大さだけが目につく。アルマとその親姉妹が意識してピカロ的に狡賢く立ち回れば、上流階級の鼻を明かすこともできるのだが、彼らにはそういう才覚も批判精神も問題意識もない。

その中であって一人ヴァレンティンの立場のローベルトだけが Ehre, Ehre を連呼し、歯ぎしりしながら Schande を口にする。ローベルトは家族とは話がまったく通じ合わないので、直接クルトから償い (Genugtuung) の約束を取りつける。普通ならこれは結婚を意味するが、ローベルトはもし結婚の申し込みなら断る気である。彼はどうするか夜を徹して考え、悩む。決闘を考えてみるが、後に残される両親や妹のことを考えると、自分のような立場の者にはやはり Ehre などという贅沢 (Luxus) は許されないと考え直さざるを得ない。彼は妹と両親を説得し、この恥ずべき墮落状況から抜け出すためにはもはやベルリンを離れてインドへ行くしかないことを説得し、説得は成功したかに見える。

彼が徹夜の疲れから眠っている間に表家のミューリンク氏がやって来て、息子クルトが約束させられた「償い」の代わりに手切れ金として4万マルクを手渡して帰る。折から来合わせていた姉夫婦も含めて皆驚喜している。そこへローベルトが起き出してきて喧嘩になる。4万マルクを受け取ることは金で自分を売ることなのだ (Wir verkaufen uns!) と悔しがり、即刻突き返すよう迫るが、そういうローベルトを彼らは、自分たちから当然の報酬と権利を奪い、彼らを苦しめるために無理無体なことを言い張る横暴な邪魔者だとして排除する。

この環境ではみんな Ehrlosigkeit (破廉恥・無節操・賤民根性) を蒙古斑の

ように身に帯びて生まれついている、いったんその環境から外へ出て行って、違った価値観を身につけてしまった自分はまったく異邦人のようだ、身内とはいえ自分達はもはやお互い理解し合えない、とローベルトは嘆く。

ミューリンク氏からインドにおける決算報告を求められているローベルトはピストルを胸の隠しに忍ばせて出かけようとするが、トラスト伯爵が心配して彼を引き留め、二人の間で Ehre についての議論が始まる。

伯爵：君は幻影 (Phantom) を追いかけているのだ。(中略) 誰も君の Ehre を傷つけたりはしていない。君が君の Ehre と呼んでいるものは——羞恥心 (Scham) と——マナー感覚 (Taktgefühl) と——誠実さ (Rechtlichkeit) とプライド (Stolz) からなる混合物で、君がほぼ十年かけて礼節と厳しい義務感とで培ってきたものだが、君の心底からの善意や判断力が簡単に失われたりしないように、そういう Ehre が馬鹿な若造の心ない仕打ちによって君から奪い取られるなんてことはありえないよ。どこかのエレガントならず者が無造作に投げた手袋ごときによって壊されるような類の Ehre に君は何の関わりもないんだ。(中略) 貴族の僕が下層階級出身の君に言うのも何だが、下層階級の連中を相手にするには我慢が必要だ。君の家族を軽蔑してはいけない。彼らの方が君や僕より劣っていると言ってはいけない。彼らは(われわれと)違っている、それだけさ。彼らの心には君には不可解な感覚が住み着いているのさ (In ihren Herzen wohnt ein Empfinden, das dir fremd ist)。君が外国へ行って紳士たちとつき合って九回脱皮を重ねてやっと到達したところへ、家族の者たちに今即刻というのは無理な話だよ。(Eh. 85f.)

別のところでトラスト伯爵は「彼ら(階級の異なる者たち)を(われわれから)架橋しがたく分け隔てているのは感覚の違いだ。どんな階級も独自の Ehre を持っている。彼ら独自のデリカシー、彼ら独自の理想、彼ら独自の言語をすらも (Jede Kaste hat ihre eigene Ehre, ihr eigenes Feingefühl, ihre eigenen Ideale, ja selbst ihre eigene Sprache.)」(Eh. 32) と言い、だから

君の妹は実際にミューリンク家から Ehre を返してもらったのだよ。つまり彼女が役立てうる Ehre をね。だって地上のどんな物にもそれに見合った等価のものがある。表家の Ehre は代償に血を要求するかもしれない、ひょっとしたらだけどね、裏家の Ehre はささやかな金子でもってもう十分すぎるくらいに償われているんだ。(中略) 今問題になっているのは Jungfrauenehre だけれど、これには結局将来のお婿さんに心の純潔と誠実と愛情という一種の持参金をもたらすという以外にいかなる意味があるというのだ。だって Jungfrauenehre があるのは結婚という目的のためだけじゃないか。そこで考えてほしいのだが、君が生まれ育った世界では、君の妹は今日転がり込んできた資本金によって、これまでは考えられなかったほどの良縁に恵まれるとは思わないかね。(Eh. 86f.)

この論理にいぎりたちながらもローベルトは一応自分の家族については納得する。それでもなおクルトからの償いを要求するという主張は引っ込めない。「古臭い (altmodisch)」というトラスト伯爵の批判に対して彼は「私が貴方のような考え方の高みに到達できないのは、私が下層民として生まれ、Ehre 概念を外から植えつけられたからかもしれない。それなら私をどうかこの偏狭さのゆえに破滅するにまかせてほしい」(Eh. 87) とあくまでもクルトとの決闘に固執する。トラスト伯爵は、家族が手切れ金を受け取った今の状態ではクルトは決闘に応じないだろうと言い、少なくともそういう屈辱的状况からは彼を救ってやりたいという思いもあって、4万マルクの小切手を渡して、手切れ金を突き返すという満足を味わえる状態にまではしてやる。伯爵はしかし更にミューリンク家の長女、クルトの姉のレノーレのことをローベルトに思い出させて、決闘を思いとどまらせようとする。ローベルトは身分の違いを考えて気持ちを抑えているが、実は彼とレノーレは相思相愛の仲である。身分の違いを考えてローベルトは愛するレノーレには常に隔てを置いて接しているが、レノーレの方は積極的である。ローベルトが決闘によって弟殺しになった場合レノーレとの結婚は不可能になる、とトラスト伯爵は警告する。Ehre を失った人間であるより弟殺しの方がまだまし (Besser, als daß sie an einen Ehrlosen



denkt!) (Eh.88) と彼は答える。屈辱を受けて決闘も求めずに引き下がるのは ehrlos だという伝統的な考え方に従っているのである。

しかし伯爵は、自分がかつて将校時代に賭博ですった大金を払えなかったので軍隊から除籍されたという過去を持つ Ehre を失った (ehrlös) 人間であることをローベルトに思い出させる。賭博で負けて、24時間以内にその金を払えなければその恥辱を雪ぐべく自決するというのが当時の Ehre ある将校階級の掟だった。彼が支払不能と分かったとき、友人たちは彼の許を去るに際して机の上に装填したピストルを黙って置いていったという。

Ehre を失った者としてこれ以上一刻たりとも生き延びられないというのは私にとって当然に思えた (Daß ich als Ehrloser nicht eine Stunde länger leben könnte, war mir selbstverständlich.)。だが、いざ銃口をこめかみに当てたとき、突然私は思いあつた：これは野蛮で、馬鹿げている。三日前に比べて今のお前に何が足りないというのだ (Was bist du weniger, als du vor drei Tagen warst?)。愚かな若者として支払不能の金額を賭けて負けたのだから鞭打ちには値するかもしれないが、死ぬ必要までではない。何千年ものあいだ人間は Ehre などという幻影 (Phantom der Ehre) に煩わされることなく人生を楽しんできた。今日でも人類の99.9パーセントはそんな風に生きている。彼らのように生き、彼らのように働き、彼らのように生きることを楽しめ。(Eh. 32f.)

24時間以内に賭博の借金が払えず Ehre を失ったトラスト伯爵はヨーロッパを去る。Ehre を失って社会的に死んだ人間は別の世界に行って、そこで生きて行くほかない。『犯罪者』のヴォルフもそうすればやり直せたかもしれないが、そのための気力を失っていた。テルハイムも一時は Ehre 回復の期待を捨てて、「ここだけが世界というわけではない」、「どんな遠い土地に勤めを探す羽目」になってもかまわない、ここから立ち去ろうと考えている。カールは「あの向こうの海に俺の王国がある」と歌って、彼に Schande を味あわせた世界から出て行こうとする。インシュテッテンも「ここから立ち去るのだ、こ

こを去って、文化とも Ehre とも無縁の真っ黒な土人たちのところへ行くんだ。あの幸福な者たち」と言っている。トラスト伯爵は実際にそれをやってのける。世紀末の Ehre 劇でそれを可能にしたのは交通交易の発達と帝国主義である。ヨーロッパに別れを告げ東洋の植民地に赴いて、そこでコーヒー王になったトラスト伯爵はその間に賭博の借金は返済した。「私もいわゆる Ehre を失った人間だが、君も知っての通り今や大した奴 (wackerer Kerl) じゃないのかね」(Eh. 88)。ヨーロッパの貴族社会で ehrlos となっても、国際社会で大物になれば尊敬を受けられる。狭い一地域、一階級での Ehre の喪失は相対化され、意味を失う。ドイツ貴族階級にのみ固有の Ehre にいつまでもこだわり続けることがもはや滑稽な状況が出て来ている。それともう一つ Ehre 的価値観を骨抜きにするものとして貨幣の力がある。jungfräuliche Ehre でさえも金に換えられると考えるのはミューリンク家の人々ばかりではない。別の視点からだが、トラスト伯爵もそう割り切っている。貴族社会の Ehre の掟は24時間以内に借金を払えなければ命を以て償えと命じるが、彼は Ehre の掟を無視した代わりに経済的に「大した奴」になって、後から借金を返済した。貴族社会の Ehre を、あるいは命を、金で贖ってみせたのである。

ローベルトがピストルなど使用しないことを誓ってミューリンク父子との面会に行っている間に、トラスト伯爵はレノーレと話をする。レノーレはミューリンク家であって異邦人。父親が手切れ金を支払って弟をアルマから別れさせた、という話をトラスト伯爵から聞かされて、レノーレは怒りと恥ずかしさのあまりいたたまれない思いである。「私は我が家を支配している忌わしい慣習に全身全霊で反逆します。金、金、金—— Ehre も正義も愛も——みんな金で買うのです。(中略) ごめんなさい、興奮してしまって、——私はまるで他人のことを話すみたいに自分の家族のことを話していますわ」(Eh. 90)。トラスト伯爵はこういうレノーレをローベルトにふさわしい相手だと判断する。

ここでレノーレが弾劾しているミューリンク一家とトラスト伯爵の違いは何だろうか。伯爵も Ehre をお金に置き換えているのではないか。ミューリンク家の人々は自らの Ehre を保持するためにお金を使う。伯爵は Ehre の仮面を剥いで即物的にこれを処理する。

その後トラスト伯爵とクルト、ローベルトとミューリンク父子との間にそれぞれ一悶着あるが、レノーレは両親や弟の驚く中、彼らと決別し、ローベルトについて我が家を出て行くと言明して、二人は「新しい故郷、新しい義務、新しい Ehre」を創ることを誓う。トラスト伯爵は呆然自失しているミューリンク家の人々の前で、係累のない自分はローベルトを相続人に指定すると言い放ち、若い二人とともに立ち去って行く。

ズーダーマンの Ehre 劇はそれ以前の Ehre 文学の裏返しである。トラスト伯爵は Ehre の掟に従えば死ななければならない状況で、それを「野蛮で、馬鹿げている」と判断して、生き延びる方を選んだ。命を賭けても Ehre を守る、ではなく、Ehre を失っても生き延びる。命より Ehre、ではなく、Ehre より命。Ehre 文学におけるコペルニクスの転換はそれだけではない。

Weinrich も言っているように、個人の Ehre はその人の徳や人格についての「周囲の社会による承認」を得て保たれる。個人と社会との間の調和が前提である。従来の Ehre 文学でこの調和が崩れるのは、Ehre を必要とする人物を周囲の社会が冷たく突き放す（『犯罪者』）とか、Ehre を重んじる人物の行動が周囲の社会によって評価されない（アントン親方、一時的にはテルハイムも）とか、Ehre を重んじる人物の Ehre 保持のための努力が周囲の人間や社会によって空しくされる（アントン親方、フーゴー、カスペル）とか、いずれの場合も Ehre を必要とし、重んじる人物が周囲の社会によって裏切られる場合であった。わずかにテルハイムの場合だけ、個人と周囲の社会との間に生じた亀裂は無事に閉じられる。社会が個人に対して Ehre を重んじる行動を求め、それに個人がノーと言うのはトラスト伯爵が始めてである。ここでは個人と社会の合意は個人の側から壊される。インシュテッテンも Ehre を重んじる行動を求める（貴族）社会に向かって理性ではノーと言う。しかし新興国家プロイセンが必要とする有能な高級官僚としてあまりにも国家社会に縛られていたインシュテッテンはその社会での Ehre 保持のための掟に、その正当性を信じていないにもかかわらず、従う他なかった。その点まだ独身の一青年士官にすぎなかったトラスト伯爵は彼よりはるかに自由だったから、自分の気持ちに忠実に行動することが出来たのである。彼のような身分の者にとって、国

際化した世界では一階級、一社会での Ehre に縛られる必要はない。海外に飛び出す覚悟さえ決めれば一階級、一社会の Ehre は無視できる。

「ここだけの話ですが、Ehreなんて存在しないのですよ。(中略) われわれが一般に Ehre と呼んでいるものはたぶん社会的尊敬という太陽がわれわれを照らすときわれわれが投げかける影にすぎないのです (Was wir gemeinhin Ehre nennen, das ist wohl nichts weiter, wie der Schatten, den wir werfen, wenn die Sonne der öffentlichen Achtung uns bescheint.)。何より困るのは社会的な集団や階層の数だけ多様な種類の Ehre が存在することです。こういう状況でどうやって真贋を見分けるのですか？」(Eh. 52) と伯爵は言っている。貴方は Ehre を廃止したがっているようだが、貴紳にとってでは何がいったい Ehre の代わりを務めるのか、と聞かれて、彼は「義務 (die Pflicht)」(Eh. 55) だと答える。Weinrich は、民主制の下で Ehre に代わるものは Tugend (美德) だと言っていた。確かにトラスト伯爵はドイツ貴族社会に固有の Ehre の掟を無視するが、人間社会の掟 (道義・義務) を無視するわけではない。賭博の借金を24時間以内には払えなかったけれども、後になってきちんと返済する。Ehre は無視したが、義務は果たした。幻影の代わりに実質を置いた、と言ってもいい。

トラスト伯爵は Ehre を「影 (Schatten)」とか「幻 (Phantom)」と呼び、ミンナは「亡霊 (Gespenster)」と言い、インシュテッテンは「観念 (Vorstellungen)」と呼ぶ。『犯罪者』のところで述べたように、Ehre は所詮ある社会において自分がどういう者と見なされる (gelten) か、社会の目に自分がどう映る (scheinen) かである。それは Schein なのだ。Ehre は市民社会、あるいは貴族社会の一員であることの Schein (証明書) であり、更に通貨 (Geld ← gelten, Schein = 紙幣) でもある。生きて行く上で不可欠だが、国や時代が変われば通用しない。同時にそれは見せかけ (Schein) でもあるのだ。

だが忘れてならないのは、伯爵が「野蛮で、馬鹿げている」と看破したのはドイツ貴族社会において Ehre を保持するための規則であって、見せかけであると同時に通貨であり証明書でもある Schein としての Ehre そのものではない、という点である。だから、Ehre にとどめを刺したと言われる世紀末の

Ehre 劇から一世紀近くを経てもなお『カタリーナ・ブルームの失われた Ehre』で Ehre 喪失の経緯が問題にされるのである。この Ehre もやはり公民権であり、市民社会のパスポート、証明書 (Schein) である。インシュテッテンが言っているように人間は一人では生きて行けない。社会を作って生きる社会的動物として社会的評価、社会による承認を必要とする。しかも、Sein と Schein の関係は「物自体」と認識の関係に似ていて、実像には永久に到達できないし、多忙な現代人にとって実像に近づく努力などしている暇はないから、結局のところ見せかけ (Schein) が判断の基準 (証明書=Schein) にならざるをえない。作られた偽の Schein による大小の悲喜劇は常に起こりうる。現代マスコミの作り上げる虚像はかつての市井のうわさ話などとは比較にならないほど強大で、実像をやすやすと呑み込んでしまい、人はいつの間にか作り上げられた虚像を引き受けさせられ、生きさせられる、といった状況が生まれて来ている。虚像に操られるのは本人だけではない。周囲の者たちもである。Ehre の喪失が社会的な死を意味するというテーゼは現代でも有効なのである。古い家を出て行く若い二人も Ehre など要らないとは言わない。「新しい Ehre」を創ると宣言している。

## 第一次文献

Lessing, Gotthold Ephraim : Werke in drei Bänden. Hrsg. von Herbert G. Göpfert. München (Hanser) 1982, *Minna von Barnhelm oder Das Soldatenglück* in: 1. Band

同書からの引用は ( ) 内の Mi. の後にページ数を記す。

Lessing, Gotthold Ephraim : *Emilia Galotti* in: 1. Band

同書からの引用は ( ) 内の Em. の後にページ数を記す。

Schiller, Friedrich : *Der Verbrecher aus verlorener Ehre* Stuttgart (Reclam) 1996

同書からの引用は ( ) 内の V. の後にページ数を記す。

Goethe, Johann Wolfgang von: Goethes Werke. Textkritisch durchgesehen und mit Anmerkungen versehen von Erich Trunz 5. Aufl. Hamburg

(Christian Wegner) 1960, *Faust* in: 3. Band

同書からの引用は ( ) 内の Fa. の後にページ数を記す。

Brentano, Clemens : Werke. Hrsg. von Wolfgang Frühwald und Friedhelm Kemp. 3. Aufl. München (Hanser) 1980, *Geschichte vom braven Kasperl und vom schönen Ammerl* in: 2. Band

同書からの引用は ( ) 内の K. の後にページ数を記す。

Hebbel, Friedrich : Sämtliche Werke. Historisch kritische Ausgabe. Besorgt von Richard Maria Werner. Bern (Herbert Lang) 1970, *Maria Magdalene* in: 2. Band.

同書からの引用は ( ) 内の Ma. の後にページ数を記す。

Stifter, Adalbert : Sämtliche Werke. Hrsg. von Franz Hüller, Karl Koblichke, Josef Nadler. Hildesheim (Gerstenberg) 1972. *Das alte Siegel* in: 3. Band

同書からの引用は ( ) 内の Si. の後にページ数を記す。

Sudermann, Hermann : *Die Ehre* Stuttgart (Reclam) 1982

同書からの引用は ( ) 内の Eh. の後にページ数を記す。

Fontane, Theodor : *Effi Briest* (1895) Stuttgart (Reclam) 1981

同書からの引用は ( ) 内の Effi の後にページ数を記す。

Böll, Heinrich : *Die verlorene Ehre der Katharina Blum* Deutscher Taschenbuch Verlag. 34. Auflage 1998

## 第二次文献

Weinrich, Harald : *Mythologie der Ehre* in: Merkur (1969) S. 224 – 239

Göbel, Hermut: *Minna von Barnhelm oder Das Soldatenglück* (1767) Theater nach dem Siebenjährigen Krieg. in: Interpretationen, Lessings Dramen. Stuttgart (Reclam) 1994 S.45 – 86

Erläuterungen und Dokumente: G.E.Lessing *Minna von Barnhelm*. Hrsg. von Jürgen Hein. Stuttgart (Reclam) 1970

Alewyn, Richard : *Brentanos Geschichte vom braven Kasperl und vom schönen*

- Annerl* in: Interpretationen Bd. IV, Deutsche Erzählungen von Wieland bis Kafka, Hrag. von Jost Schillemeit S.101 – 150
- Wiese, Benno von: *Clemens Brentano: Geschichte vom braven Kasperl und vom schönen Annerl.* in : Die deutsche Novelle von Goethe bis Kafka, Düsseldorf (August Bagel) 1962 S.64 – 78
- Kluge, Gerhard: *Clemens Brentano: Geschichte vom braven Kasperl und vom schönen Annerl.* in : Interpretationen. Erzählungen und Novellen des 19. Jahrhunderts Band 1, Stuttgart (Reclam) 1996 S. 221 – 256
- Erläuterungen und Dokumente: *Clemens Brentano Geschichte vom braven Kasperl und vom schönen Annerl.* Von Gerhard Schaub. Stuttgart (Reclam) 1990
- Hein, Edgar: *Friedrich Hebbel: Maria Magdalena*, Interpretation von Edgar Hein, Oldenbourg Interpretationen Band 37, München (Oldenbourg) 1. Aufl. 1989
- Häntzschel, Günter: *Friedrich Hebbel: Maria Magdalena.* in : Interpretationen. Dramen des 19. Jahrhunderts. Stuttgart (Reclam) 1997 S. 253 – 285
- Erläuterungen und Dokumente: *Friedrich Hebbel Maria Magdalena.* Hrag. von Karl Pörnbacher Stuttgart (Reclam) 1970
- 阿部謹也『刑吏の社会史』中公新書 1988年
- 阿部謹也『中世の星の下で』ちくま文庫 1988年
- 阿部謹也『中世賤民の宇宙』筑摩書房 1995年
- ビルクナー (佐藤正樹訳) 『ある子殺し女の記録』人文書院 1990年
- 藤田幸一郎『手工業の名誉と遍歴職人』未来社 1994年
- 山田勝『決闘の社会文化史』北星堂 1992年
- ルネ・ジラルール『欲望の現象学』法政大学出版

注)

- 1 Ehre とその関連語の幾つかは訳語を用いない。理由は序論 4 ～ 5 ページ。
- 2 阿部謹也『中世の星の下で』S. 140f.

- 3 Alewyn, Richard: S. 141
- 4 阿部謹也『刑吏の社会史』S. 14、藤田幸一郎 S. 57
- 5 関楠生訳『犯罪者』S. 25 : シラー、世界文学大系18 筑摩書房 1959年  
所載
- 6 阿部謹也『中世賤民の宇宙』S. 184ff
- 7 阿部謹也『刑吏の社会史』S. 21f.
- 8 Hein, Edgar : S. 40
- 9 阿部謹也『中世の星の下で』S. 138ff, S. 194ff他
- 10 9時というのはキリスト処刑の時刻であり、クラララの身代りの犠牲を暗示しているという解釈もある。Hein, Edgar : S. 24
- 11 会話の部分のみ抜粋して翻訳引用した。
- 12 あの Ehrlich bezahlt! にも債務者であり続けることを潔しとしないアントン親方の思いを読み取ることができる。負い目、引け目、債務に対する嫌悪は、テルハイム、カスペル、アンネル、アントン親方、フーゴー、ローベルトに共通する特徴。その点トラスト伯爵が24時間以内の借金返済を反古にして海外に逃亡したのは Ehre 無視の行為として興味深い。後になって返済はされるが。
- 13 小宮曠三はこの個所を「いまは、こちらのありあまる財産に引け目を感じて」と訳している。しかしこの mit allen Reichtümern は unter allen Umständen 「どんなことがあっても」などと同じ用法で「どんなに財産があろうとも」という意味であろう。第二に小宮の解釈はたぶんその通りとしても、こんなふうに訳してしまうと、ちょっとミモフタモナイという感じがする――。
- 14 Kluge, Gerhard: S. 316
- 15 Alewyn, Richard: S. 121



## Aspekte der Ehre in der neueren deutschen Literatur

Tomotaka TAKEDA

In der neueren deutschen Literatur gibt es eine Reihe der Werke, als deren Thema die Problematik der Ehre gehalten werden kann: von Lessings *Mimma von Barnhelm* (1767) bis Sudermanns *Die Ehre* (1889).

Harald Weinrich beschränkt sich in seinem Aufsatz *Mythologie der Ehre* (in Merkur 1969) fast nur auf die adlige Ehre, indem er die bürgerliche Ehre ignoriert, die unehrliche Berufsleute von den ehrlichen Bürgern unterscheidet. Er lehnt auch die innere Ehre ab, weil die Ehre "die soziale Billigung der Umwelt" sei, also die Beurteilungen der anderen voraussetze.

In Schillers *Der Verbrecher aus verlorener Ehre* (1786) geht es aber um die bürgerliche Ehre, die dem Vorbestraften ewig vorenthalten ist, so daß er die Ehre entbehren lernen muß, sein Wildschießen fortsetzt, schließlich einen Mord begeht, um sich tiefer in den Wald zu flüchten und dort zum Anführer der schändlichen Rotte gewählt zu werden. Sein Schicksal, er heißt Wolf, ist dem des mittelalterlichen Werwolves, der für friedlos erklärt und von der Gemeinschaft ausgewiesen wurde, sehr ähnlich. Der Werwolf war ehrlos, entehrend genannt. Der Verlust der Ehre bedeutet hier wie dort einen sozialen Tod. Schiller kritisiert an der damaligen bürgerlichen Gesellschaft deren Kaltherkigkeit, die dem Vorbestraften keine Chance zur Rehabilitation gibt.

Meister Anton ist stolz auf seine altzünftige bürgerliche Ehre, an der er dank dem Meister Gebhard teilnimmt. Seine ehrliche Dankesbezeugung, daß er seinem altkranken Lehrer, dem er "alles verdankt", tausend Taler, die er für die Mitgift Klaras erspart hat, hergibt, bringt ihn und seine Tochter um die Ehre, indem der enttäuschte Mitgiftjäger Leonhard

die schwangere Klara sitzen läßt. Die Furcht des Meisters Anton vor der Schande, dem Verlust der altmodischen jungfräulichen Ehre, treibt seine Tochter in die Enge und schließlich in den Selbstmord. Das ist die wesentliche Struktur dieses Trauerspiels.

Auch der Held von Stifters *Das alte Siegel* (1843) opfert der Ehre, die schon aus der Mode ist, "das warme, ewige, klare Leben" mit der schönen guten Cöleste, und als seine Haare weiß sind, ringt er mit Gewissensbissen und wirft "das alte Siegel (das Symbol der alten Ehre) in eine unzugängliche Schlucht".

Bei der Ehre von Major Tellheim handelt es sich um die innere Ehre, die Weinrich bestreitet. Seine Ehre bedeutet einerseits <noblesse oblige>, das der Sieg über seinen Egoismus ist, andererseits deutet sie aber auch den Willen zur Überlegenheit an, also zum Sieg über die anderen. Daher spricht Minna von "ehrlich" und "edel", und auch von "unverzeihlicher Stolz". In dieser Komödie steckt ein Keim zur Tragödie. Man hätte aus seiner ehrlichen Handlung beinahe ein Verbrechen machen können. Der Einklang der inneren Ehre mit der billigenden Umwelt droht zu brechen. Er zweifelt vorübergehend an der gerechten Ordnung der Welt. Dank dem königlichen Handschreiben heilt die Wunde in seinem Verhältnis mit der Gesellschaft, was bei dem Meister Anton und Hugo nicht der Fall ist.

In Brentanos Geschichte geht es um die Unvereinbarkeit der menschlichen und der göttlichen Ehre. Wie sehr sich auch der Mensch um die Wahrung der Ehre anstrengt, seine Bemühung kann durch die unfaßbaren Fügungen vereitelt werden. "Tue deine Pflicht und gib Gott allein die Ehre!" sagt die alte Bäuerin.

Graf von Trast findet als junger Offizier den Befehl der adligen Ehre brutal und dumm und beschließt ehrlos weiterzuleben, statt um der Ehre willen Selbstmord zu begehen. Nicht "lieber Tod als Schande",

sondern "lieber Leben als Ehre". Er verläßt Europa und wird in Indien Kaffeekönig. Was ihm die Ignorierung der Ehre der deutschen adligen Gesellschaft ermöglicht, ist sein Kosmopolitanismus und auch die Wirtschaftskraft. Ein weltweiter Horizont relativiert die Ehrensitte eines Landes, und die ökonomische Macht stellt die Standesehre in den Schatten.

平成10年12月18日 印刷  
平成10年12月25日 発行 (非売品)

編集兼発行者 広島大学文学部  
〒739-8522  
東広島市鏡山一丁目2-3

印刷者 鯉城印刷株式会社  
〒730-0805  
広島市中区十日市二丁目8-2